

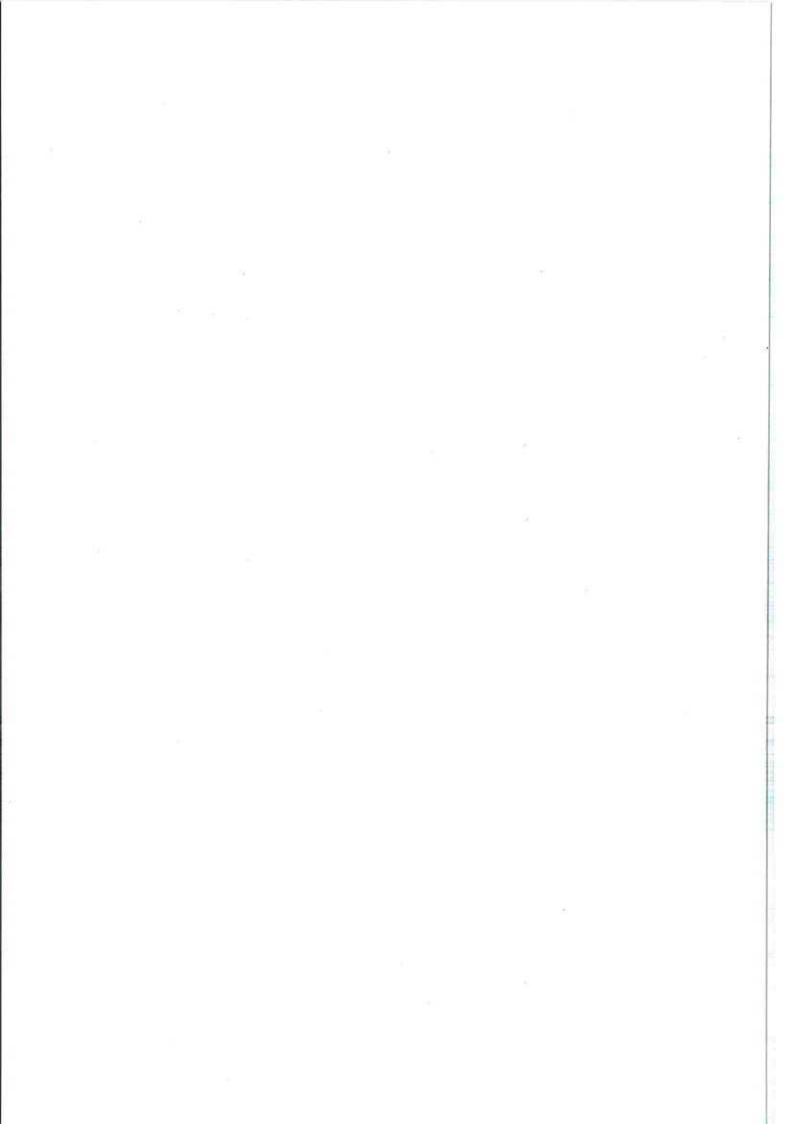
玉名市文化財調査報告 第16集

吉丸前遺跡

一般国道208号玉名バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2007（平成19）年、3月

玉名市教育委員会





吉丸前遺跡とその西方遠景

左端を国道208号線が西へ向かって走り、高瀬大橋をわたって高瀬の町に入る。高瀬大橋の下流側に架かる鉄道鉄橋のあたりが船着場跡である。右奥が小代山、奥に有明海が広がる。調査区から菊池川へと伸びる尾根の先端には「城ヶ辻」の地名が残る。



吉丸前遺跡とその東方遠景

台地縁辺を木葉川が右手から左手に向かって流れ、菊池川に注ぎ入る。
その奥には梅林傘田が広がり標高382mの木葉山ほか国見山地の山塊が連なる。



吉丸前遺跡周辺調査前遠景

遺跡周辺を南から望む。方形に区画なす堀状遺構の名残として畑が周辺より低くなっている。南辺は凹道あたりか。
区画の西側は谷となって落ち込む。



調査区全景(中世期)



調査Ⅱ区全景(中世期)南から



空堀状遺構 南から



空堀状遺構 北から



空堀状遺構 西から



空堀状遺構(S017)
土層堆積状況

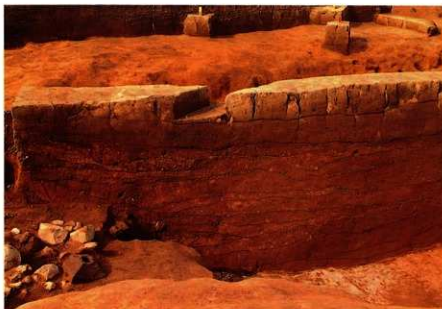


空堀状遺構(S023)
土層堆積状況



空堀状遺構(S021)
土層堆積状況

空堀状遺構(S001)
土層堆積状況



土壇(S046)
人骨検出状況



調査区土層堆積状況



発刊のことば

玉名市は、旧石器時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、各所に豊富な文化財が所在しています。近年は、国道208号玉名バイパスの建設も進み、九州新幹線の整備も着々と進行しており、熊本県北部における政治経済、教育文化、観光の中心都市としてさらなる発展を遂げようとしています。

このような中で、玉名市教育委員会ではさまざまな開発事業との調整を図り、発掘調査をはじめとする文化財調査の円滑な遂行のため、専門職員の増員を図るなど、体制の充実に努めてまいりました。進行している九州新幹線をはじめとする各種事業に対応するため、玉名市内に所在する文化財の状況把握にも常に取り組み、埋蔵文化財行政の改善・充実に努力しているところであります。また、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、平成13年度より一般国道208号玉名バイパス建設に先立って発掘調査を行いました玉名市寺田に所在する吉丸前遺跡の調査成果をまとめたものです。本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また、学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作成にあたって、各方面で多くの方々にご指導、ご協力を賜ったことに対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月31日

玉名市教育委員会
教育長 菊川茂男

例 言

1. 本書は、国道208号玉名バイパス建設に伴う、玉名市寺田地内に所在する吉丸前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 確認調査は熊本県教育庁文化課が行い、発掘調査は国土交通省より委託を受けた玉名市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 発掘調査は平成13年11月8日～平成16年3月31日までの期間で実施した。
4. 発掘調査における遺構実測、遺物取上、写真撮影は竹田宏司、田中康雄、萱父雅史、古閑敬士、大倉千寿、北睦美、藤好貴彦、荒木が行った。調査Ⅱ区の中世遺構については、一部（株）ダイチプランに測量委託した。
5. 自然科学的分析は、（株）古環境研究所に委託した。
6. 整理作業は、玉名市教育委員会において平成16年4月1日から平成18年3月31日までの期間実施した。
7. 遺物の実測は田中、古閑、大倉、荒木が行ない、遺構・遺物のトレースは早川イツエ、権藤功、荒木が行った。
8. 遺物の写真撮影は、荒木が行った。
9. 方位はすべて、公共座標Ⅱ系に基づく北を指している。
10. 本書の執筆・編集は荒木が行った。
11. 出土遺物の整理作業は玉名市教育委員会で行った。
12. 出土遺物は玉名市教育委員会文化財整理室で保管している。

本文目次

第I章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 調査の契機	1
2. 事業照会と予備調査の経過	2
3. 発掘調査の進捗	2
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の方法と経過	4
1. 試掘・確認調査	4
2. 調査の方法	4
3. 調査日誌抄録	6
第II章 遺跡の概要	11
第1節 遺跡の環境	11
1. 地理的環境	11
2. 歴史的環境	13
第2節 遺跡の概要	18
第3節 遺跡の層位と包含層	18
第III章 調査の成果	21
第1節 縄文時代晩期の遺構と遺物	21
1. 遺構	21
i) 集石遺構	21
ii) 炉穴	22
iii) 土坑	22
2. 遺物とその分布	38
第2節 古代の遺構と遺物	52
1. 遺構	52
i) 住居址	52
ii) 土壌	58
iii) 溝状遺構	58
iv) 廃棄土坑	58
v) 土坑	66
2. 遺物とその分布	66
第3節 中世の遺構と遺物	
1. 遺構	71
【方形区画外】	
i) 空堀状遺構	71
ii) 溝状遺構	77

iii) その他	77
iv) ビット	84

【方形区画内】

i) 空堀状遺構	84
ii) 溝状遺構	102
iii) 墓	110
2. 遺物とその分布	113

第4節 その他の時代の遺物	115
---------------	-----

1. 遺物	115
-------	-----

第IV章 自然科学分析	129
-------------	-----

第V章 総括	175
--------	-----

挿 図 目 次

第1図 調査前測量図・試掘確認調査トレンチ位置	4
第2図 遺跡周辺地形図(区画想定図)	5
第3図 調査区配置図	7
第4図 地形区分図	11
第5図 吉丸前遺跡の位置	12
第6図 主要遺跡分布図	16
第7図 基本層序柱状図および観察表	18
第8図 土層堆積図(調査区内)	19
第9図 遺構配置図(縄文時代)	23
第10図 集石遺構(S047)	25
第11図 集石遺構(S047)出土遺物1	26
第12図 集石遺構(S047)出土遺物2	27
第13図 炉穴(S053)	28
第14図 炉穴(S050・S055)	29
第15図 土坑(SK)	30
第16図 土坑(P2556)	32
第17図 土坑(S058)	33
第18図 土坑(S058)出土遺物	34
第19図 土坑(S054・S061)	35
第20図 S070出土遺物	36
第21図 土坑(S051・S052・S056・S057)	37
第22図 包含層出土縄文土器(1)	39
第23図 包含層出土縄文土器(2)	40
第24図 包含層出土縄文土器(3)	41

第25図	包含層出土石器 (1)	43
第26図	包含層出土石器 (2)	44
第27図	包含層出土石器 (3)	45
第28図	包含層出土石器 (4)	46
第29図	包含層出土石器 (5)	47
第30図	包含層出土石器 (6)	48
第31図	包含層出土石器 (7)	49
第32図	包含層出土石器 (8)	51
第33図	遺構配置図 (古代)	53
第34図	竪穴住居址 (S039)	55
第35図	竪穴住居址 (S067)	56
第36図	竪穴住居址 (S067)	57
第37図	土壇 (S048・S049)	59
第38図	溝状遺構 (S038) 1	60
第39図	溝状遺構 (S038) 2	61
第40図	溝状遺構 (S038) 3	62
第41図	溝状遺構 (S037)	63
第42図	土坑 (S059・P4104・S068)	64
第43図	土坑 (S040・S041・S042・S044)	65
第44図	包含層出土遺物 1	67
第45図	包含層出土遺物 2	68
第46図	包含層出土遺物 3	69
第47図	包含層出土遺物 4	70
第48図	遺構配置図 (中世) 1	72
第49図	空堀状遺構 (S001・S062)	73
第50図	空堀状遺構土層断面図 (S001・S062)	74
第51図	空堀状遺構 (S001) 出土遺物	75
第52図	空堀状遺構 (S062) 出土遺物	76
第53図	溝状遺構 (S065)	78
第54図	溝状遺構 (S002)	79
第55図	溝状遺構 (S065・S066・S002) 出土遺物	80
第56図	空堀状遺構 (S001)・溝状遺構 (S065) 出土石塔	81
第57図	調査 I 区ピット配置図	82
第58図	方形区画状遺構 (S007)	83
第59図	遺構配置図 (中世) 2	85
第60図	空堀状遺構 (S019b)	88
第61図	空堀状遺構 (S019b) 断面図	89
第62図	空堀状遺構 (S019b) 出土遺物	90

第63図	空堀状遺構 (S019a)	91
第64図	空堀状遺構 (S019a) 土層断面図	93
第65図	空堀状遺構 (S019a) 出土遺物 1	95
第66図	空堀状遺構 (S019a) 出土遺物 2	96
第67図	空堀状遺構 (S017・S023)	97
第68図	空堀状遺構 (S017) 土層断面図	98
第69図	空堀状遺構 (S023) 土層断面図	99
第70図	空堀状遺構 (S017) 出土遺物	101
第71図	空堀状遺構 (S021)	103
第72図	空堀状遺構 (S021) 土層断面図	104
第73図	空堀状遺構 (S021) 出土遺物	105
第74図	溝状遺構 (S010)	107
第75図	溝状遺構 (S031・S032・S033・S034・S035)	108
第76図	溝状遺構 (S026・S027・S028)	109
第77図	墓 (S046)	111
第78図	墓 (S030・S045)	112
第79図	墓 (S046・S030・S045) 出土遺物	112
第80図	包含層出土遺物	114
第81図	その他の時代の遺物	115
第82図	自然科学分析試料採取地点	129
第83図	玉名市吉丸前遺跡、No. 1地点における植物珪酸体分析結果	139
第84図	玉名市吉丸前遺跡、No. 2地点における植物珪酸体分析結果	140
第85図	玉名市吉丸前遺跡、No. 3地点における植物珪酸体分析結果	141
第86図	玉名市吉丸前遺跡、No. 4地点における植物珪酸体分析結果	142
第87図	玉名市吉丸前遺跡、No. 5地点における植物珪酸体分析結果	143
第88図	玉名市吉丸前遺跡、No. 6地点における植物珪酸体分析結果	144
第89図	玉名市吉丸前遺跡、No. 7地点における植物珪酸体分析結果	145
第90図	玉名市吉丸前遺跡、No. 8地点における植物珪酸体分析結果	146
第91図	玉名市吉丸前遺跡、No. 9地点における植物珪酸体分析結果	147
第92図	玉名市吉丸前遺跡、No. 10地点における植物珪酸体分析結果	148
第93図	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	159
第94図	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	165
第95図	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	169
第96図	吉丸前遺跡における蛍光X線分析結果 (おもな元素: %)	170
第97図	吉丸前遺跡から出土した土器等のK2O-CaO分布図およびRb20-SrO分布図	171

表 目 次

第1表	縄文時代出土石器観察表	117
第2表	縄文時代出土石器観察表	119
第3表	古代出土遺物観察表	121
第4表	中世出土遺物観察表	124
第5表	中世出土石器製品観察表	128
第6表	遺物観察表	128
第7表	吉丸前遺跡自然科学分析一覧表	129
第8表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	135
第9表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	136
第10表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	137
第11表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	138
第12表	吉丸前遺跡、S019a底部堆積層における花粉分析結果	152
第13表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	158
第14表	玉名市、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果	164

図 版 目 次

図版 1	土層堆積状況 IV～VII層堆積状況
図版 2	S047・掘り込み検出状況・遺物出土状況・遺物出土状況・S047
図版 3	S053・完掘（北から）・完掘（東から）・半掘・土層堆積状況・土層堆積状況
図版 4	S050・完掘・焼土塊出土状況・土層堆積状況、S055・土層堆積状況、SK
図版 5	P2556・遺物出土状況・土層堆積状況、S058遺物出土状況、S051、S052、S056
図版 6	S039・完掘・土層堆積状況・カマド・カマド
図版 7	S039カマド・カマド完掘・検出状況、S067完掘
図版 8	S067
図版 9	S048（南から）・（北から）土層堆積状況、S049・土層堆積状況
図版10	S038（南から）・（北から）
図版11	S037（東から）、S038・検出状況・土層堆積状況・S037土層堆積状況
図版12	P4104カキ殻出土状況、S059・土層堆積状況、S040、S041、S042、S044、ピット
図版13	調査Ⅱ区表土剥ぎ後、調査Ⅱ区全景
図版14	調査Ⅰ区全景、調査Ⅱ区全景
図版15	調査Ⅰ区全景、調査Ⅱ区全景
図版16	S062・S001、S062土層堆積状況・土層堆積状況・石塔等出土状況・検出状況
図版17	S062、S001
図版18	S001、土層堆積状況、石塔類出土状況、石塔類出土状況、土層堆積状況
図版19	S001周辺土層堆積状況、S065・石塔類出土状況、S065、S066・土層堆積状況

- 図版20 S002土層堆積状況・土層堆積状況・土層堆積状況・S002（南から）・（北から）
- 図版21 S019b（西から）・（東から）
- 図版22 S019b・土層堆積状況・土層堆積状況・土層堆積状況・土層堆積状況
- 図版23 S019a（北から），S019a・S017（南東から）
- 図版24 S019a（東から）・底面礫出土状況・土層堆積状況・屈曲部・土層堆積状況
- 図版25 S017・S019a（南から）・S017（北東から）
- 図版26 S017・S023切り合い状況，S017列石出土状況・土層堆積状況・土層堆積状況
- 図版27 S023（調査Ⅱ区）・完掘
- 図版28 S023土層堆積状況（南から）・（東から）
- 図版29 S023土層堆積状況（東から）・（北から）・列石出土状況・S026～S028・S021
- 図版30 S021（南から）・（北から）
- 図版31 S021（西から）・礫出土状況・土層堆積状況・土層堆積状況・土層堆積状況
- 図版32 S010（南から）・S010（東から）
- 図版33 S010土層堆積状況
- 図版34 S031土層堆積状況，S032・S034，S020・S035，S026・S027・S028，S027，S028
- 図版35 S046（南から）・（西から）・頭骨・遺物出土状況・土壙・礫検出状況・完掘状況
- 図版36 S030・S045
- 図版37 調査Ⅲ区拡張部・試掘トレンチ土層断面図
- 図版38 出土遺物 S047 SK
- 図版39 出土遺物 P2556 S058
- 図版40 出土遺物 S054 S061 S070
- 図版41 出土遺物 包含層
- 図版42 出土遺物 包含層
- 図版43 出土遺物 包含層
- 図版44 出土遺物 包含層
- 図版45 出土遺物 包含層
- 図版46 出土遺物 S039 S067 S049 S038
- 図版47 出土遺物 包含層
- 図版48 出土遺物 包含層 S062・S065
- 図版49 出土遺物 S065 S066 S002 S001 五輪塔
- 図版50 出土遺物 S019a S019b
- 図版51 出土遺物 S019a S017
- 図版52 出土遺物 S017 S021
- 図版53 出土遺物 包含層 S010 S027 S046 S030 S045

第 I 章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査の契機

昭和47年建設省九州地方建設局熊本工事事務所では、総延長8.5kmを計る一般国道208号玉名バイパス改築構想をとりまとめた。これは、玉名市街地の中心を東西に走る主要幹線である一般国道208号線の交通渋滞緩和と交通環境の改善を目的とし、あわせて地域開発計画の支援と緊急輸送道路ネットワークの充実を目的とするものである。

なお、九州新幹線新玉名駅周辺整備構想では、新幹線新駅への主要なアクセス道路として位置づけられ、その重要性はさらに高まっている。

2. 事業照会と予備調査の経過

建設省九州地方整備局熊本工事事務所から同事業の計画が提出されたことを受け、昭和53(1978)年度熊本県教育庁文化課により遺跡台帳との照会と現地踏査が行われた。その結果、吉丸西遺跡、吉丸前遺跡、城ヶ辻古墳群、城ヶ辻城跡、玉名平野条里跡、柳町遺跡、惣萩遺跡、立願寺大塚遺跡、大塚古墳、松尾遺跡、山田松尾平遺跡、中島遺跡、五郎丸遺跡、築地那木野遺跡、西の山遺跡、池田遺跡などの周知の埋蔵文化財包蔵地について建設計画に係ることが確認された。その後速やかに国土交通省に対して上記の踏査結果を報告し、試掘・確認調査の必要が通知された。

昭和54(1979)年7月から10月にかけて、最終的な路線決定のために城ヶ辻古墳群および大塚古墳について確認調査が熊本県教育庁文化課により行なわれ、その成果をもとに路線を一部変更し、両者とも墳丘・周溝を保存する運びとなった(高谷和生「城ヶ辻古墳群発掘調査」『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集 熊本県教育委員会)。しかし、その後の協議で、それ以外の遺跡で設計上やむなく掘削せざるを得ない部分については発掘調査を実施することとなった。

平成3年及び平成5年度には立願寺大塚遺跡の発掘調査が実施され(水野哲郎・米村大編『立願寺大塚遺跡』熊本県文化財調査報告第210集 熊本県教育委員会 2003)、平成6年から平成11年にかけて柳町遺跡の発掘調査が実施されている(高谷和生編『柳町遺跡I』熊本県文化財調査報告第200集 熊本県教育委員会 2001)。なお調査完了後、平成6年4月13日から玉名市玉名から玉名市立願寺までの約1.0kmの区間について暫定2車線でも供用開始された。

平成3年度に惣萩遺跡の確認調査が実施されているが、薄い包含層のみで遺構は検出されていない。平成3年度および5年度には熊本県教育庁文化課により玉名平野中心部に所在する玉名平野条里跡範囲内の確認調査が進められたが、事前の予想通りに玉名市河崎字柳町地内にお

第1節 調査の経緯

いて弥生～古墳時代、奈良時代末～平安時代にまたがる大規模な遺跡の所在が確認された。

平成6年度から熊本県教育庁文化課により柳町遺跡の記録保存を目的とする発掘調査が開始されたが、法面からの出水や地下からの浸透水が多く、調査効率が著しく減じる事態となった。そのため、本事業が地元にとって優先すべき事項であることも勘案して、早期の調査完了を期すべく平成7年度からは熊本県教育庁文化課と玉名市教育委員会社会教育課との合同調査とする体制を整え、平成11年度にて柳町遺跡の発掘調査が完了した。

平成7年度にはバイパス基点側の玉名市寺田地内の試掘確認調査が進められ、その結果大堂遺跡については遺構、遺物とも確認されず、吉丸前遺跡については調査範囲の確定がなされた(平成8年2月7日付け教文1520号で概要報告)。平成10年度に城ヶ辻城跡の調査対象範囲が確定している(平成8年2月7日付け教文1520号で概要報告)。

平成13年度は玉名市教育委員会では柳町遺跡の整理・報告書作成作業を行っていたが、玉名バイパス建設推進の立場から当初熊本県文化課で調査予定であった吉丸前遺跡の発掘調査を急遽担当することとなった。これは県内の国道事業が国道208号線玉名バイパスに加え国道57号線北バイパス、国道3号線植木バイパスなどが進行しておりとも多くの埋蔵文化財包蔵地に路線に係ることから県文化課の調査体制が即応できない状況にあったためである。平成13年12月変更契約を締結し平成13年11月に予備調査、平成14年1月から調査員2名作業員30名を投入して本発掘調査を開始した。そのため柳町遺跡の整理・報告書作成作業は吉丸前遺跡の調査報告書刊行まで凍結することとなった。

3. 発掘調査の進捗

発掘調査は平成13年11月から平成17年3月までの間、計29ヶ月行なった。調査区内に工事用進入路及び里道を確保しつつ調査を進行しなければならないことから、調査区をⅠ～Ⅳ区に分け、平成13年に調査Ⅰ区、平成14年度に調査Ⅱ区とⅣ区の一部の中世遺構面以上の調査を行い、平成15年度にⅢ区の調査を着手、併せてⅠ・Ⅱ・Ⅳ区の縄文時代・古代の調査を行うこととなった。

4. 整理・報告書作業の経過

現地での発掘作業と平行して出土遺物の洗浄・注記・接合等を行ない、報告書作成は平成16年度及び平成17年度の2ヵ年行った。なお、出土遺物、記録図面・写真は玉名市文化財整理室で収蔵・保管している。

第2節 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成は、下記の体制により実施した。なお、職員の所属等は当時のものである。また平成17年10月3日をもって玉名市は玉名郡岱明町、横島町、天水町と合併し、新「玉名市」となり新たに文化課が発足した。

〔発掘調査〕

事業主体 国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所
 調査主体 玉名市教育委員会
 調査責任 教育長 三次昭也（平成13～15年度）
 # 森 義臣（平成15年度）
 調査総括 社会教育課長 牧野和明（平成13～15年度）
 庶務担当 参事 徳永太郎（平成13～14年度）
 主事 東田優子（平成13年度）
 主事 高田智華（平成14年度）
 主事 清田静香（平成15年度）
 調査担当 主任 田中康雄（平成13年度）
 参事 竹田宏司（平成14年度）
 技師 荒木隆宏（平成15年度）
 調査員 藪父雅史（平成13・14年度）
 調査員 古閑敬士（平成13～15年度）
 調査員 大倉千寿（平成14・15年度）

〔整理・報告書作成〕

事業主体 国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所
 調査主体 玉名市教育委員会
 調査責任 教育長 森 義臣（平成16年度～17年11月29日）
 教育長 菊川茂男（平成17年11月30日～平成18年3月31日）
 調査総括 社会教育課長 西田道彦（平成16年度）
 社会教育課長 西田道彦（平成17年度）
 文化課長 西田道彦（平成17年度）
 庶務担当 主事 清田静香（平成16・17年度）
 調査担当 文化係長 竹田宏司（平成16・17年度）
 主任 田中康雄（平成16・17年度）
 技師 荒木隆宏（平成16・17年度）
 調査員 古閑敬士（平成16・17年度）
 調査員 大倉千寿（平成16・17年度）

〔発掘調査現場作業員〕

荒木征子、石原秀幸、石本憲史、岩本悦子、上田サワ子、牛丸トモエ、狩塚久代、
 KAWAHARA SHIZUO、川本曉美、北川速夫、北田隆治、北 睦美、北村貴代、木下洋一、古
 賀武子、坂本廣子、笹木秀利、佐藤建郎、鹿井正剛、鹿本勝子、杉本忠之、関本睦子、高森公

第2節 調査の組織

子、瀧下勝代、竹内伴英、竹下英樹、田添幸二、田中英樹、田畑敏春、永田ツヤ、中山 勇、西川弘子、西嶋美玲、西田京子、東菫家光、東ノブ子、東 竜二、平岡由紀子、平川夏子、平川ミツヨ、平野輝代、平山竹次、平山雄大、広瀬悦子、福島年春、福田拓也、藤好貴彦、堀内一正、堀田 秋、本田サイ子、松永 勉、松村健治、水村つよし、水本孝子、峯部健次、宮田重義、村上和子、村田尚輝、本村吉祐、本山千代子、森川セツ子、山口義春、雪野昭子、吉岡堅三

〔発掘調査整理作業員〕

荒木麻衣、古賀武子、五野富美子、権藤功、坂崎郷子、早川イツエ、平野輝代

〔専門調査員〕

鋤柄俊夫（同志社大学附属博物館）、山中敏文（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

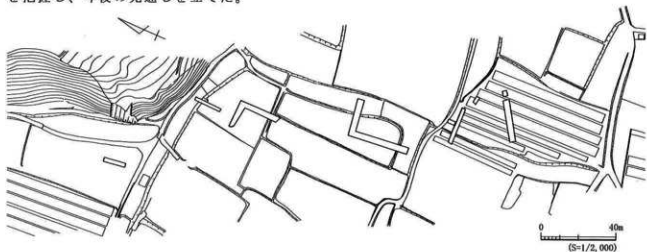
〔調査指導・協力者〕（順不同・敬称略）

高木正文、亀田学、洲崎明子、米村大、坂田和弘、岡本真也、水野哲郎、長谷部善一、廣田静学、宮崎敬士、黒田祐司、角田賢治、池田朋生、林田和人、和田好史、和田敏郎、坂井義哉

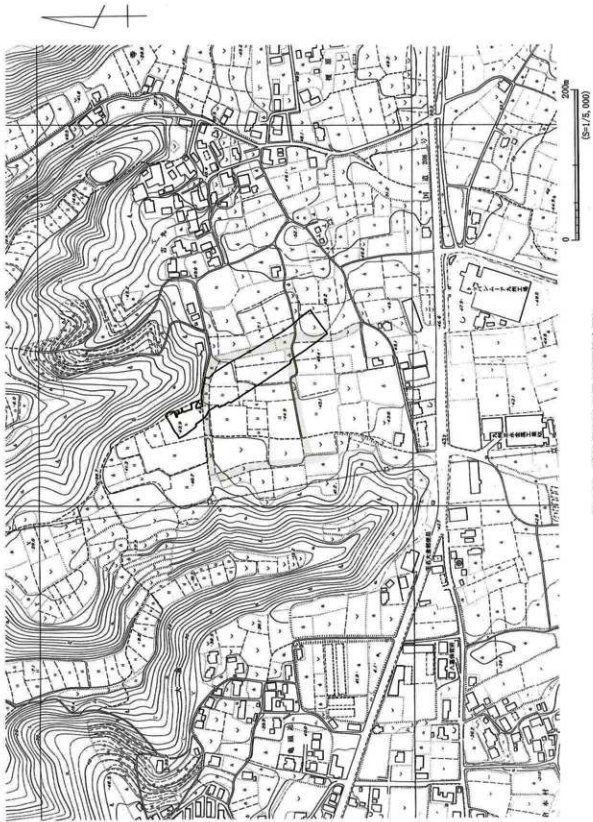
第3節 調査の方法と経過

1. 試掘・確認調査

平成7年熊本県教育庁文化課により実施された試掘調査により発掘対象範囲が決定されたが、玉名市教育委員会が発掘調査を担当することにあたり、調査計画を立案するための予備調査として平成13年11月に確認調査を行った。9本のトレンチを設定し遺物包含層の状況および遺構等を確認した（第1図）。それぞれのトレンチで包含層の堆積状況、空堀状遺構の深さなどを把握し、今後の見通しを立てた。



第1図 掘削前地形測量図・確認調査トレンチ位置



第2図 道崎周辺の地形図(区画指定図)

2. 調査の方法

〔調査区〕

調査対象面積が10,000㎡と広大であること、また調査着手時には西側に仮設の工事用進入路が設けられ、さらに里道が横断しており、隣接する農地への進入のためこれらを維持する必要があることから調査対象範囲全域を同時に掘削することはできなかった。そのため調査区を調査Ⅰ区から調査Ⅳ区までに区分し、順次調査を行い仮設進入路を移動させることで対処することとした。調査対象範囲北側を調査Ⅰ区、その南側に隣接する里道およびその隣地を調査Ⅳ区、調査面積の大半を占めるその南側を調査Ⅱ区、仮設工事用進入路部分を調査Ⅲ区とした。

平成13年度に調査Ⅰ区の中世の調査を行い、平成14年度に調査Ⅱ区およびⅣ区の一部について近世・中世期の調査、平成15年度にⅡ区の中世・古代・縄文期を完了した後、工事用進入路を調査地東端に移動、里道の付け替えを行いⅢ区の近世・中世・古代・縄文期、Ⅳ区の中世期の調査を行った。

〔グリッド〕

調査区内は公共座標Ⅱ系に基づき10m×10mを基本としたグリッドを設定した。南北軸・東西軸ともにX=-9200、Y=-39100を起点とし、調査の便宜上北および東へむかって順次増加する数値で表した。グリッドの呼称はそれぞれの交差番号により、(420×290)といったように南北-東西の順で表記している。掘削前から空堀の方向が推定でき館跡の軸線が想定できたことからその軸線に沿ったグリッド割り付けも必要であったことは反省点である。

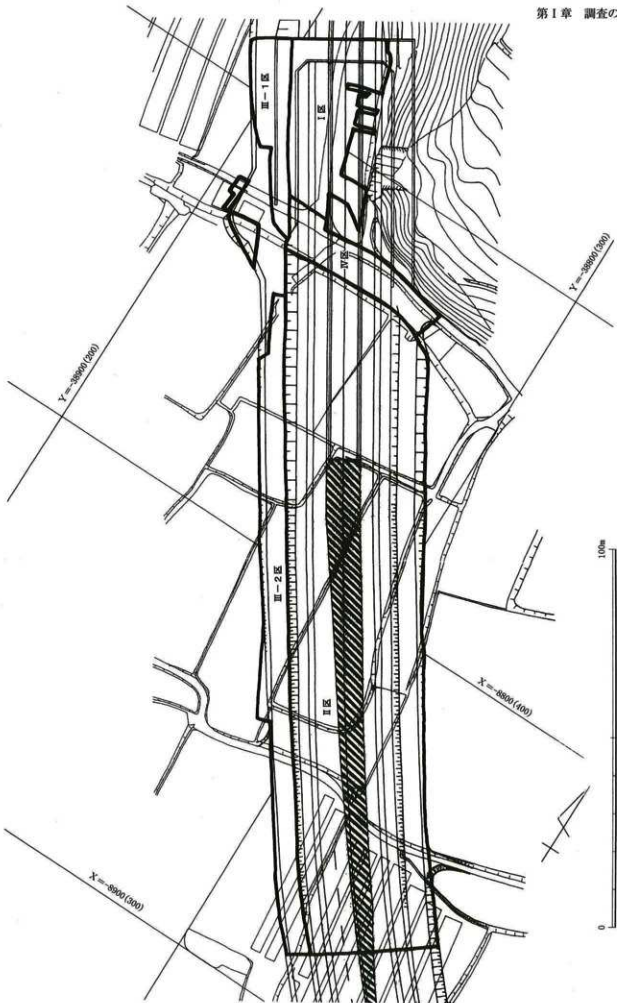
〔掘削法〕

本調査前の確認調査成果から基本土層のⅢ層より下位を調査対象とし、それより上位は表土はぎとしてバックホーを用いて掘削した。遺物包含層掘削については、基本的に移植ゴテを用いたが、遺構密度・遺物包含密度ともにそれほど高くないことから、遺物出土状況を適宜留意しつつ鍬およびスコップで薄く掘削した部分も多い。台地上の乾燥し固い地盤の上、時間的・経費的な面でやむを得ない処置であった。遺構掘削は移植ゴテおよび草削り鎌を用いた。一部溝状遺構、空堀状遺構などは基本的に鍬およびスコップで掘削し、壁・底面付近のみ移植ゴテ・草削り鎌を用いた。特に、空堀状遺構では人力で掘削するには土量が膨大であることから、小型のバックホーによった部分もある。

〔記録方法〕

発掘調査前には平板測量を行い、S=1/200で地形の記録を行った。検出および発掘した遺構は基本的にS=1/20およびS=1/10で調査員および作業員が実測した。空堀状遺構については遺構自体が広範な範囲に広がって高低差も大きく従来の平板測量や遣り方測量での図化は困難であったので、測量会社に委託し光波測距儀を用いて図化した。また調査Ⅱ区空堀状遺構に関しては10cmコンターでの平板測量も実施している。なお調査区土層断面図はS=1/20で作成した。

記録写真は、基本的に35mmのカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルムで撮影し、適宜



第3図 調査区配置図

中判（6×6）カメラ、大判（4×5）カメラでもカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルムで撮影した。また補助的な意味でカラーネガフィルムおよびデジタルカメラでも撮影している。

〔遺物採取〕

出土遺物は、包含層出土のものについては基本的に10×10mをさらに4分割した区画を単位として層位および出土日時を記録して取り上げている。遺構内出土の遺物は一部出土状況を図化して取り上げている。

〔遺構検出〕

調査に際して検出した遺構については、検出・確認した段階でSに3桁の通し番号を振り、調査開始から調査終了まででS001からS070までを付した。ただし、検出した段階では遺構と認識していたものが近世～現代の擾乱であったり自然の落ち込みなどであったりした場合には欠番となっている。なお発掘調査進行に並行して随時出土遺物の洗浄、接合、注記等の出土遺物整理作業を行っており、その際通し番号の遺構名、および便宜的な3桁の座標名を遺物に注記していることから、今後の収蔵および管理における混乱を畏れ本報告ではあえて遺構の性格ごとに遺構記号等を振り分けることをしていない。なお、本報告には記載していないが近世以降の畑の畝状遺構や溝の図面も一部作成している。

3. 調査日誌抄録

〔平成13年度〕

- | | |
|------------|----------------------------------|
| 平成13年12月8日 | 調査I区重機により表土除去。 |
| 平成14年1月7日 | 調査I区調査開始。調査区西側壁面清掃、調査区清掃。 |
| 1月8日 | 基本層序確認。耕作土掘り下げ。 |
| 1月9日 | 調査区北の建設現場で発見された溝についての取り扱い協議。 |
| 1月10日 | 包含層掘り下げ、遺構面検出。 |
| 1月23日 | 溝状遺構（S002）検出。 |
| 2月6日 | 遺構検出。ピットの配置に注意。 |
| 2月19日 | Ⅲ層掘り下げ終了。遺構検出。 |
| 2月21日 | S001検出。 |
| 3月4日 | S001、S002、ピット掘り下げ。 |
| 3月15日 | S002完掘状況写真撮影。 |
| 3月20日 | 調査I区航空写真撮影。 |
| 3月27日 | 調査区および擾乱の範囲を光波測距儀を用いて実測（S=1/50）。 |
| 3月29日 | 平成13年度の調査終了。 |

〔平成14年度〕

- | | |
|------------|--------------------------|
| 平成14年5月20日 | 調査II区の表土はぎ準備。境界杭確認。機材運搬。 |
|------------|--------------------------|

- 5月21日 調査Ⅱ区北端より表土はぎ開始。
- 5月28日 長崎外国語大学木元助教授来跡。
- 6月7日 調査Ⅱ区表土はぎ終了。作業員2名。
- 6月10日 作業員24名。掘削開始。
- 7月17日 Ⅱb層除去。Ⅱa層はプラスチックやガラス等が混入する現代の耕作土。
- 8月2日 Ⅱa層から西南戦争時の銃弾出土。
- 9月10日 Ⅲ層の掘り下げ開始。Ⅲ層は調査区東側へいくほど薄くなる。
- 10月9日 溝状遺構(S010)検出。
- 10月24日 Ⅲc層除去。
- 11月1日 S017掘削開始。
- 11月19日 玉陵中学校生徒3名が体験学習の一環で発掘作業・平板測量に参加。
- 12月2日 S019b掘削開始。
- 12月24日 IV層上面清掃。
- 1月31日 S017ほぼ完掘。
- 2月25日 同志社大学附属博物館鋤柄俊夫先生調査指導。
- 2月27日 土壌分析サンプリング(株式会社古環境研究所)。
- 3月6日 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター山中敏文氏調査指導。
- 3月10日 (株)ダイチプランにより空堀状遺構測量。
- 3月18日 中世遺構航空写真撮影。

〔平成15年度〕

- 平成15年 4月14日 平成15年度現場作業開始。
- 4月15日 S019a・b完掘状況撮影。空堀状遺構完掘状況撮影。
- 4月17日 430×290 430×285^{*}リット^{*}IV層除去。
- 4月21日 S037検出状況撮影(事前に清掃)。
- 5月9日 S038検出状況撮影、掘り下げ。
- 6月5日 プレ確認 坪掘り。Ⅶ層 深掘りトレンチ設定、掘り下げ。
- 6月9日 プレ確認のための平掘りは終了。Aso-4上面まで掘り下げるが遺物は確認されず。
- 6月25日 Pit・S038(古代遺構完掘状況)。
縄文の調査に入る。工事用道路部分を急ぐ。
- 7月16日 縄文土器出土状況撮影。
- 7月23日 石棒出土。
- 8月19日 S047集石状遺構プランの検出はできない。
- 9月17日 400×290～430×280^{*}リット^{*} 縄文の調査終了。プレの調査に入る。

第3節 調査の方法と経過

- 平成15年12月8日 調査Ⅰ区重機により表土除去。
- 9月18日 410×290 420×290^{ノリット}Ⅵ層中まで2m四方の坪掘り。
- 9月29日 S019a 20cmごとにコンタ記入。
- 10月8日 玉陵中学校生徒、職場体験学習2名来跡。掘り下げ参加、整理室見学等行う。
- 10月14日 玉名市立歴史博物館こころピアで開催の「たまな発掘速報展」に展示する遺物の選別をおこなう。貸し出し。
- 11月28日 30日見学範囲清掃。
- 11月30日 玉名市立歴史博物館こころピア主催「掘りたての遺跡を訪ねる」開催。吉丸前遺跡、吉丸西遺跡、城が辻古墳群。
- 12月1日 Ⅲ区北側（仮設道西側）部分的に人力による表土剥ぎを行う。Ⅳ区拡張はぎ。Ⅱ層相当層より、寛永通宝出土。
- 12月7日 Ⅱ区旧石器確認トレンチをY=280、270沿いに設定し、掘削。
- 12月10日 Ⅲ区表土剥ぎ。
- 12月12日 旧石器確認トレンチ掘り下げ、撮影。
- 1月7日 S043では陶磁器（～近代か？）出土。
- 1月27日 Ⅲ区Ⅲc層掘り下げ終了。全体Ⅳ層上面まで掘り下げ完了。
- 2月13日 明日、空撮。土壌分析サンプリング。
Ⅴ層上下×8ヶ所。
- 3月5日 住居址（S067）、土坑墓（S068）、不明遺構（S069）検出。
- 3月19日 Ⅲ区・Ⅳ区の完掘写真を撮影。
調査機材の撤収作業開始。
- 3月25日 調査終了。調査機材、出土遺物はすべて玉名市文化財整理室に移動。

第II章 遺跡の概要

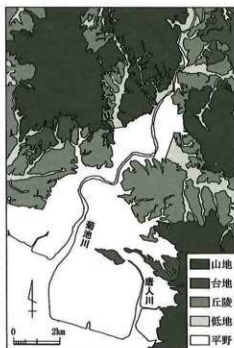
第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境

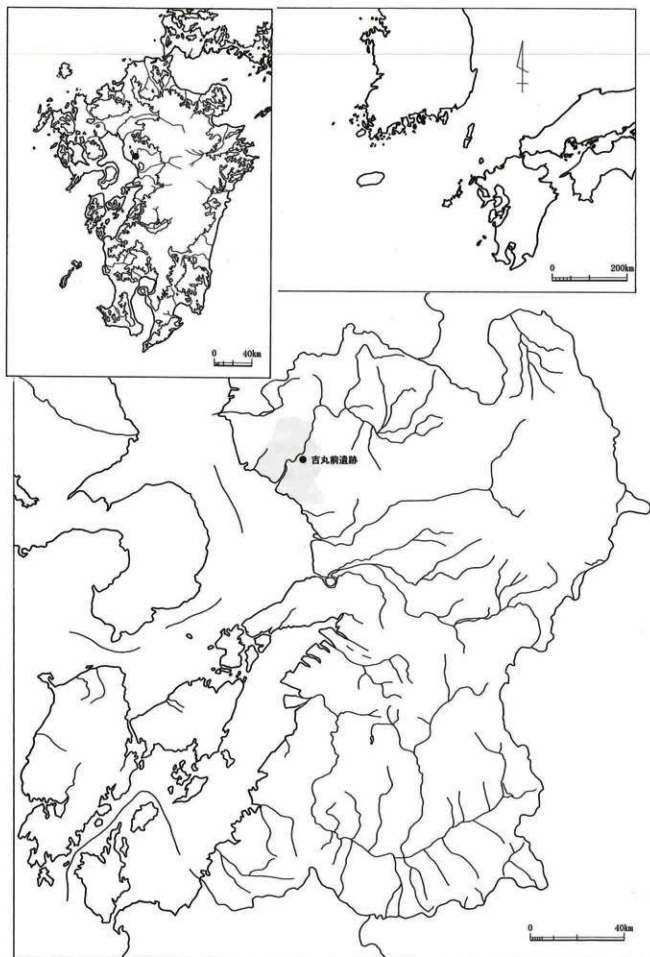
玉名市は熊本県の北西部に位置し、東南部を熊本市と接する人口約7万3千人の地方都市である。市域を地形的にみると菊池川の流域に広がる玉名平野を中心に、南は有明海に面し北は花崗岩山塊からなる小代山地と丘陵および台地、東を国見山地（木葉山）、金峰山の北麓に続く八嘉・伊倉の台地に囲まれ、市域面積は約152平方キロメートルである。菊池川が市の北東から南西方向へとほぼ中央を分断する形で流れ、玉名平野は菊池川とその支流である繁根木川がつくった沖積世の堆積物で構成された典型的な三角州を形成し、前縁は江戸時代以降逐次進められてきた干拓地が有明海に向かって広がる。また三角州の北東部には菊池川の本支流によって埋積された谷底平野が連なり、梅林牟田、玉名牟田と呼ばれている。

玉名地方では有明海の沿岸標高6m付近に海進時に形成された浜堤とみられる沖積面があり、縄文時代のある時期には現在の玉名平野のうちでも三角州の大部分を占める標高5m以下の区域が海面下にあり、平野の縁に当たる台地・丘陵の末端近くまで海岸線が入り込んだいわゆる「玉杵名湾」を形成していたとみられる。このことは縄文時代貝塚の分布からもうかがわれる。その後海面が低下するに従って沖積作用が進み、小田牟田、大野牟田などの菊池川下流に広がる三角州平野が形成された。三角州平野の発達は、海岸線の前進とも関連している。9～11世紀ごろ、奈良時代から平安時代にかけては海面の上昇期があり三角州の堆積作用も沈滞したが、11世紀ごろから再び下降期に入っている。この海退現象は遠浅の海である有明海沿岸の自然陸化を促進し、この時代には干潟の開発が進んだとみられる。

加藤清正は1588年（天正16年）肥後入国後、菊池川下流の流路を変更する治水事業を行っている。それは流路を固定し氾濫を少なくすることを目的にしたものであり伊倉の台地を沿って外平山と久山の間を通り海へ出ていた流路を塞ぎ、大浜と小浜の間を流れるように掘り変えたものであるといわれる。これにより中世には丹倍津と呼ばれる河港として栄え大陸との交流も盛んであった伊倉は港町としての機能を失うが、そのかわりに小田牟田を耕地として利用することが可能となった。大野牟田および小田牟田は、中世に自然陸化したところであり、近世初頭の加藤清正の水利事業によって耕地化が進んだ区域



第4図 地形区分図



第5図 吉丸前遺跡の位置

とみてよい。

調査地のある玉名市寺田一帯は金峰山火山群の熊野岳（二ノ岳）および三ノ岳を主峰とする山地から延びた丘陵斜面に続く台地上にあたり、台地の西端に伊倉の市街地が立地する。この台地は凝灰角礫岩が分布し、その上を覆う阿蘇火砕流堆積物からなる。土壌は台地の平面部では多くが凝灰岩を母材とする比較的腐植含量の低い単色黒ボク土壌からなり、土壌中の養分含量は比較的高いが保水力がやや弱く干害を受けやすい性質を有する。標高は50m内外で浸食のため平坦面はそれほど広くない。この台地の北の裾部を木葉川が流れ、西を菊池川が流れ、中央を東西に国道が通っている。上述した加藤清正の菊池川流路変更以前は菊池川がこの台地の南裾に流れており、中世以前は三方を川に囲まれていたとみられる。楕円形の丘陵部の北から西、南にかけては河川によって区切られ、突出した形となっている。さらに丘陵部のほぼ中央に現在国道が通り近世以前は街道が通っていた。丘陵北側、木葉川と菊池川の合流点付近にあった津留の津と、国際貿易港として栄えた伊倉の津を結び道と高瀬から熊本へと向かう街道の交差するところが、この寺田の地であり、交通の要衝として重要であったと考えられる。

2. 歴史的環境

玉名市はその中央を貫くようにして流れる菊池川下流域にあたり、流れに沿うように各時代を通じて大小の遺跡が存在し、また小代山から続く低台地上および金峰山系の台地上にも古くからの人々の生活の痕跡を認めることができる。

旧石器時代の遺跡については発掘調査による出土がないため詳らかでないが、小代山南麓の山田や築地、岱明町字西照寺で、また玉名平野北部の箱谷で旧石器が表採されており、今後の発見が待たれる。また本遺跡でも三稜尖頭器が中世の空堀状遺構から出土しており、周辺の伊倉丘陵性台地上にも旧石器時代の遺跡が眠っているとみられる。

縄文時代には当時の海岸線及び河川沿いに縄文前期から後期の貝塚遺跡が多く分布する。金峰山南裾部の内湾に尾田貝塚、竹崎貝塚、久島貝塚などが、また小岱山から南に伸びる低丘陵裾に古閑原貝塚、庄司貝塚、尾崎貝塚が、さらに菊池川旧河口付近には繁根木貝塚、保田木貝塚、桃田貝塚が所在する。いずれも前期から後期前半を主体とする貝塚であり、時期を下にしたがって分布は内陸にあり縄文海進の一側面を示す。繁根木貝塚などの10km上流の和水町若園貝塚は中期末～後期初頭を中心とする貝塚遺跡であるが、出土した結合式釣針はオサンリ式結合式釣針と呼ばれるものであり、他の石器組成も朝鮮半島南部を含んだネットワークを構成する地域の中に入っていたことを物語っている。後期後半から晩期の遺跡についても、近年の調査により伊倉や山田の低丘陵上で確認、調査されている。近年調査された上小田宮の前遺跡では自然流路から晩期に属する多量の堅果類に加えて、炭化した堅果類が付着した深鉢、弓の一部が出土しており、当該期の植物利用および生業形態を考える上で興味深い。柳町遺跡など河川沿いの低湿地遺跡では晩期の刻目突帯文土器が出土しており、水田遺構等ははまだ未発見であるが、今後の調査の進展が待たれる。

弥生時代に入っても金峰山南部裾から岱明町までの旧海岸線に近い低丘陵裾には城ヶ崎貝塚、

片諏訪貝塚などの貝塚が営まれ、なかでも斉藤山貝塚は前期の板付式の時期を主とする貝塚であるが、板付式を伴って袋状鑄造鉄斧が出土しており、北部九州を經由した交流の様相が窺われる。また中期になると各所に甕棺墓地在が営まれており、境川右岸に広がる東南大門遺跡では方形周溝墓の他数十の甕棺墓が広がり、付近の大原遺跡では箱式石棺墓群があり、付近に大規模な集落の存在が窺われる。年の神支石墓では南海産のゴホウラ製貝輪が出土している。左岸では伊倉丘陵性台地上に中北遺跡があり、黒髪式の甕棺墓群が調査されている。中後期以降には大小の河川を見下ろす丘陵上に高岡原遺跡などの集落遺跡があり、菊池川沿いに前田遺跡や柳町遺跡などがある。前田遺跡は中期から後期の集落址であり、丹塗りの特殊器台や銅鐵の出土は、北部九州の弥生社会との緊密さを物語るものである。

古墳時代には4世紀後半の山下古墳を嚆矢として6世紀半ばの大坊古墳まで前方後円墳が築かれている。また菊池川下流域と推定される舟形石棺が九州外の首長墓から確認されており、菊池川と有明海を基盤とした古墳時代の玉名地域が大和政権にとっても重要な地であったと考えられる。

6世紀になると菊池川下流域でも装飾古墳が登場し、玉名平野北端の丘陵裾に集中する。6世紀前半の大坊古墳、馬出古墳、6世紀後半の永安寺東・西古墳である。大坊古墳は全長42mの前方後円墳であり、複室構造の横穴式石室を有する。また6世紀末からは横穴墓群も数多く営まれ、特に阿蘇溶結凝灰岩の崖面が露出する繁根木川沿いに集中する。石貫ナギノ横穴群は飾縁に彩色の装飾文様を持つものも多く、また石貫穴観音横穴は奥壁にその名の由来となった観音像が浮き彫りにされている。この観音像は横穴墓造営当時のものではなく、後の追刻とする説が有力であるが仏教寺院が玉名に建立されるのは白鳳期の立願寺廃寺が嚆矢であり、古墳時代から律令制への過渡的な状況を伝える資料である。また玉名バイパス建設に先立ち近年調査された城ヶ辻古墳群は1～7号墳までの7基の円墳からなる古墳群であるが、発掘調査された6号墳は石材が抜き取られていたものの石屋形および石障を有する横穴式石室とみられ、菊池川下流域で最古のものである可能性がある。また7号墳は北部九州の影響を受けた県内初の堅穴式横穴式石室であることが判明し、注目される。

古墳時代の集落遺跡としては玉名平野の菊池川縁辺に柳町遺跡があり、豊富な木製品が出土し、なかでも木製短甲とその留め具に書かれた漢字は注目される資料である。また蓮華遺跡ではカマドを受容する前後の5世紀末から6世紀代の住居址16棟が調査されている。

律令制下の玉名は玉名郡に属し、菊池川兩岸の玉名平野には条里遺構が広がっている。小岱山南麓の立願寺周辺には白鳳期から奈良時代の瓦を出土する立願寺廃寺のほか、郡倉、郡家跡が存在したことが発掘によって確認されており、玉名郡の中心地として郡衙を構成していたとみられる。また現玉名駅には菊池川の旧流路と有明海の干満の差を利用した大湊が存在したとみられ、それと玉名郡衙を結ぶ道路も発掘によって確認されている。

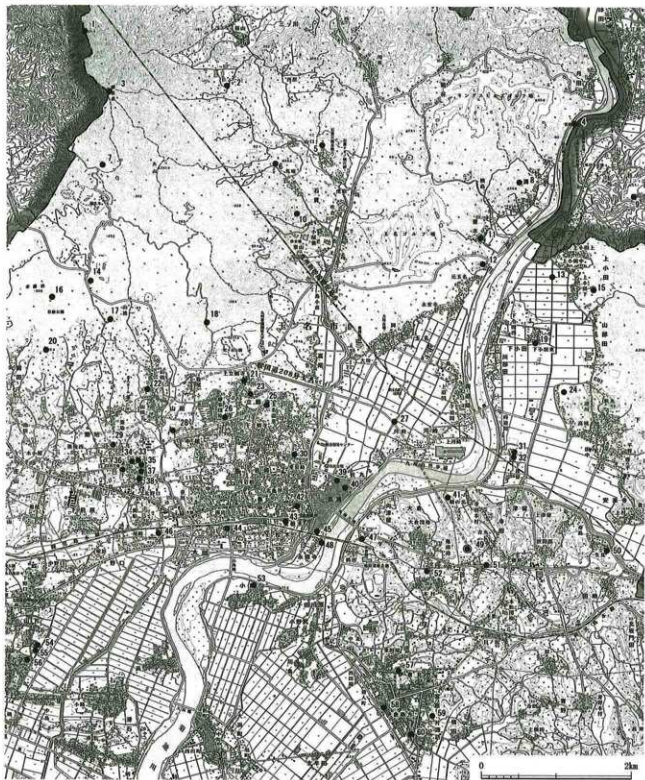
玉名郡の郡司は和水町瀬川鶯原出土の銅板墓誌にも名前の見える日置氏であり、延喜式神名帳に阿蘇の3社とともに記載されている足野神社は日置氏の氏神と考えられている。玉名郡の

中央にそびえる小岱山麓一帯には製鉄跡・須恵器窯跡が群落しており、穀倉地帯である玉名平野の稲作に加え、鉄生産を経済的な基盤としていたのだろう。また菊池川口の高瀬に湊を置き海上交通の拠点として、海外の文物が流入していた。その日置氏も11世紀後半律令体制の崩壊により衰退の度合いをはやめ、菊池氏の進出にともなって所領を手放さざるを得なくなる。

904年(延喜4年)、高瀬下町裏の宝成就寺が建立され、繁根木に八幡宮が勧請されるとつづいて禪宗や浄土真宗の寺が出来ると各宗派の信者が集まって高瀬の川洲は寺社を中心に門前町を形作った。11世紀頃玉名荘に勢力を伸ばし始めた菊池氏は、南北朝期には大野別符の地頭大野氏と協力関係を保ちつつ、高瀬港を軍事、貿易の根拠地としたと考える。菊池武光の弟である筑前守武尚は大野国陸の法名清源にちなむ清源寺に敷地を寄進し、その子肥後守護代武国は小代文書の武国書状に「たかせとの」という肩書きの当時の書き入れがあり高瀬氏の祖とされる。高瀬武攝が高瀬保田木城を築いたと伝える。その頃家臣を城下に住ませ高瀬の町の形成が進んでいく。高瀬本町遺跡では、昭和30年代の下水道敷設工事の際、地下3mから多量の中世期の遺物が発見されたという。上半は砂層、下半分は泥土層でその上層には「にし」「にな」などの小さな巻貝が、下層には「はまぐり」「赤貝」「あかにし」「てんぐにし」などの大型の貝に混じって土器や磁器片・獣骨類、大小の木片が大量に堆積し、本町付近ではそれにまじって鉄釘や中国銭貨、漆器などが混入して発見されたという。中国銭貨は宋銭、および乾元重宝であった。朝鮮の『海東諸国記』に「丁亥年(1467年)、書して肥後州高瀬郡藤原武教と称し、菊池殿の属親として、その管下と為り、高瀬に居る」と見える。長祿、応仁のころ朝鮮と交渉のあったことがわかる。高瀬の川底から元から明初頃の青磁、青花の陶片が大量に採集され、その貿易港についての地位を偲ぶことができる。

吉丸前遺跡の所在する寺田は、中世においては伊倉別符の範囲に属していた。伊倉別符は玉名郡司であった日置氏代々の開発所領であったが11世紀後半には筑前講師永源に売却し、のち宇佐氏が伊倉別符の領主となった。13世紀後半元寇に参戦した武士の中に伊倉次郎の名がみえ、伊倉氏が伊倉別符の地頭職にあったことがうかがわれる。13世紀末には伊倉別符の領主と地頭の間で訴訟があった記録があり、1322年(元亨2年)銘の供養塔に「伊倉保一方地頭沙弥行恵」とあることから、それまでに下地中分が行われ、伊倉北方を宇佐氏が、伊倉南方を伊倉氏が領することとなったとみられる。南北朝期に入るとこの伊倉でも両者にわかれて活動していたようで、宇佐氏の菩提寺である報恩寺にある紀年銘の古塔には北朝年号が刻まれ、一方伊倉氏は南朝方として活動していた。その後官方、將軍方、佐殿方の三派鼎立の情勢となると伊倉氏は佐殿方についていたとみられる。

懐良親王が菊池氏と共に太宰府を攻略し、征西府を樹立し南朝方の全盛期を迎えた後は肥後の北朝方の武士たちもおおかたは官方軍に支配されることとなった。伊倉も同様に南朝方になったとみられるが、伊倉の地は丹倍津を擁し海上交通のみならず軍需品の供給をする津であるなど北朝軍の海上からの侵攻を防禦する拠点として重要であっただろう。そのため南朝の拠点



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|--------------|
| 1 小代山岡ヶ岳城跡 | 13 上小田宮の前遺跡 | 25 玉名郡倉推定地 | 37 間白屋敷跡 | 49 吉丸前遺跡 |
| 2 三ツ川六反製鉄跡 | 14 斧研製鉄跡 | 26 高岡原J遺跡 | 38 浄光寺南大門跡 | 50 朝日寺跡 |
| 3 正法寺跡 | 15 上小田城跡 | 27 柳町遺跡 | 39 保田木城跡・貝塚 | 51 吉丸西遺跡 |
| 4 若園貝塚 | 16 日坂城跡 | 28 高岡城跡 | 40 高瀬木町通遺跡 | 52 立山遺跡 |
| 5 大平寺跡 | 17 領多地蔵跡群 | 29 築地船跡 | 41 城ヶ辻城跡 | 53 小島城跡 |
| 6 茶園山廣福寺 | 18 蛇ヶ谷製鉄跡 | 30 岩崎城跡 | 42 繁根木山寿福寺跡 | 54 庄司貝塚 |
| 7 堀地小寺製鉄跡 | 19 兼恩寺跡 | 31 安楽寺居館跡 | 43 繁根木貝塚 | 55 古岡原貝塚 |
| 8 溝の上城跡 | 20 團田古城跡 | 32 安楽寺跡 | 44 大湊 | 56 高道城跡 |
| 9 イッチョ墓 | 21 玉名郡家跡 | 33 兼光遺跡 | 45 大倉山永徳寺跡 | 57 本堂山古塔碑群 |
| 10 大湊 | 22 山田神社門前遺跡 | 34 浄光寺蓮華院跡 | 46 尾崎貝塚 | 58 丹後津跡 |
| 11 青木磨崖梵字群 | 23 立願寺窟寺 | 35 妙性尼寺跡 | 47 桃田貝塚 | 59 伊倉城(中ノ城)跡 |
| 12 玉名の平城跡 | 24 下村城跡 | 36 平町遺跡 | 48 高瀬船着場跡 | 60 片諏訪貝塚 |

第6図 周辺主要遺跡分布図

として伊倉宮が設置された。そして伊倉片諏訪の中ん城が拠点であったのだろうと考えられている。

1371年(応安4年)に今川了俊が九州探題に任命されると、南朝の九州支配は大きく揺らぐこととなり、1375年(応安8年)には肥後攻撃を開始し、12月には大友親世は小島城を攻略した。1379年(永和5年)には小代山の筒ヶ岳に陣を移し、その軍勢は、高道、高瀬を攻略し、伊倉も攻略され菊池本城へと迫っていった。1381年(康暦3年)、今川了俊は菊池本城をも陥落させ、さらに軍を宇土、川尻に進め八代まで包囲したが1392年、中央での内乱終結もあって菊池・阿蘇氏と和を結び、肥後での南北朝内乱は一応終結をみた。今川了俊は南朝菊池氏を攻略するに当たって1372年、肥後の北朝軍の中心であった小代氏に対して伊倉荘と大野伊勢守跡を預けおいた。このとき宛がわれたのは伊倉荘南方であったとみられる。また伊倉北方は大友親世に所領宛がいがなされた。しかしその2年後の1385年、將軍義満は三池中務少輔康親に勲功賞として宛がったのである。ただし、その所領範囲は不明である。15世紀初頭には、伊倉北方惣領の本領分は返却され伊倉北方惣領家の支配に回復したと思われる。

戦国時代に入り菊池氏が没落すると大友、島津、龍造寺氏の進入を受け高瀬の町も寺社などが焼けるなど荒廃した。一時は菊池川を境として北を龍造寺氏、南を島津氏が支配することになった。

豊臣秀吉の天下統一後、佐々成政が入国するが失敗により改易、加藤清正が入国した。清正は入国の翌年から高瀬に港とあわせ米俵の集積庫としての高瀬御蔵を設置、御茶屋と御蔵の建設を行ったほか、菊池川の掘り換えをおこなうなど、多くの事業を行っている。細川氏は清正時代の大倉庫四棟の他に付属建物を増設して事業を広げ、常時藩内最高の25万俵をあつかったという。江戸時代になって商業が盛んに成ると商業の町、川港の町として繁盛に赴いた。商人の中には多くの利益を得、事業の拡大をすすめる大商人が現れ、川に面した目抜き通りには大きな店舗を構え、裏手に石垣を築き、大倉庫をならべ裏川への通路を設けた。そして永徳寺の川港を本拠に、大阪、堺、関門方面の商人と商品の取引を密接にし、裏川を利用して商品を自家へ上げおろしそれに用いる自家用船舶を持つ商家も少なくなかった。高瀬は五ヵ町の一つとして町奉行所がおかれ、玉名郡代からは分離して高瀬町奉行の管理下におかれた。明治維新後も川港を要する商人の町として順調に発展を続けたが、明治10年西南戦争の戦火で高瀬御蔵は焼失し、米倉、港の経営も断絶した。熊本城を包囲した薩摩軍は政府軍の応援部隊の南下を阻止するべく北上して高瀬へと兵を進めた。3日間続いた高瀬付近では多くの戦死者を出し、結局薩摩軍は玉東町木葉を経て田原坂に陣を張りその後2週間に及ぶ激戦を繰り広げた。高瀬周辺の戦闘では寺田の地においても政府軍と、薩摩に呼応した熊本隊の戦闘が行われており当時の記録では吉丸前遺跡の縁辺をとって東側の100程の地点を中心に激しい戦闘が行われていた。この西南戦争の災禍で高瀬の半分は火災により焼失し、高瀬御蔵、御茶屋、宝成就寺などを含めた主要な施設が失われ、高瀬の機能は大幅に減ずることになった。

第2節 遺跡の概要

吉丸前遺跡は1994年発行の『熊本県遺跡地図』、1991年発行の玉名市歴史資料集成第8集『菊池川下流域遺跡詳細分布調査報告書』にも記載されておらず、1996年熊本県教育庁文化課による試掘調査の結果遺跡として認定され、その後遺跡地図マイラー原因の変更を行い、字名をもって吉丸前遺跡となった。そのため付近の調査例は皆無であるがこの吉丸前遺跡周辺の字名をみると「大堂」、「中ノ塔」などの字があり、古寺の存在が推定できるほか、畑の地割りおよび地形から方形状の区画が読み取ることができた。そのため中世期における城館跡である可能性が指摘された。

発掘調査の進展に伴い中世の文化層の下位に古代および縄文時代晩期の文化層が確認され調査を行った。調査地一帯は水田及び畑地として利用されており、また明治初年の『玉名郡村図』でも耕地となっており、近世以降耕地として利用されていたようである。

第3節 遺跡の層位と包含層

吉丸前遺跡の土層層位は、現代の耕作土層から阿蘇火砕流堆積物（Aso-4）表層までを観察対象としてⅠ～Ⅶ層に区分した。調査域のうち北側の調査Ⅰ区・Ⅳ区と、その南側のⅡ区とでは2m程度の落差があり土層堆積状況が連続しない。しかし調査域の大部分においては共通のほぼ連続する堆積を認めることができた。調査域は中近世以降耕作地として利用されており現代は重機等による造成も行われているため、数枚の耕作土層と判断される層が重なっている。

層位名	色調*	特徴
I		
IIa		
IIb		
IIIa	IIIa 極暗褐色土層 (hue7.5YR2/3)	しまり、粘性ともやや弱い。ローム粒の混入多く、それが均質に混じる。炭化物・小礫をやや含む。中～近世の耕作土層。
IIIb	IIIb 黒褐色土層 (hue7.5YR2/2)	しまり、粘性ともやや弱い。IIIa層に比べローム粒の混入少ない、中～近世の耕作土層。
IIIc	IIIc 黒褐色土層 (hue7.5YR2/1.5)	しまり、粘性ともやや弱い。IIIa・IIIb層に近似するが、ローム粒の混入少なく、色調はIVに近づく。IV層が攪拌されたもの。中～近世の耕作土層。
IV		
V	IV 黒色土層 (hue7.5YR2/1)	しまり、粘性とも上層より弱い。粒子が細かく、若干下位の層の粒子を含む。古代の包含層。
VI	V 褐色土層 (hue7.5YR4/4)	しまり、粘性ともやや強い。下位の層の小ブロックをまれに含むが、混入物は非常に少ない。縄文晩期の包含層。
VII	VI 黒色土層 (hue7.5YR2/1)	しまり強く、粘性やや強い。灰色～にぶい褐色の粒子をやや含む。無遺物層。
	VII 褐色土層 (hue7.5YR4/6)	しまり、粘性とも非常に強い。若干の砂粒を含むローム層。

*小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色図』 日本色研事業株式会社 1986

第7図 土層柱状図および観察表

I層は現代の耕作土層である。II a・II b層は近代以降の耕作土層であり、近世・近代以降の陶磁器片が出土した。III層はIII aからIII c層までに細分できるが、いずれも中世の陶磁器片を含みながらも細片が多く、近世陶磁が雑じることから近世の耕作により攪拌された中世の遺物包含層であると判断された。それは、中世の遺構であるIII b層の除去後に検出された溝状遺構S010が、約5 cmから10 cmに満たない深さしか留めていなかったことから推察できる。IV層は黒褐色を呈する包含層で、古代の須恵器、土師器を出土する。V層は縄文時代晩期の包含層であり、縄文土器および石器を出土する。VI層は暗褐色を呈し当初縄文時代早期の遺物包含層の可能性も考えられたためテストピットおよびトレンチを調査区内各所に設定したが、遺構・遺物ともに検出できず、最終的には無遺物層であると判断した。VII層は明るい色調を呈するローム層で、無遺物層である。中世の空堀状遺構上層から三稜尖頭器が出土したため、VI層と同様にテストピットおよびトレンチにより確認したが、石器および石器製作にともなう剥片等は確認できなかったため、無遺物層であると判断している。

調査Iおよび調査IV区、調査III-1区と、その南側に隣接する調査II区・調査III-2区とでは調査前の地表面で2 m以上の高低差があり、土層の堆積状況が異なる。耕作土層であるI・II層は共通するものの、前者ではその下に包含層が1層しか堆積せず、その直下はローム層の地山であった。そのため、調査I区以北ではこの包含層を3層としている。3層からは陶磁器片・土器片など中世期の遺物以外はほとんど出土していない。後述するように、方形区画の北辺にあたる空堀状遺構S019を境として、その南北で上記のような地形の落差があることから、それは人為的な地形改変によるものと考えられる。そのため縄文、古代期の包含層がかつて存在していたとしても中世期の地形改変によりすでに消滅しているとみられる。

また調査域周辺は全体的に南東部が高く北西部へむかって緩やかに下降していく地形をとる。調査域は中近世から現代までの耕作土が調査区全域に幾層にもわたって堆積している。そのため遺物包含層の残存状況は一律ではない。特に古代の包含層であるIV層および縄文時代晩期の包含層であるV層は一部をのぞきII区およびIII-2区の北半分にしに堆積していない状況であった。中世の遺物包含層であるIII層も場所によってはIII a～III c層に細分できるが、III層は概して堆積が薄く、その峻別は困難であったため細分できていない部分がほとんどである。またY=500以東は耕作等の影響により耕作土直下VI層およびVII層であったために、調査時において中世の包含層を含め遺物包含層の堆積は存在しなかった。本遺跡の特徴的な空堀状遺構は、その規模が大きいこともあり、現在に至るまで完全には埋没せず、発掘調査前の状況においても明瞭に窪みそこでも周囲と同様に耕作が行われていた。そのため、本来的な空堀状遺構の埋没過程における自然層位は耕作土層である基本層位のI・II層と共通する層も存在していた。

以上述べてきたように、調査域は全体的な地形の傾斜と後世の土地利用により、層位および包含層の状況は調査域内の調査区ごと、あるいはその内部においても種々異なっている。そのため、本来的な遺跡形成に係わる遺物の出土位置及び出土量は把握しがたく、発掘調査の結果得られた情報も曖昧なものであることを注意しなければならない。

第 III 章 調査の成果

第 1 節 縄文時代晩期の遺構と遺物

1. 遺構

縄文時代の遺構は主に調査Ⅱ区において検出した。集石遺構、炉穴、土坑である。縄文時代の包含層であるⅤ層は比較的他の遺物包含層より堆積が厚く良好に残存していたが、調査区の南側には一部しか認められなかった。またその範囲には遺物が出土していない。

以下、種別ごとに遺構を内容を述べる。

1) 集石遺構

S047(第10～12図)

集石遺構であるS047はⅤ層掘削途中で検出した。一部被熱痕のある礫があるほか割れたものもみられる。石材はほとんどが安山岩で砂岩の礫が少数雑じる状況であった。

礫にまじって磨製石斧や敲石が出土し、深鉢土器の出土によりその時期を推定することが出来る。集石の下部には浅く緩やかな窪み状のピットがある。集石を構成する礫同士のあいだに入った土や集石下部の土には若干の焼土片および炭化物が含まれていた。

礫の広がる範囲は平面0.6m×0.6mの不整形を呈し、垂直分布では20cm程度の範囲にある。また特に標高45.90m前後の上下10cmの範囲に集中しており旧地表面が想定される。集石下部には0.6m×0.5mの平面円形で最深0.2mを測る掘り込みを有する。

集石を構成する礫は80数個を数え、6点の石器をのぞけばそのすべてが安山岩である。一部被熱により赤化したものが認められるが、15個程度とごく一部にすぎず、主に集石の中心部上層にみとめられた。安山岩の重量分布は4g～1,160gと幅があるが、平均177.2gで200g以下のものが8割を占める。なお図中に示す5個体が接合した。検出時における集石の分布は土坑の西側部分が稠密で南東部がやや散漫な状況であるが、接合関係から土坑の範囲の外にある南東部の礫も本来は西側側部分に重なっていた可能性がある。集石を構成する礫同士のあいだに入った土や集石下部の土坑埋土には微細な焼土片及び炭化物粒を確認することができたが散漫かつごく微量である。

出土遺物には縄文土器と石器があり、縄文土器は主に集石下位の土坑からの出土、礫石器は集石内の安山岩礫に混じって集石の周縁部から出土し、黒曜石の剥片およびチップ類は土坑内からの出土である。なお土坑埋土については2mmメッシュのフルイで選別を行ったが、堅果類等の有機遺物は検出できなかった。

1、2は深鉢とともに土坑内からの出土である。1は口縁部に補修孔が穿たれている。3は磨製石斧であるが、集石からやや離れた南側からの出土であり、集石に確実に伴うものとは断言しがたい。4、5は敲石である。6～8は磨石でいずれも半分ほど欠損しており一部に敲打

痕が認められる。9、10は黒曜石の剥片で土坑下位から出土した。

ii) 炉穴

S053 (第13図)

S053は中世の空堀状遺構であるS019aにより大半が失われており、本来の遺構形状の床面付近のみが残存しているものである。長軸4.4m、短軸1.2mの東西に長い長方形を呈し、中心やや東よりに焼土の集中部がある。埋土には多量の焼土塊および炭化物粒が含まれており、特に焼土集中部付近では焼土塊、炭化物粒ともやや大きく顕著である。遺物が出土せず時期の判断が難しいが、旧石器および縄文時代早期の包含層存在の有無を確認するためのトレンチ調査でも遺物は出土していないことから縄文時代晩期に属する遺構であると判断した。しかし、本遺構は大半が中世期の遺構により破壊されており断面形状・平面形状ともに全体像を把握することができない。そのため、焼土及び炭化物の出土状況から炉穴等に類する機能が想定できるがその性格は不明である。

S050 (第14図)

S050は中世の空堀状遺構であるS019bによりほぼ半分が切られているため全体の規模は推定せざるを得ないが、長軸80cm、短軸60cm程度であるとみられる。埋土は1層で炭化物、焼土粒を大量に含みさらにいくつかの焼土塊を含む。土坑堀込みの北東側に円錐形に極端に深くなっている。土器の出土はないが検出状況から縄文晩期に属するとみられる。

S055 (第14図)

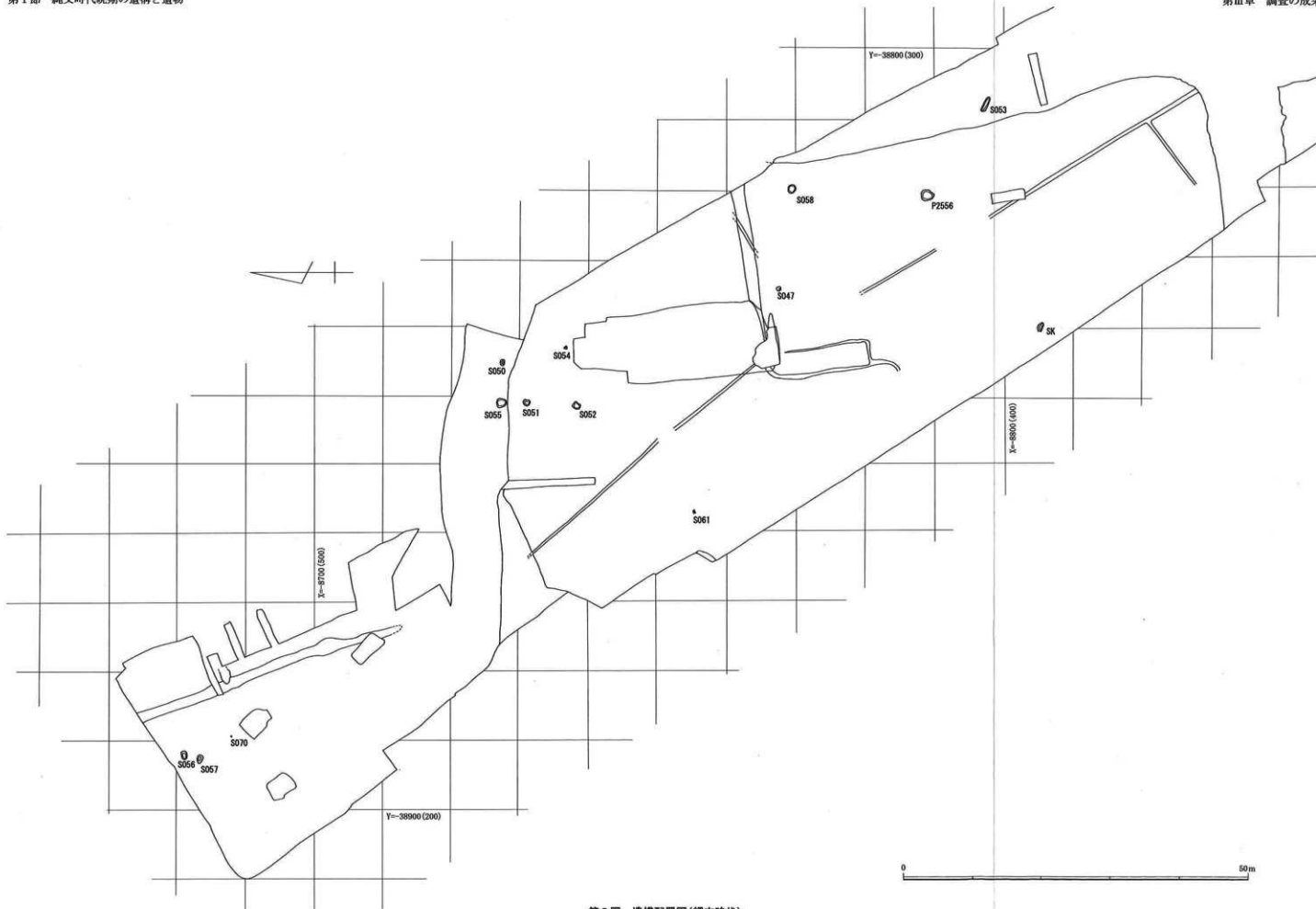
S055は不整形の土坑であり60～70cm程度の直径を測る。埋土は1層で炭化物、焼土粒を若干含みまばらに大小の焼土塊を含む。土器の出土はないが検出状況から縄文晩期に属するものと考えられる。

iii) 土坑

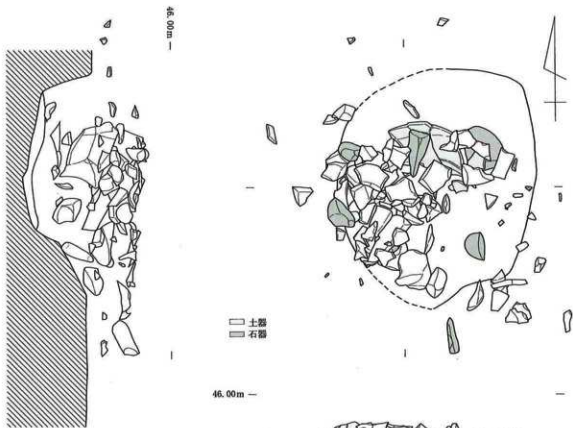
SK (第15図)

長軸1.2m、短軸0.6mの土坑である。平面形は不整形で浅く、埋土は1層で全体的に摩滅した土器細片が含まれ、土器片がまとまって集中したことから廃棄用の土坑である可能性が高い。なお土器片は床面付近に集中する傾向がみられた。

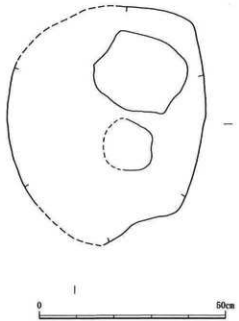
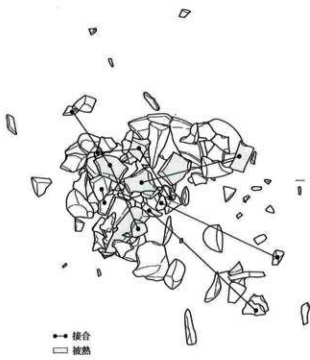
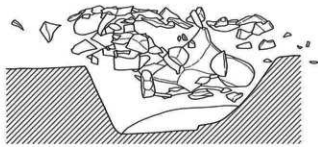
11、13は粗製深鉢の直行する口縁部片でナデ調整が粗く粘土紐接合痕が内外面とも明瞭に観察できる。12は鉢形土器の底部、13は鉢形土器の胴部片である。15は鉢形土器で比較的丁寧なつくりである。口縁部は端部付近で直立し内外面ともに浅い沈線を巡らせ、口縁部を丸く仕上げる。



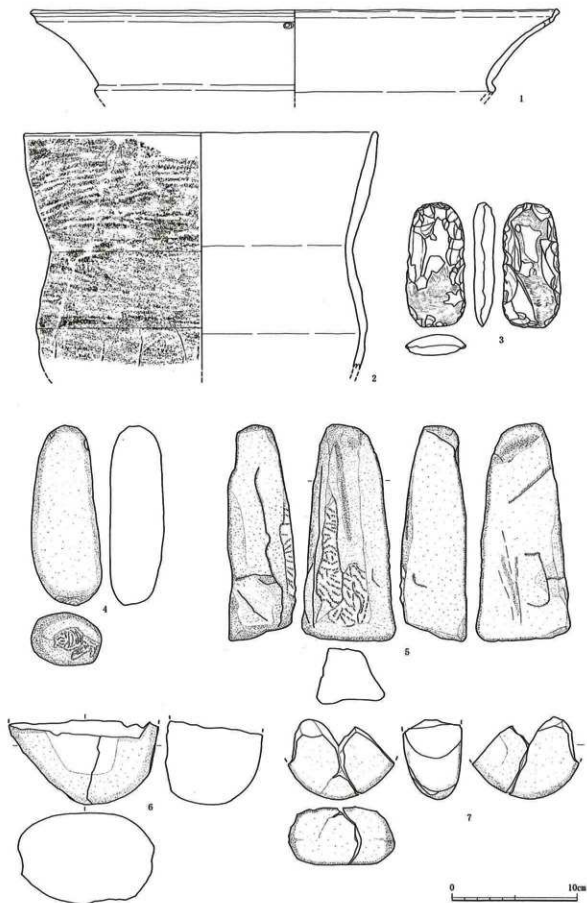
第9図 遺構配置図(縄文時代)



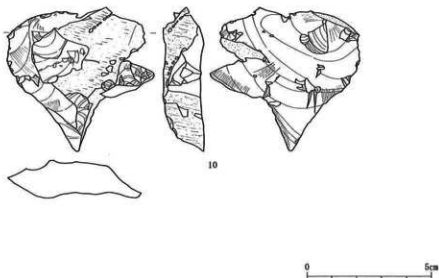
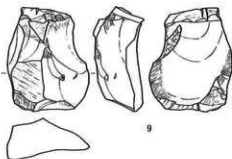
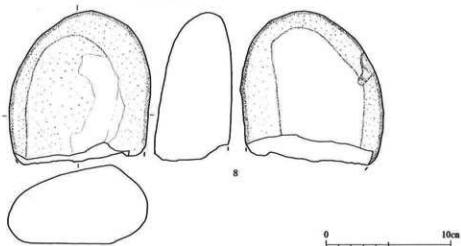
黒褐色土 Hw7.5YR3/4
 きの細かい粒子でわずかに粘
 性を有する。細かな砂粒、炭化
 物、機土粒をわずかに含む。



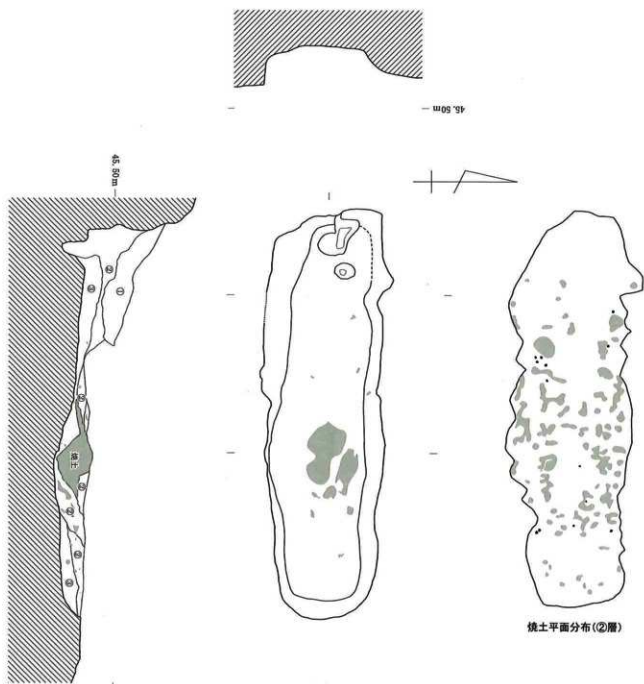
第10図 集石遺構(S047)



第11図 集石遺構(S047)出土遺物 1



第12図 集石遺構(S047)出土遺物2

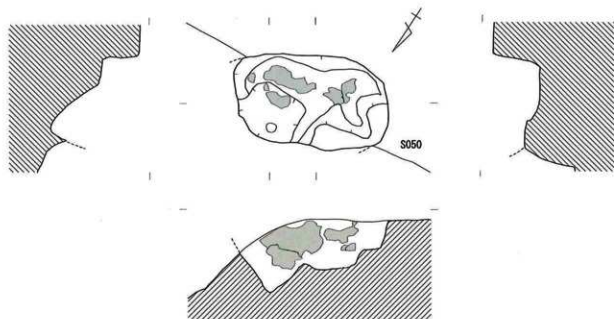


焼土平面分布(②層)

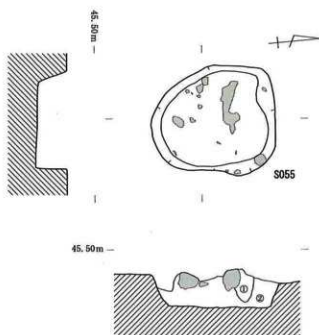
- | | | | |
|----|-------|--------------|---|
| ① | 黒褐色土 | Hue7. 5YR2/2 | しまりがあり、やや粘性を帯びる。焼土をやや含む。 |
| ② | 極暗褐色土 | Hue7. 5YR2/3 | しまりはなく、ばらばらしている。焼土塊・微細な炭化物粒を多く含む。②'は焼土塊を多く含む。 |
| ③ | 暗褐色土 | Hue7. 5YR3/4 | やわらかく、粘性なし。細かな焼土塊、ローム粒を含む。 |
| 焼土 | 明褐色土 | Hue5YR5/8 | |

0 50cm

第13図 炉穴(S053)



黒褐色土 Hue7.5YR3/2 やや粘性を帯び、しまりはよわい。
炭化物、焼土粒(1cm〜こぶし大)を
大量に含む。黒曜石、礫を僅かに含む。



① 暗褐色土 Hue7.5YR3/3 粘性なく、やややわらかい。
② 暗褐色土 Hue7.5YR3/4 やや粘質で、しまりはなし。
黒色粘土、焼土を若干含む。

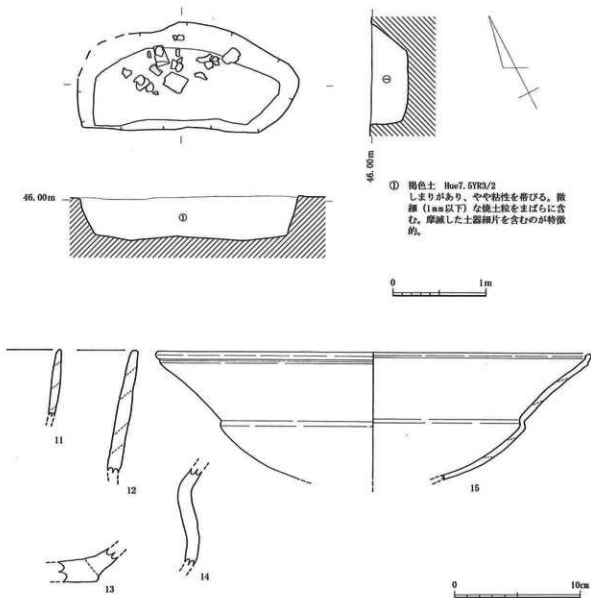


第14図 炉穴(S050・S055)

P2556 (第16図)

1. 5m×1.8mの円形に近い土坑で、断面台形を呈し30cmほどの安山岩礫のほか大小の土器片、石器が出土した。炭化物や焼土が混じる埋土は夾雑物が多く土器片がまとまって出土したことから廃棄用の土坑である可能性が高い。

16は比較的丁寧なつくりの鉢形土器で、口縁端部を丸く仕上げ外面に断面コの字状の沈線を巡らす。17は深鉢形土器で、口縁端部内面が斜傾し外面に沈線を巡らす。18は深鉢形土器の底部でやや上げ底状を呈す。19は磨製石斧の破損品で、刃部を欠損したのち敲打に使用した痕跡がうかがわれる。



第15図 土坑(SK)

S058 (第17・18図)

直径1.0m程の円形の土坑で、断面は長方形を呈す。埋土には炭化物や焼土粒をはじめ夾雑物が目立ち、床面から土器片が出土した。多数の土器片がまとまって出土したことから廃棄用の土坑である可能性が高い。

20は深鉢形土器で内外面ともナデ調整で仕上げる。21は深鉢形土器で口縁部に突起を付ける。22・23は粗製の深鉢形土器で内外面とも条痕調整の後ナデ調整される。24は鉢形土器の口縁部で器壁は薄く丁寧なナデ調整が施される。口縁端部は肥厚し丸く縁が付く。補修孔とみられる穿孔を有す。25は鉢形土器でやや外湾する口縁部の端部近く内外面に沈線を巡らす。26・27は深鉢形土器の底部。28は深鉢形土器で頸部の屈曲が浅く、わずかに外反する口縁部が伸びる。29は鉢形土器で頸部からやや外湾しながら口縁部が延びる。口縁端部は平坦に押さえられている。

S054 (第19図)

直径0.3m程の不整形の浅い土坑である。掘り込み内部およびその上面から深鉢形土器の破片が多く集中して出土し、そのほとんどを接合することができた。掘り込み埋土には多くの炭化物、焼土を含んでいた。

30、31は深鉢形土器である。同一個体であるとみられるが、正しく接合することができなかった。全体的に粗いつくりの粗製土器で、内外面とも器面のナデ調整が雑で凹凸が激しい。口縁端部は平坦に押さええて整形されている。

S061 (第19図)

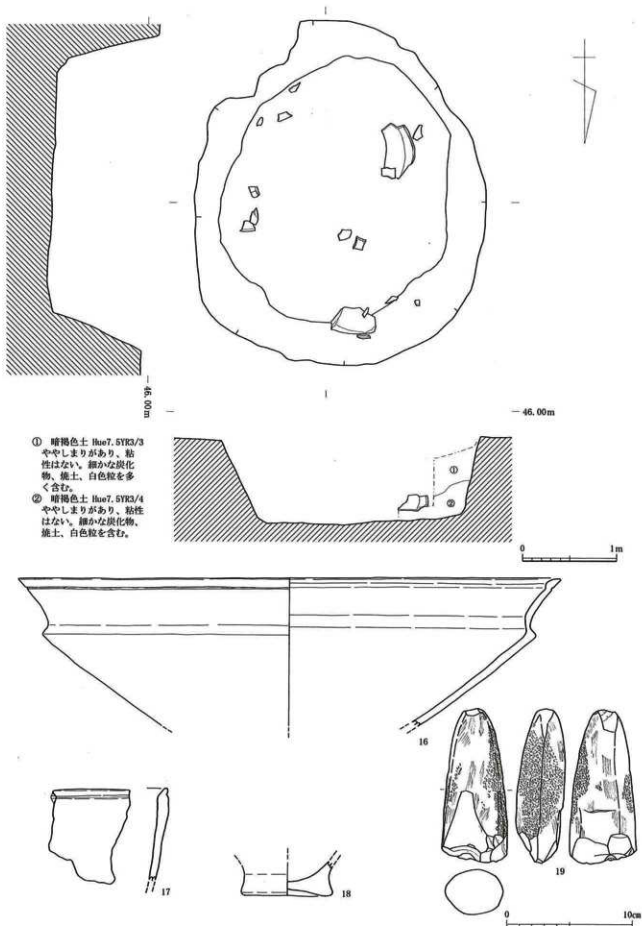
掘り込みは認められなかったが周辺の土層堆積状況から、掘り込み面から相当の部分がすでに削平を受けておりその底面付近のみが残っている可能性も考えられたので本項で扱う。0.6m×0.3mの東西に長い範囲に土器片が集中しており、その一部が接合し図のように復元することができた。

32は深鉢形土器である。比較的厚手のつくりで内外面とも条痕調整の後軽くナデられている。屈曲の弱い頸部から外反する口縁部が伸び、口縁端部は外面側が直線的なのに対し内面側は屈曲し尖るように成形される。

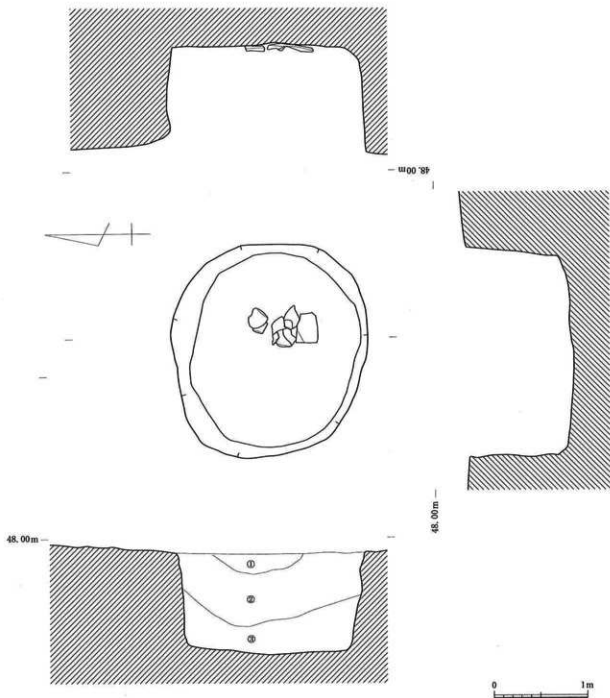
S070 (第20図)

この遺構もS061と同様に明確な掘り込みを認められなかった。0.3m四方の狭い範囲に土器片が折り重なるように集中して出土した。

33は深鉢形土器である。口径が45cmを超え他と比較して大形のものである。内外面とも条痕調整の後ナデ調整が施されるが、外面には粘土紐接合痕が明瞭に観察できる。口縁端部は平坦に押さえられ成形されている。

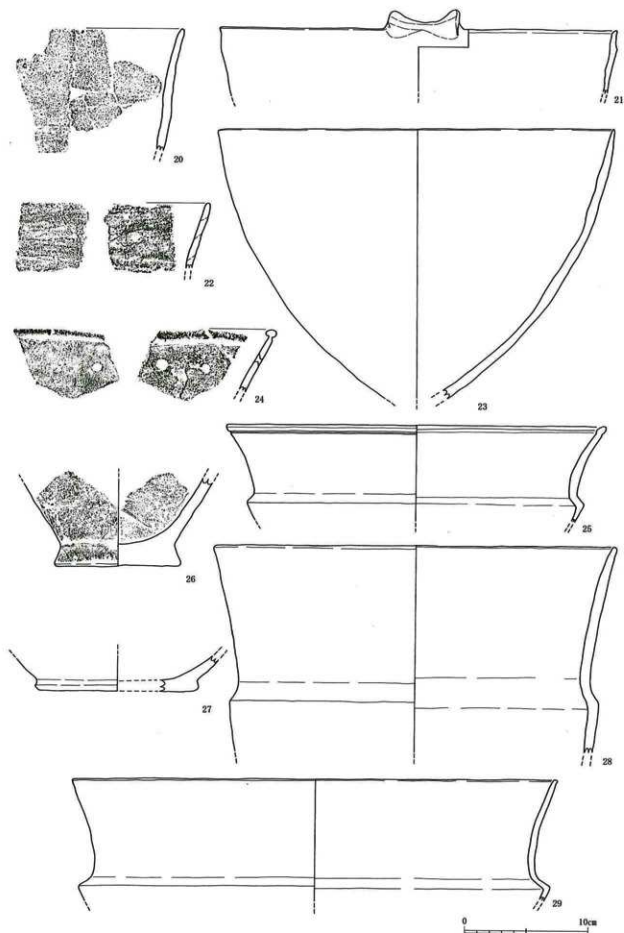


第16図 土坑(P2566)

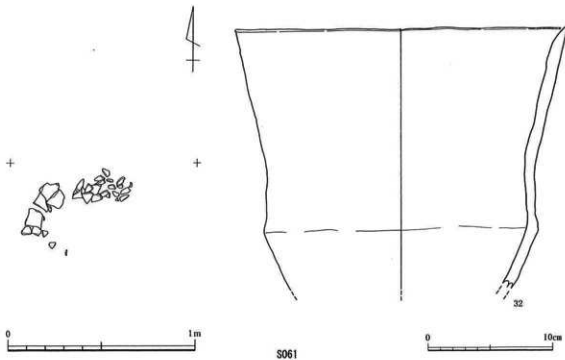
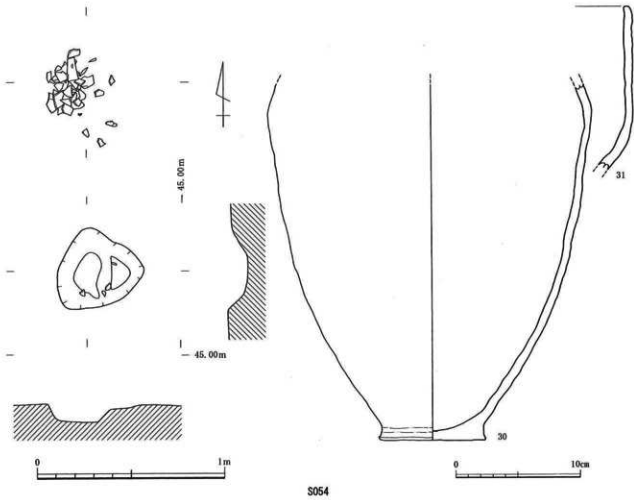


- ① 暗褐色土 Hoz7.5YK3/4 ややかたくしまる、粘性はない、微細な炭化物を含む。
 ② 暗褐色土 Hoz7.5YK3/4 ①よりやわらかく、粘性はない、径0.5mm～1cm程度の炭化物を含む。細かな塵土粒が目立つ。
 ③ 暗褐色土 Hoz7.5YK3/3 ②よりやわらかく、やや粘性を帯びる、径1mm～1.5cm程度の炭化物と塵土を含む。

第17図 土坑(S058)



第18図 土坑(S058)出土遺物



第19図 土坑(S054・S061)

S051 (第21図)

径0.9m×1.0m程度の不整形の土坑でその深さは0.2m足らずとやや浅く、その底面2カ所にさらにピット状の窪みがある。出土遺物は土器の細片が数点出土したのみでありその性格は不明である。

S052 (第21図)

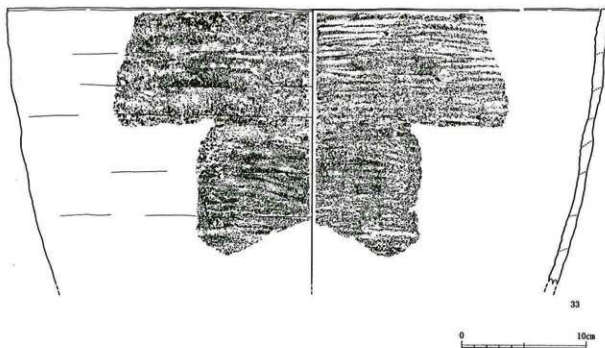
径0.8~0.9m程度の円形に近い土坑でその深さは0.1m程度と浅く、土坑内の2カ所にさらにピット状の窪みがある。出土遺物は土器の細片が数点出土したのみでありその性格は不明である。

S056 (第21図)

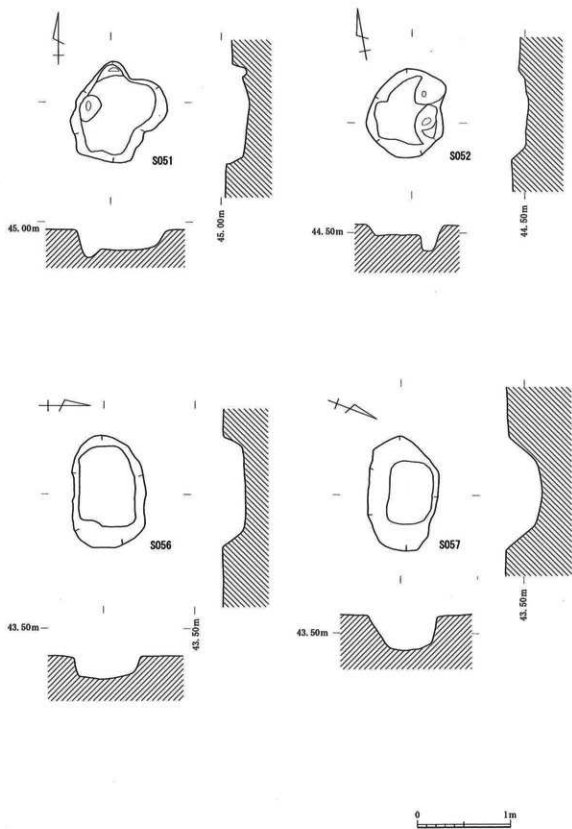
長軸1.2m、短軸0.8mほどの楕円形に近い土坑で、その深さは0.2m程である。出土遺物は土器の細片が数点出土したのみでありその性格は不明である。

S057 (第21図)

長軸1.2m、短軸0.7mほどの楕円形に近い土坑で、その深さは0.4m程である。出土遺物は土器の細片が数点出土したのみでありその性格は不明である。



第20図 S070出土遺物



第21圖 土坑(S051・S052・S056・S057)

2. 遺物とその分布

縄文土器の出土量は調査区内において明確な寡多が認められる。X=390以南とX=470以北は5×5mの区画あたり上層からの数点のみである。対してX=390～435、Y=280～300の範囲では1区画あたり30点以上出土しており、なかでもY=290以東は概ね50点以上、特にX=400～420の3区画では80点前後と集中が認められる。またX=460ライン付近にも20点以上30点未満とやや希薄ながら相対的な出土の集中が認められる。こうした集中は遺構の分布にも対応している。

〔土器〕

包含層から出土した縄文土器はほとんどが晩期前半に属するものであるが、数点中期後半～後期初頭に属する阿高式系統の土器などが出土している。

34・35は中期後半～後期初頭に属する土器である。34・35は阿高式の深鉢口縁部で、34は外面に先端の粗い施文具で縦位および横位の浅い凹線が施されるほか口唇部には同様の施文具で刺突がなされる。35は指頭爪先をもって口縁部に刺突状の凹点文を施す。

36～71は晩期前半に属する土器である。36・37は組織痕土器。38・39は肥厚した口縁部文様帯に沈線を施される。40・41は文様帯を無文とし口縁部断面が三角形を呈す。42・43は口縁部文様帯に浅い沈線が施される。

44～51は無文土器である。粗製の土器であり器形および調整法から晩期前半に属するものとみられる。多くは二枚目の貝殻条痕調整の後ナゲ調整されているが、ナゲずに条痕調整のままのものも少なくない。

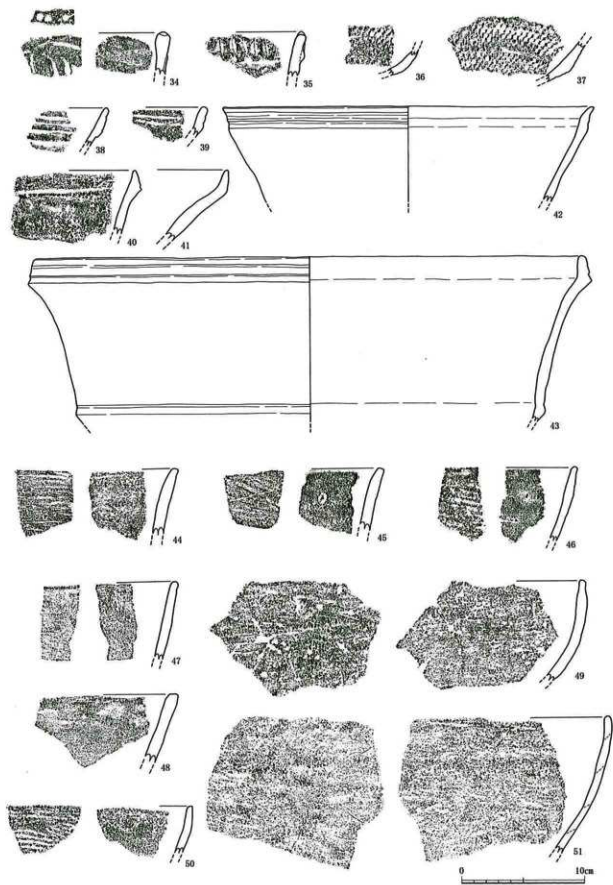
52～60は外反する鉢および深鉢の口縁部である。52～55・57・60は胴部の屈曲から緩やかに外湾し口縁部は直立気味にやや立ち上がる。56は口縁直下に穿孔を有し、53は直立する口縁部外面に沈線を施される。59は外反する口縁部で外面は直線的だが内面に段を有す。58も外面は直線的であるが口縁端部外面に浅い沈線が施され、内面は半円状に肥厚する。57は口縁部上に低い波状口縁を呈す。60は胴部の緩い屈曲から直線的な口縁部が延びる。

61・62は外に開く器形で、口縁部上部が強く屈曲し端部はやや立ち上がる。63～71は胴部に最大径がある器形で屈曲ののち内湾し口縁部は外反する。口縁端部は内外に明瞭な段を有する。

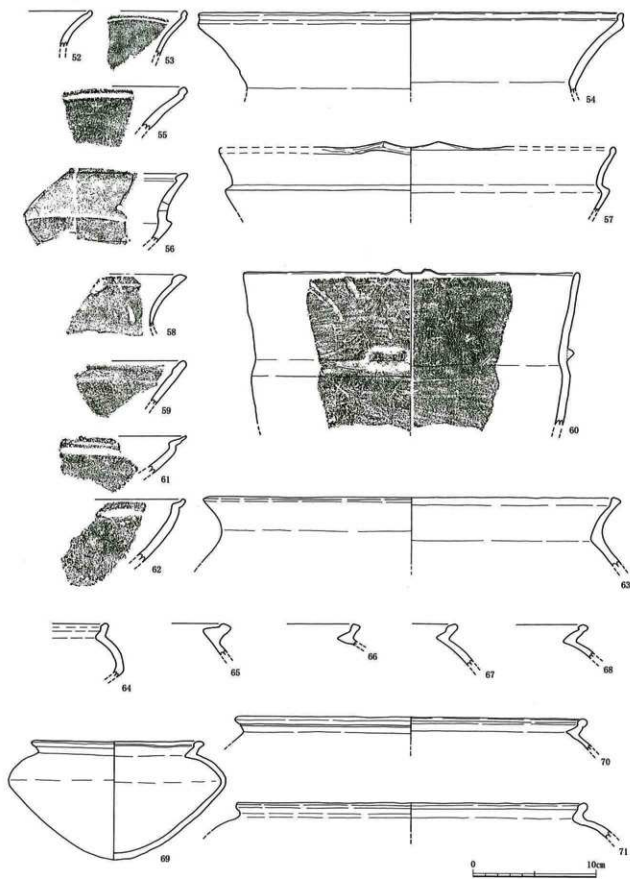
72～100は縄文土器の底部である。破片資料が多く全体の器形が窺える資料はない。

72～92は平底である。72・73は底部から胴部への立ち上がりが直線的で、内面の底部と胴部との境に屈曲があり、底面と胴部の器厚が変わらない。74～78は底部から胴部への立ち上がりが直線的で、内面は胴部から底部へと緩やかに接続し底部が胴部に比べて厚い。79～82は平底で底面付近は垂直に立ち上がり胴部で外側に開く。83～92は平底で底面が張り出し括れを有する。92はやや上げ底状を呈する。

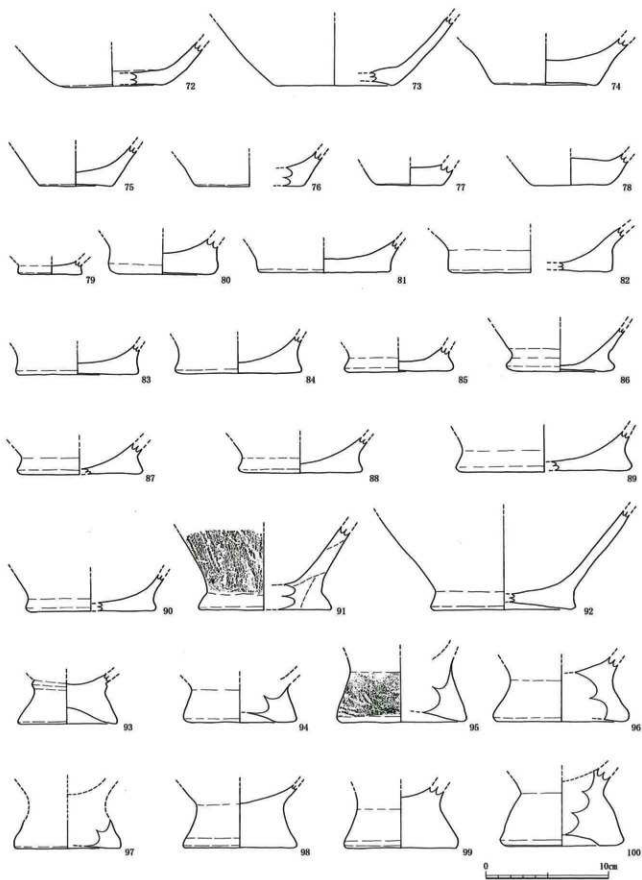
93～100は平底で底部が厚く高台状を呈す。93～96は上げ底状となっている。



第22図 包含層出土縄文土器(1)



第23図 包含層出土縄文土器(2)



第24図 包含層出土縄文土器(3)

〔石器〕

石鏃(第25図)

101~130は石鏃である。黒曜石製が多い。101は無茎で刃部の縁辺に加工が施される。102および103は凹基無茎鏃であり、縁辺に細かな加工が施される。102は、基部の凹みが深い、片側を欠損する。104は基部に抉りはないが非常に薄手の作りで縁辺部に加工を施す。130は剥片の縁辺に加工を施し三角形を呈すが、その加工は少なく、厚みも残している。石鏃未製品の可能性はある。

石匙(第25図)

131・132は石匙である。131は横長剥片を素材として縁辺部に加工を施し刃部と基部のつまみをつくりだす。素材の制約のためか刃部は左右非対称で斜行する。132は横長剥片を素材とした石匙で刃部は直点的かつ横長である。刃部及び基部のつまみ部には丁寧な加工を施すが、縁辺の一方は素材を生かして剥離を加えていない。

石錐(第25図)

133はチャート製の石錐である。剥片の縁辺に細かな加工を施し、逆L字状を呈する。先端はわずかに欠損する。

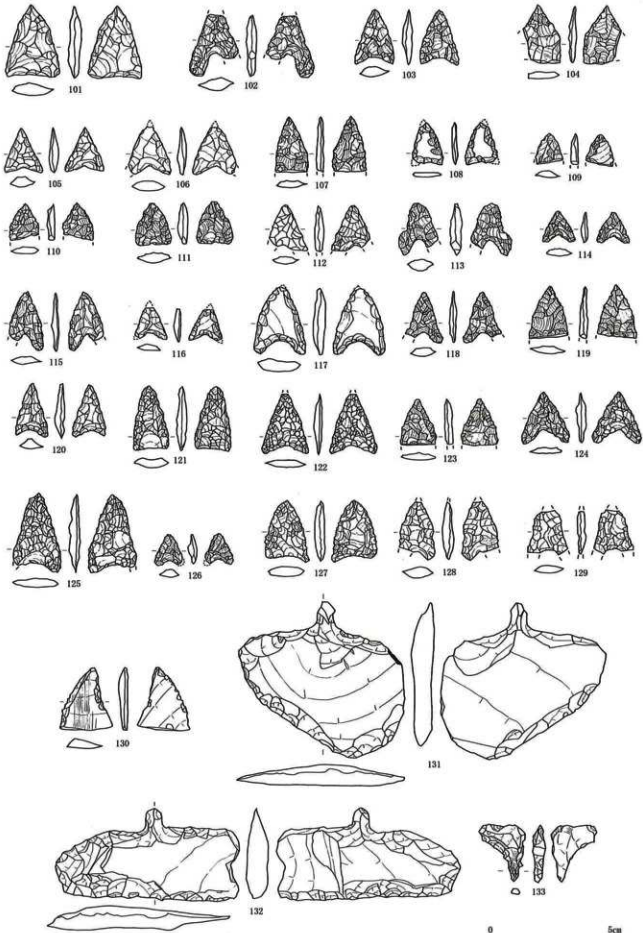
打製石斧(第26・27図)

134~148は打製石斧である。欠損している資料がほとんどであり、また全体に摩滅している。134~136は最大幅が刃部のやや上部にありやや厚みがある。137は扁平で薄く、刃部付近に最大幅をもつ。両側縁および基部に加工を施すがやや粗い。刃部に剥離が求められるがこれは使用によるものとみられる。138は扁平で刃部がやや尖り気味である。加工は粗い。139・140は両側縁に対する粗い加工により成形されており、刃部にやや丸みをもつ。141・142は比較的大型で厚み・重量ともに他の2倍程度ある。141はほぼ長方形を呈すが、刃部付近にがややふくらむ。142も刃部付近でややふくらみをもつが刃部を欠損する。143~145は両側縁および刃部に加工を施す。144は刃部加工が片面のみである。146~148は長方形で短冊形を呈す。縁辺部に粗い加工を施し、基部は直線的である。147・148は刃部を欠損する。

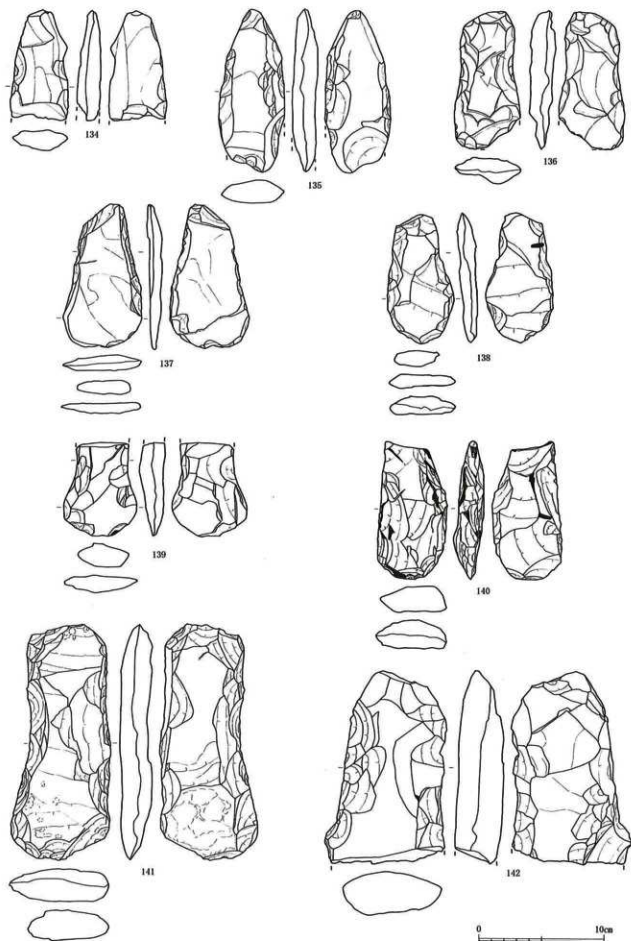
磨製石斧(第27図)

149~158は磨製石斧である。欠損し一部分のみ出土の資料が過半数であるが、おおむね小型の磨製石斧が多い。

149は基部を欠損するが断面角柱状でいわゆるノミ状を呈する。刃部、側面とも丁寧な研磨が施され、刃部は片刃よりの両刃である。150は小型で基部を欠損する。中央よりに最大幅を有し全面に研磨を施され両刃をなす。151も小型であるが、刃部が最大幅を示す。全面に研磨が施され両刃をなす。152は全体に敲打による成形の後一部に研磨を施している。刃部は欠損している。153は敲打による成形後研磨を施しているが、刃部は研磨されていない。未製品か。154は本遺跡から出土している磨製石斧の中では比較的大型の資料である。ただし、基部以外は欠損しており、折れた後に敲打器として再利用されている。基部の片面のみに研磨を施す。



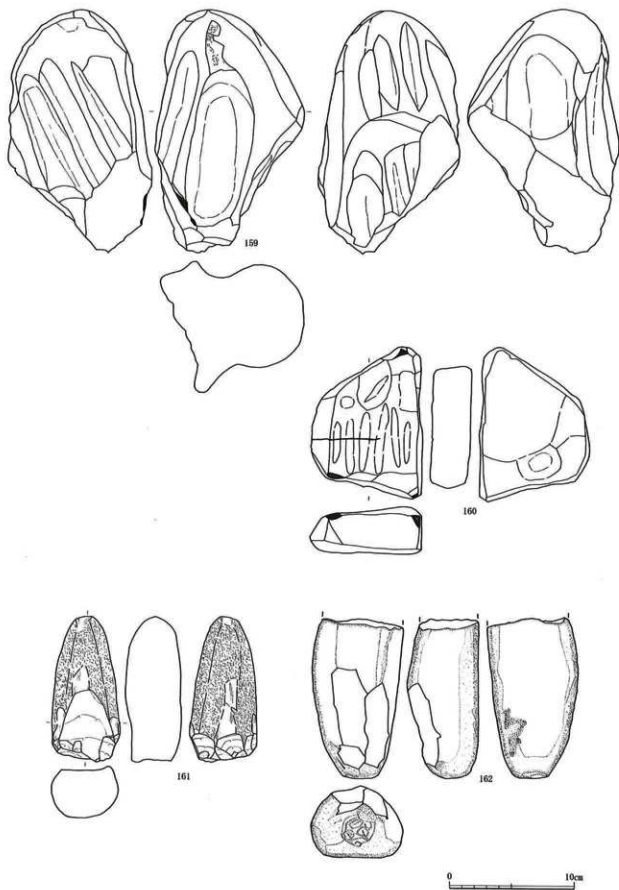
第25図 包含層出土石器(1)



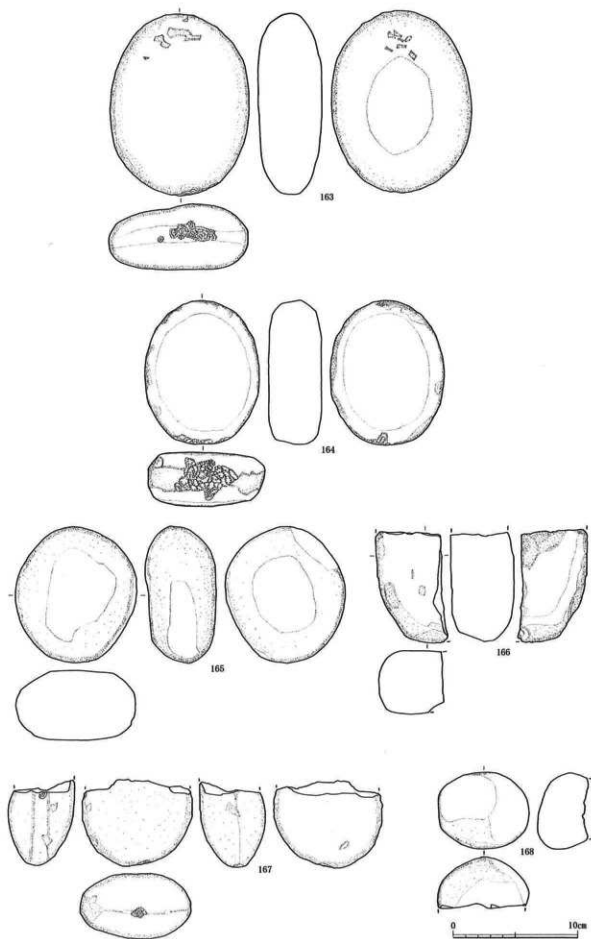
第26図 包含層出土石器(2)



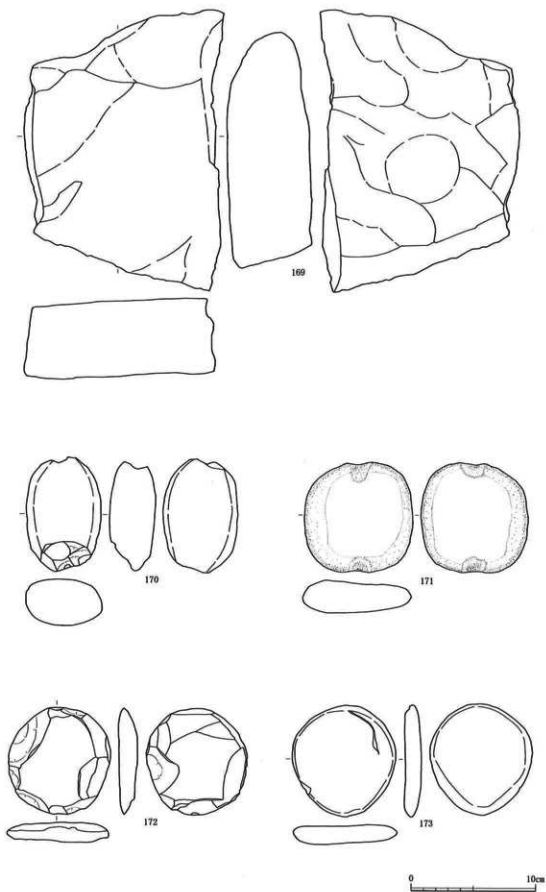
第27図 包含層出土石器(3)



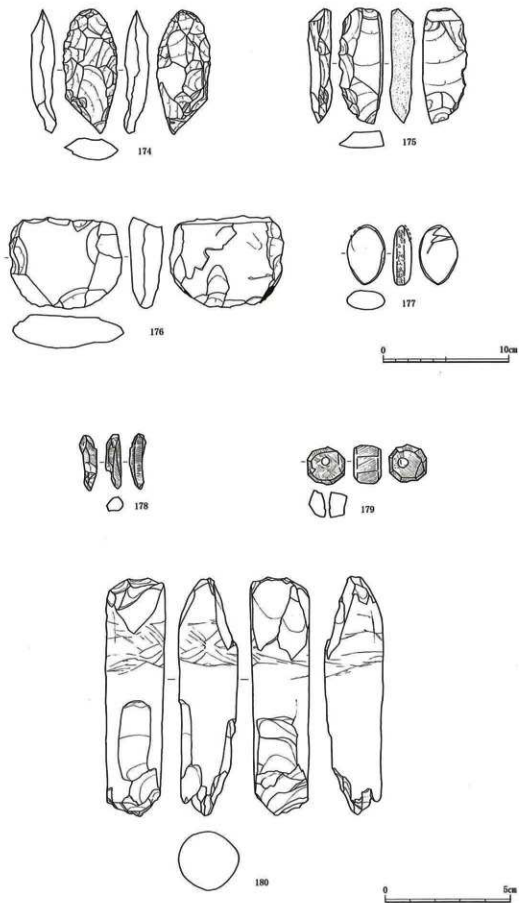
第28図 包含層出土石器(4)



第29図 包含層出土石器(5)



第30図 包含層出土石器(6)



第31図 包含層出土石器(7)

155は基部のみ、156～158は刃部のみ出土である。155は欠損部端に剥離が加えられている。156・157とも刃部両面に丁寧な研磨が施され両刃をなす。158は刃部付近以外を欠損しているが、やや丸みを帯びた刃部および側縁に丁寧な研磨が施されている。

砥石（第28図）

159・160は砥石である。159は砂岩製で礫の各面に溝を有す。それぞれの溝ごとに幅および深さが異なり、多種多用途の磨製石斧の研磨に用いられたものと考えられる。160も砂岩製で片面のみに6条の1～2cmの溝を有する。深さはごく浅い。

磨石・敲石（第28・29図）

161～168は磨石・敲石である。161は全面を敲打により成形されているが、刃部を欠損する。石斧の転用品か。162は基部側を欠損するが棒状の石器だったとみられる。頂部に敲打による凹みがある。163～166は楕円形の礫を素材としている。163・164は長軸側面に敲打痕があり、縁辺は全体的に磨れている。165～166も縁辺は磨れてなめらかになっている。167はあばた状の敲打痕が認められる。

台石（第30図）

169は台石である。断面長方形を呈し表面は平坦だが敲打による細かな窪みが認められる。

石錘（第30図）

170は楕円形の礫の長軸両端を打ち欠いて袂りを作り出している。171は円礫の側縁2ヶ所に窪みを設けている。縁辺および袂り部は磨れてなめらかになっている。

その他の石器（第30・31図）

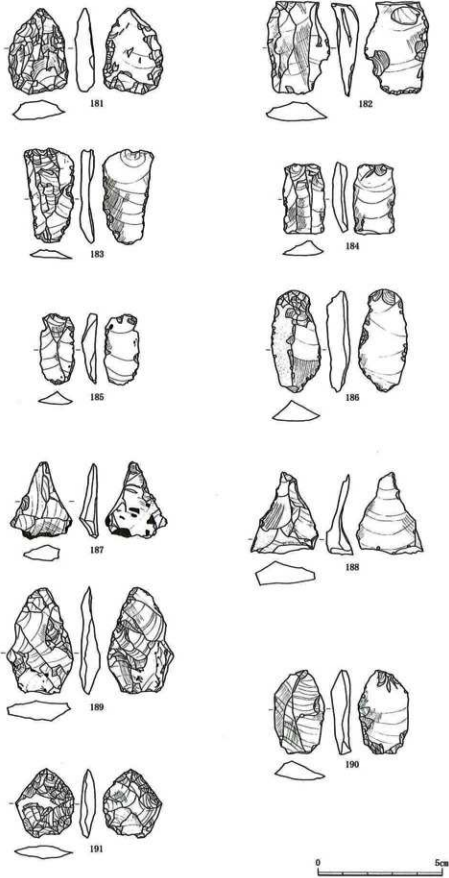
172・173は円盤状石器。174は槍先状を呈す石器で両面とも全体に加工が施され中央付近に厚みがある。175は縁辺に加工があり、1側面は自然面を残す。176はやや隅丸の扁平礫の縁辺に粗い加工を施す。177は表裏面は無加工であるが縁辺は研磨され楕円形を呈す。

装身具（第31図）

178は全面が非常に丁寧に研磨されているが両端が欠損しており全体形はつかめない。179は八角形状の玉状を呈し、全面に研磨が施される。両側から穿孔される。

石棒（第31図）

180は石棒である。現存長9.4cm、直径2.3cmの断面円形で、上下とも欠損しているため全体形は不明だが下に向かうに従ってわずかに細くなる。一端に線彫りの文様を有す。弧線を繋げたX字状繁文と認められる部分を正面とすると、他の面はほぼ平行の断続的な直線のみである。また正面以外の線刻はより浅く細く引っかき傷のような感じで、それぞれの線は断続的なもので長いものでも12mmほどしかない。そのため意図的に刻まれた線なのか偶発的な傷なのか不明確な線も混じる。九州南部に分布する同様の文様を持つ石刀・石棒の類例は文様帯の作出から文様にいたるまで線刻・浮彫りによる規則的かつ精緻なものであり、それらと比較すると本例の線刻は不明瞭かつ不規則で異質である。石材は堅緻で表面は丁寧に研磨され縦方向の研磨痕が認められる。



第32図 包含層出土石器(8)

第2節 古代の遺構と遺物

1. 遺構

古代期の遺構は調査Ⅱ区および調査Ⅲ-2区のほぼ全面において検出したが、中世期以降の空堀状遺構をはじめとする後世の遺構などにより攪乱を受けている範囲も大きい。特に調査範囲の南半部は古代の包含層であるⅣ層の堆積自体が極めて薄いか存在せず、遺構も一部の検出しかできていない。調査範囲の南に接する県調査区でも古代の遺構が検出されているため、本来は一連の遺構および包含層が存在していたと考えられる。

以下、遺構の種別ごとに内容を述べる。

1) 竪穴住居址

S039 (第34図)

西側にカマドを有する竪穴住居址である。大半を中世の空堀状遺構により切られており、残存部から推定すると一辺5m弱の規模となる。南西隅に深さ30cm程度の土坑を有する。

カマドは床面の地山をやや浅く掘り窪め暗褐色粘質土を貼り、さらに黒褐色粘質土や褐色土によって構築されているが、カマド自体東側の大部分では床面に近い部分しか残存していなかったため全体構造はつかめきれていない。袖部は被熱によりかたくしまる。煙道が住居址壁面に設けられているが覆架構造は不明である。

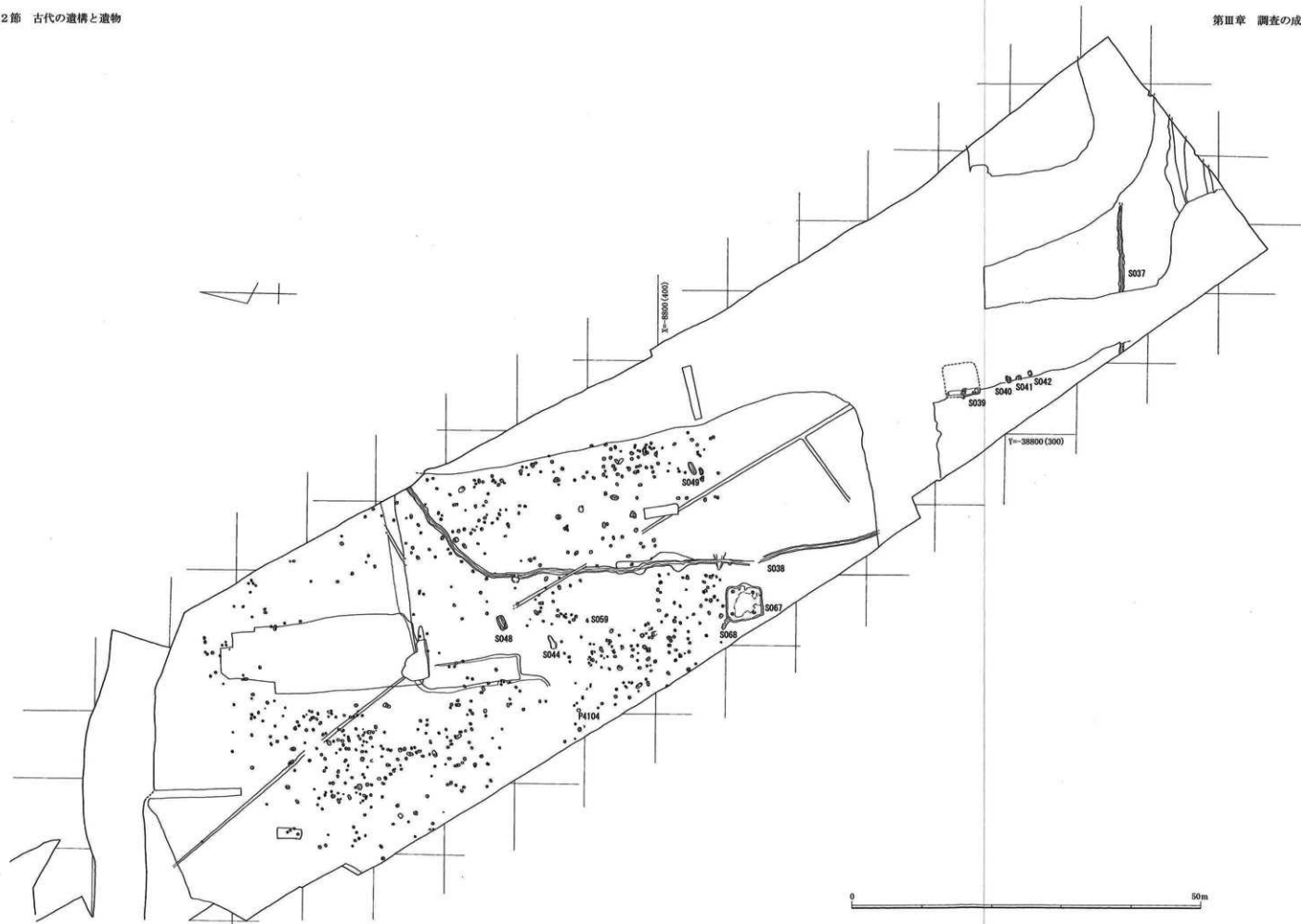
出土遺物は土器細片を含めても少量であったが甕口縁部2点を図示した。いずれも内面はケズリ調整で外面はハケメ調整を施す。

S067 (第35・36図)

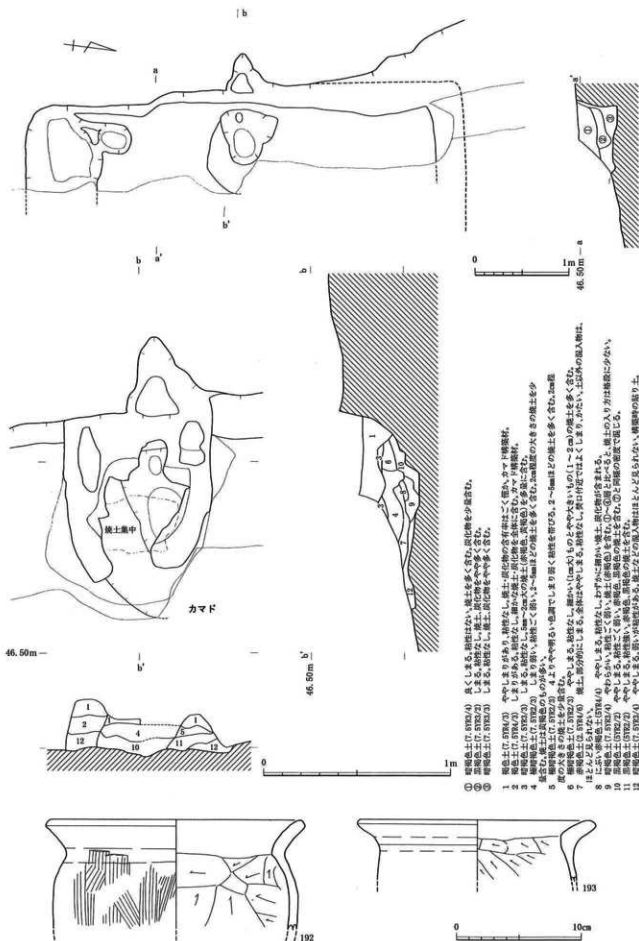
東側にカマドを有する竪穴住居址である。一辺5mを測り全体的に残存状況は良好であったが、この住居址周辺はⅣ層の堆積が極薄いか存在しない部分であるので、住居構築時本来の深さは留めていないとみられる。中央部付近から南側にかけて黒褐色土の貼床が認められ、この範囲は硬化面の拡がりを確認することができた。

カマドは住居址東壁の中央やや北寄りに接して構築されている。両袖部の残存は10cm程度であり上部構造等是不明である。右袖部のやや離れた部分には焼土および黄褐色土混じりの焼土が集中する部分があり、その下位にはピットが存在していた。2基接しているピットのうち西側のピットは焼土により充填されていた。

出土遺物は75点を数えるが小破片がほとんどであり、土師器甕2点と甕把手破片、および須恵器壺、坏を図示している。198は住居址南西隅の床面上で出土した。

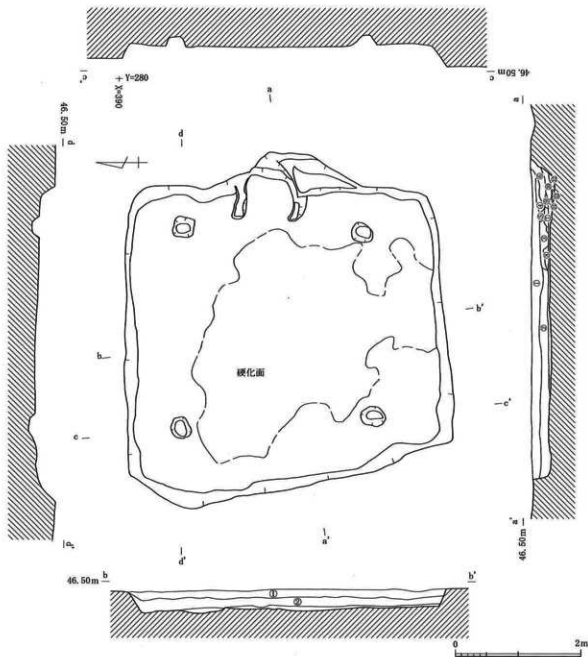


第33図 遺構配置図(古代)



① 厚層赤土 (S192/1) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む、肥後地を少量含む。
 ② 厚層赤土 (S192/2) じまらぬ、粘質ない、換土をやや多く含む。
 ③ 厚層赤土 (S192/3) じまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ④ 厚層赤土 (S192/4) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑤ 厚層赤土 (S192/5) じまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑥ 厚層赤土 (S192/6) じまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑦ 厚層赤土 (S192/7) じまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑧ 厚層赤土 (S192/8) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑨ 厚層赤土 (S192/9) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑩ 厚層赤土 (S192/10) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑪ 厚層赤土 (S192/11) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑫ 厚層赤土 (S192/12) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。
 ⑬ 厚層赤土 (S192/13) ややこまらぬ、粘質ない、換土を多く含む。

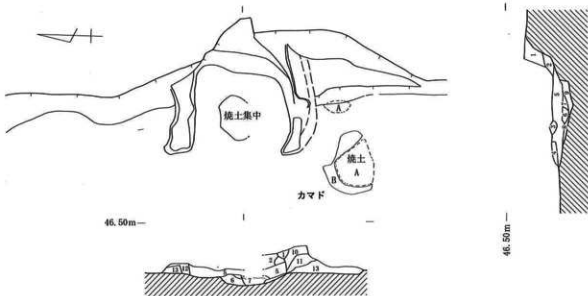
第34図 竪穴住居址 (S039)



- ① 黒褐色土(10TR2/3) しまり弱い、粘性やや強い、炭化物、焼土をまばらに含む、わずかに黄褐色土の塊(1~2cm)を含む。
- ② 黒褐色土(10TR2/2) しまり弱い、粘性やや強い、黄褐色土塊をやや多く含む、焼土をまばらに含む。
- ③ 暗褐色土(7.5YR3/3, 3/4) ①・②層よりもしまり弱く、弱い粘性あり、黄褐色土塊(糠層の塊?)をかなり多く含む。
- ④ 暗褐色土(7.5YR2/4) しまり弱い、やや粘性あり、2cm大の焼土をまばらに含む。部分的に細かい焼土の粒が多く見られる。
- ⑤ 暗褐色土(7.5YR2/3) しまり弱い、やや強い粘性あり、焼土(1cm大)をわずかに含む、その他目立つ混入物はない。
- ⑥ 暗褐色土(7.5YR2/3) ややしまる、弱い粘性あり、黄・白色粒(2~3cm)をやや多く含む、炭化物をわずかに含む。
- ⑦ 暗褐色土(7.5YR2/3) ややしまる、弱い粘性がある、黄・白色粒、焼土(いずれも径1cm以下)を多く、炭化物をわずかに含む、カマド天井の崩落土か。
- ⑧ 暗褐色土(7.5YR2/4) ややしまる、粘性ほとんどない、黄・白色粒の細粒を多く含む。
- ⑨ 暗赤褐色土(5YR3/4) しまる、粘性なし、主に焼土、少量の黄色土塊、カマド天井、壁面の崩落土か。
- ⑩ にぶい赤褐色土(5YR 4/4) ややしまる、粘性ほとんどない、大きさが細粒~2cmの焼土をブロック状に多量に含む。
- ⑪ 赤褐色土(5YR 4/6) ややしまる、粘性なし、焼土層、混入物はほとんどない、燃焼部の土か。
- ⑫ 暗褐色土(7.5YR 3/4) しまる、弱い粘性がある、焼土をまばらに含む、熱により変質したVI層(VII層より粘性が弱い)、カマドの構造に関する土(充填土)か。

貼床 黒褐色土(10TR2/3)

第35図 竪穴住居址(S067)



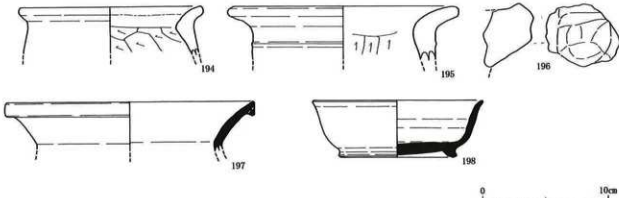
46.50m

46.50m

- 1 黒褐色(7.5YR3/2) しまり、粘性とも弱い、炭化物を少量、焼土を多く含む。住居層①層と対応する。
- 2 灰褐色(7.5YR4/2) しまり、粘性とも弱い、住居層①層と対応する。
- 3 暗赤褐色(5YR3/4) しまり、粘性とも弱い、焼土を多く含む。カマド天井等の崩落土か、住居②層と対応する。
- 4 暗褐色(7.5YR3/3) しまり、粘性とも弱い、粘礫層の土と同じか。(地崩落土?)、住居②層と対応する。
- 5 にぶい赤褐色(5YR4/4) しまり、粘性とも弱い、炭化物を少量、焼土をブロック状に含む。住居③層と対応する。
- 6 褐色(2.5YR6/6) 焼土層、しまり、粘性とも弱い。
- 7 にぶい褐色(7.5YR6/3) しまり、粘性とも弱い、焼土を多く含む。
- 8 赤褐色(5YR4/6) しまり、粘性とも弱い、焼土をブロック状に含む。住居④層と対応する。
- 9 暗褐色(7.5YR3/3) しまり、粘性とも弱い、焼土をブロック状に含む。住居⑤層と対応する。
- 10 明褐色(10YR3/3) しまり、粘性とも弱い。
- 11 灰褐色(7.5YR4/2) 粘性強い。
- 12 にぶい褐色(7.5YR6/3) しまり、粘性とも弱い、黄・白・赤色土(細粒から1cm大)を多く含む。
- 13 暗褐色(7.5YR3/3) しまり、粘性とも弱い。
- A 焼土集中範囲。
- B 焼土、Ⅷ層の二次堆積土のような黄褐色土、および白色土(径1cm以下)を含む。



0 1m



0 10cm

第36図 竪穴住居(S067)

ii) 土壌

S048 (第37図)

長軸約1.9m、短軸約0.9mの長方形を呈す深さ0.3m程度の土壌である。遺構埋土はすべて2mmメッシュの篩選別を行ったものの出土遺物はなく人骨も出土していないが、その形状から墓坑の可能性が高い。長軸方向及び短軸方向の一部断面形状が段を成しているため木棺墓の可能性も考えられるが、木質の残存もなく土層堆積状況からはそれと判断し得なかった。

S049 (第37図)

長軸約1.5m、短軸約0.5mの長楕円形を呈す深さ約0.3m程度の土壌である。遺構埋土はすべて2mmメッシュの篩選別を行ったものの人骨も出土していない。その形状から墓坑の可能性が高い。土師器坏の破片と須恵器坏の底部片が出土しているが、2点とも埋土上層からの出土であり副葬品とはみなし難い。

iii) 溝状遺構

S038 (第38図～40図)

幅約0.6m、深さ0.3～0.5mほどの断面台形を呈する溝である。検出した溝の東端および西端が調査範囲外まで続いており全体の様相は不明だが、溝底面のエレベーションおよび土層の状況から排水の機能は考え難く区画のための溝であると考えられる。

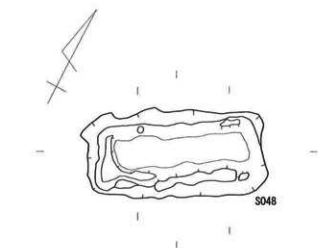
S037 (第41図)

幅約0.6m、深さ0.3～0.5mほどの断面台形を呈する溝である。溝底面が東から西に向かって下がっており西側は調査範囲外へと延び東側も本来続いていたものが削平されて途切れているとみられる。S038と規模・形状共に近似しており、同様の時期および機能を有しているものと考えられる。

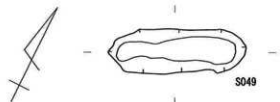
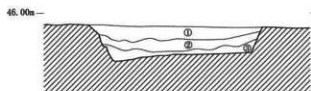
iv) 廃棄土坑

S059・P4104 (第42図)

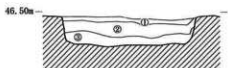
S059とP4104は内部に暗褐色粘質土と多量の貝殻を含む土坑を含む。貝殻は細かく粉砕されているが大部分はカキ殻であるとみられる。焼土や炭化物等も含まれており食料残渣が廃棄されたものであろう。同様の土坑はこの2基のほかもう1基、確認調査時に近傍から検出されている。



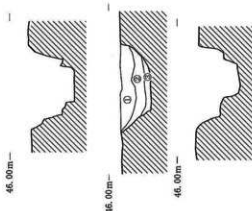
S048



S049



200



- ① 褐色土層 Hue7.5YR4/3
ややしまりのある土で、粘性はない、細かな焼土粒をこくわずかに含む。
- ② 暗褐色土層 Hue7.5YR3/4
①よりも色暗く、若干柔らかい、わずかに粘性を帯びる。細かな焼土粒をこくわずかに含む。
- ③ 黒褐色土層 Hue7.5YR2/2
①、②よりも柔らかくやや粘性を帯びる。細かな焼土粒をわずかに含む。
- ④ 暗褐色土層 Hue7.5YR3/3 わずかに粘性を帯びる、ややしまる。こくわずかに微細な炭化物・焼土を含む。



- ① 暗褐色土層 Hue7.5YR3/4
粘性はない、焼土を多く含み、炭化物を少量含む。
- ② 黒褐色土層 Hue7.5YR3/2
ややしまりがある、わずかに粘性あり、焼土・炭化物を少量含む。
- ③ 極暗褐色土層 Hue7.5YR2/3
ややしまる、わずかに粘性あり、焼土・炭化物をわずかに含む。底面近くには暗褐色土をブロック状に含む。



0 1m

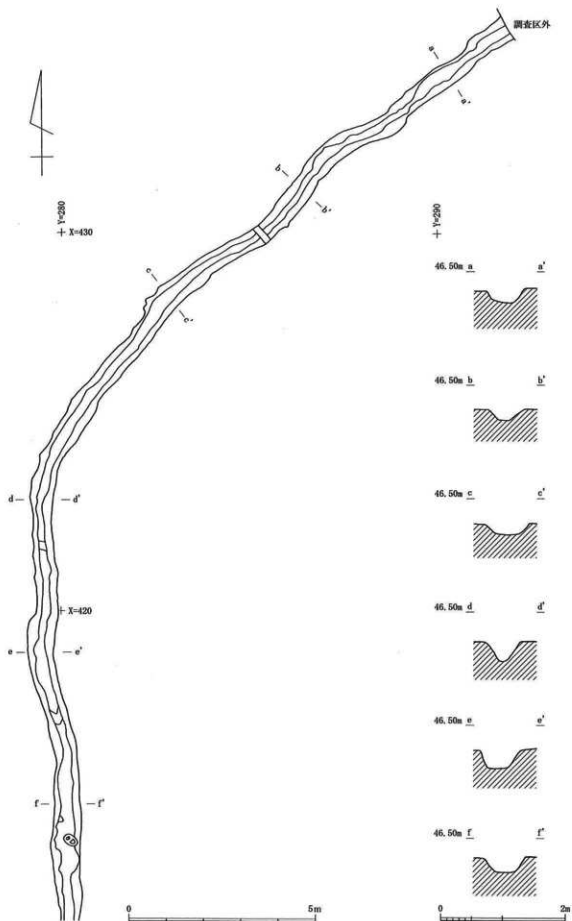


201

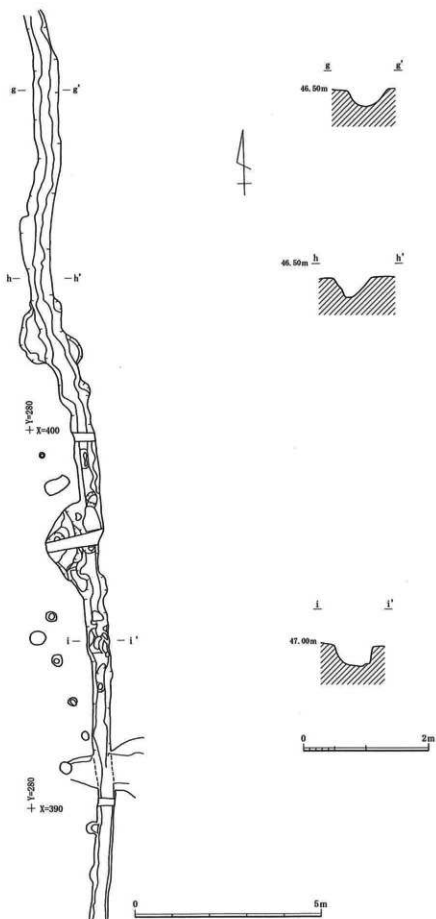


0 10cm

第37図 土坑(S048・S049)

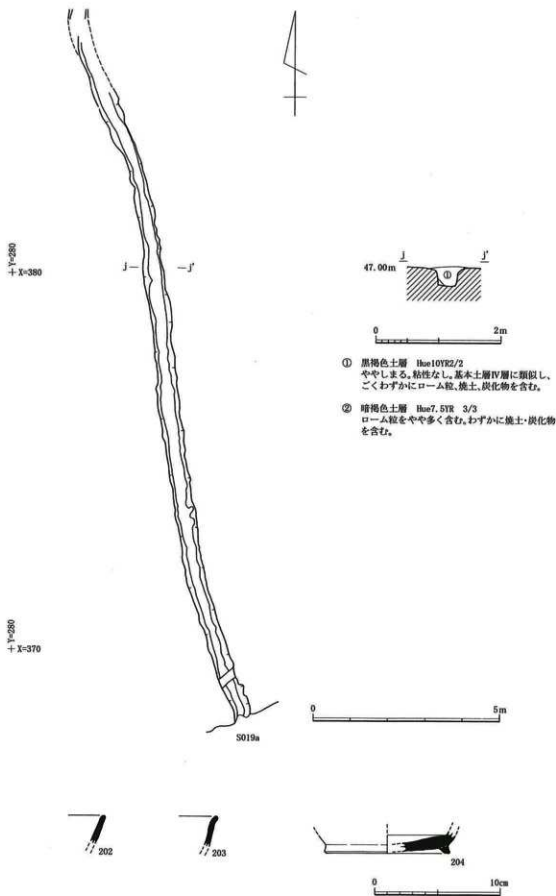


第38図 溝状遺構(S038) 1

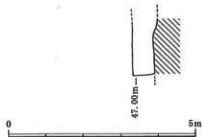
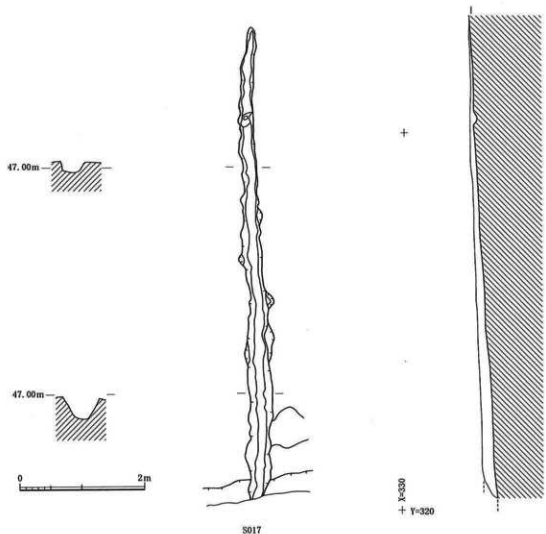


第39図 溝状遺構(S038) 2

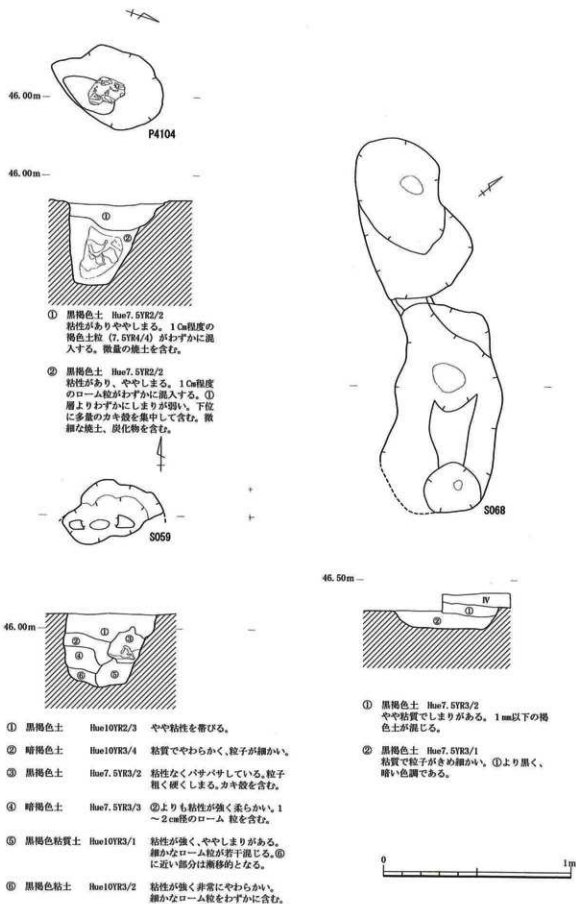
第2節 古代の遺構と遺物



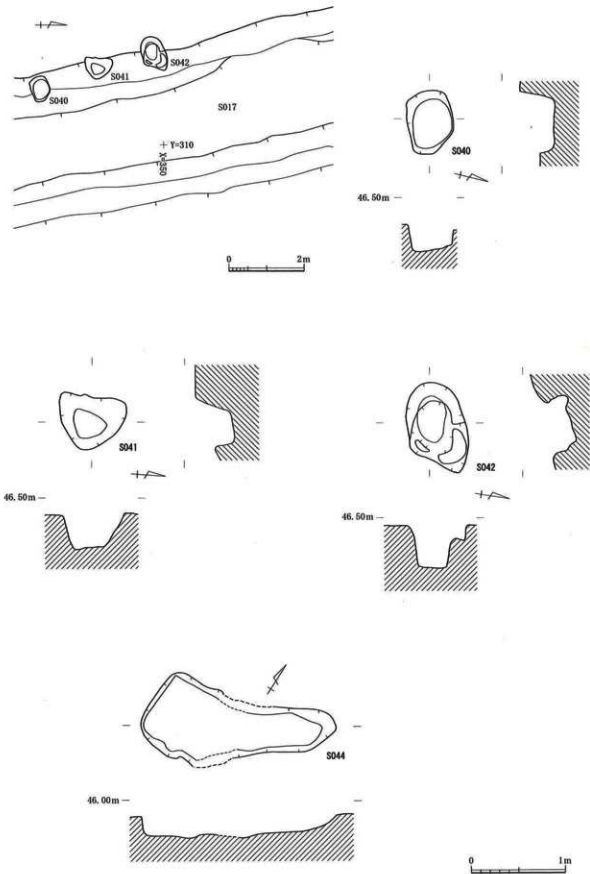
第40図 溝状遺構(S038) 3



第41図 溝状遺構(S037)



第42図 土抗(S059・P4104・S068)



第43図 土坑(S040・S041・S042・S044)

v) 土坑

S040・S041・S042 (第43図)

S040～S042の3基の土坑は並んで検出されたが、いずれも中世期の空堀状遺構に東側の上部を切られており東側にさらに同様の土坑が存在したのかこの3基のみなのかも判然としない。

S045・S068 (第42・43図)

S045は平面不整形で深さも10cm程度とごく浅い土坑である。S068も同様に平面不整形で深さ15cm程度の土坑であり、出土遺物も土器小破片が出土したのみで性格は不明である。なお、S068は竪穴住居址(S067)に南西隅を切られている。

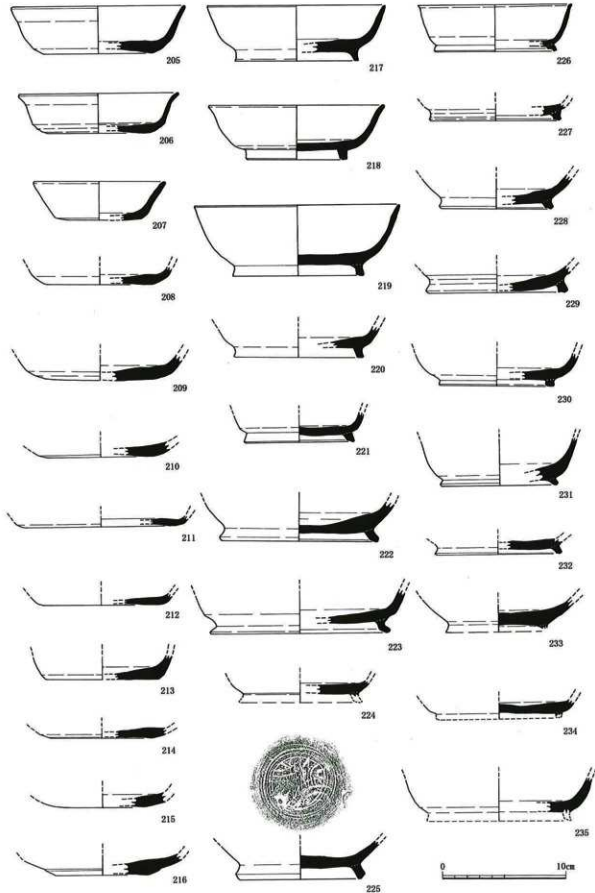
2. 遺物とその分布

古代の包含層であるIV層は調査区内の場所によってその堆積状況に偏りがあるため、遺構外からの古代の遺物出土状況にも偏りがある。包含層中の遺物について5m×5mの区画ごとに遺物取り上げをおこなったが、X=440以北およびX=390以南のグリッドでの出土量はI～IV層あわせても1区画あたり10点に満たない。IV層の堆積が比較的安定し遺構も集中するX=350～430間のグリッドであっても最多69点、最少1点で平均すると25点程度である。なお溝状遺構S038の東西で遺物出土量が異なるといった状況は認められなかった。

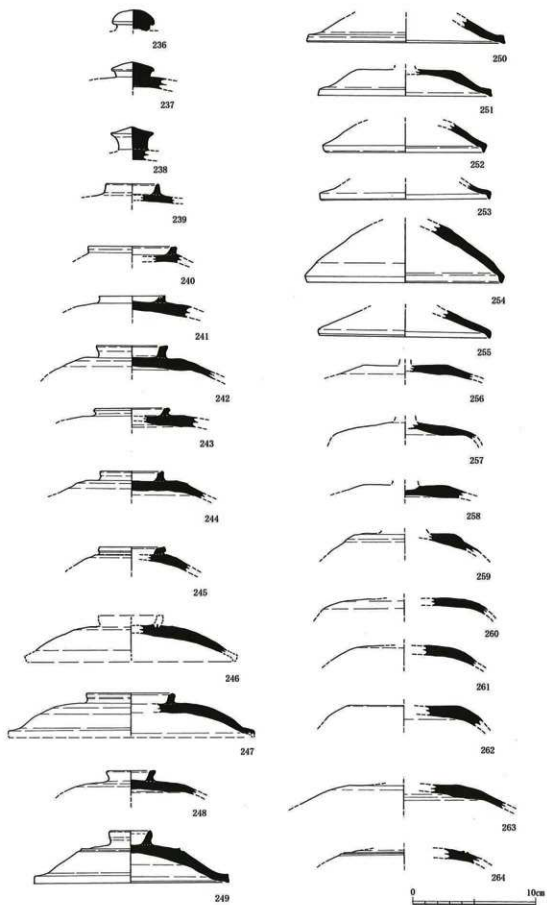
[須恵器]

古代の包含層であるIV層を中心として出土したが、その上層であるI層～III層および中世の遺構からもほぼIV層出土量と変わらない量が出土している。器種は坏が多い。なお、土師器の出土量に比して須恵器の出土量が極端に多いことは特徴的である。ただし、ローリングを受け摩滅したものが多く図示できるものは少ない。

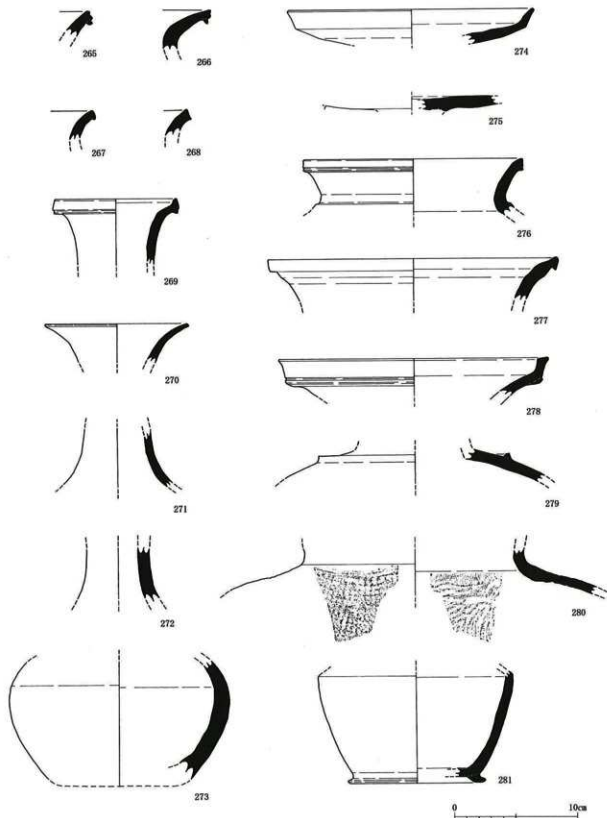
坏身は高台のあるものとなないものがあり、器形および高台の形状で分類することができる。205～207は口縁部がやや外に開き、体部は丁寧なヘラナデ調整が施される。207は底部から直線的に開き口縁部がやや厚みを持つ。208～216は坏身の底部とみられるが小片が多く詳細は不明である。211は皿、213は壺の底部かもしれない。217～235は高台のつく坏である。217～220は高台の断面形がほぼ長方形となる直線的な高台で口縁部までまっすぐに開く。217は貼り付けられた高台の胎土色調が坏部と異なり、別の胎土を用いているようである。221は高台底面が内側に傾斜する。222～225は高台が外に向かって屈曲し、接地面外面に面を成す。222は高台の接合面に刻みを入れている。223は長頸壺の底部か。225は内面底部が同心円タタキの後ナデられていることから坏ではなく壺の可能性がある。226～235は低い高台をもち、高台の接地面が外側だけに偏っている。



第44図 包含層出土遺物 1



第45図 包含層出土遺物2



第46図 包含層出土遺物 3

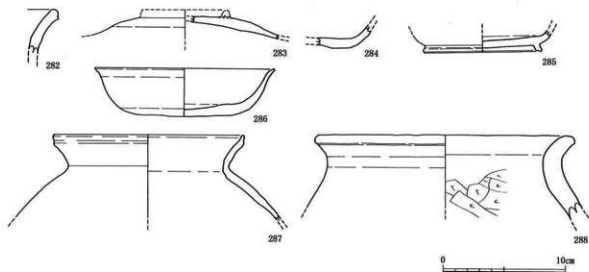
蓋は3種29点を図示した。236～238は宝珠付蓋の一部である。1は頂部が丸みを帯びた平坦、2・3は断面三角形に尖る。239～249はつまみをもつ蓋である。つまみの径および端部の形状によって分類できる。頂部まで丸みをもつ器形である。受け部分が長い。249～514は坏の蓋であるとみられるが破片のため詳細は不明である。

坏以外の器種として高坏、長頸壺、甕などがあるが、いずれも破片であり全体の器形を伺える資料はない。265～267は壺の、268は甕の口縁部である。口縁端部に粘土紐貼り付け、あるいは平坦におさえて整形し口縁帯を形成する。270は大きく外反する口縁部である。271、272は高坏の脚部、275は坏部の破片。273は壺の体部に丸みを有し内外面にタキを残す。274は皿。276、277は甕の口縁部で口縁端部に口縁帯を整形し、276はその下部に沈線を施す。278は口縁を直立屈曲させ口縁帯の下部に細い粘土紐を貼り付けて沈線を施したような効果をあげる。279は肩部に突帯をめぐらす。281は壺の底部で直線的な体部に底部を貼り付け、外に開く安定のよい器形である。

〔土師器〕

土師器は須恵器に比べ出土量が極端に少なく、摩滅した資料も多かったため図示できたものは少ない。

282は壺の口縁部で口縁端部の下位に沈線を施す。283は須恵器模倣の坏蓋でつまみがつくが、破損のため形状は不明である。284は坏の底部、285、286も須恵器模倣の坏で285には短い高台がつく。287・288は甕で器壁が薄く外にひろく口縁部が端部を直立させその外面下部に線をめぐらす。288は甕の口縁部で内面はケズリ、外面はナデ仕上げ。



第47図 包含層出土遺物4

第3節 中世の遺構と遺物

1. 遺構

中世期の遺構は調査区域のほぼ全域で検出したが、そのうち北側にある調査Ⅰ区および調査Ⅲ-Ⅰ区は方形区画の外にあたるため、方形区画内とは区別してそれぞれ別途記載する。調査範囲の南半部は中世の包含層であるⅢ層の堆積自体がほとんどなく、遺構の検出しかできていない。調査区南に接するⅡ調査区でも中世の遺構は検出されているため、本来は一連の遺構および包含層が存在していたと考えられる。

以下、遺構の種別ごとに述べる。

【方形区画外】

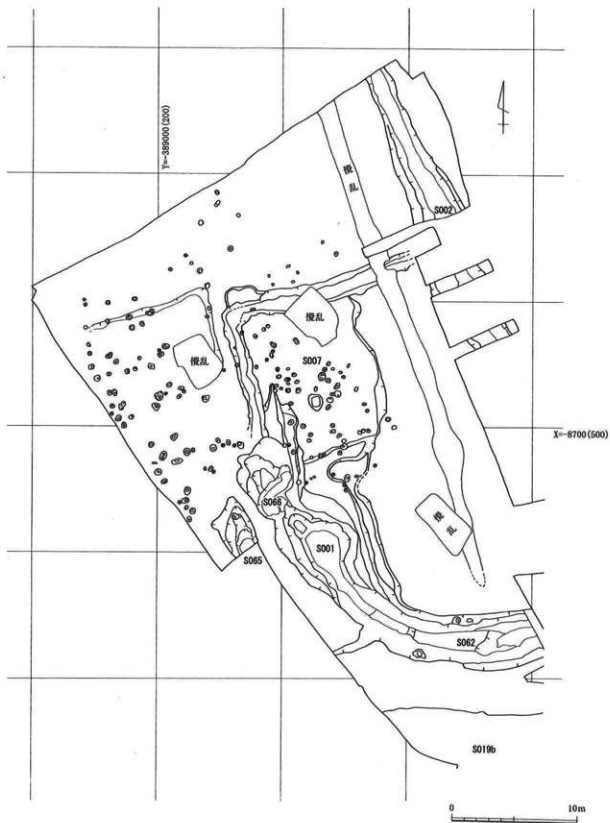
方形区画の北辺を画するS019bの北には、それとほぼ同規模の空堀状遺構と溝状遺構、ならびに小規模な方形区画が検出された。層序の項でも述べたように当調査区は包含層が概して浅く、耕作土がそのまま地山に接している部分も少なくなかった。そのため、検出した遺構も削平されて本来より浅くなっているものとみられる。特に南東部は削平によるためか谷部に近いことによるものか包含層も遺構も検出できなかった。

1) 空堀状遺構

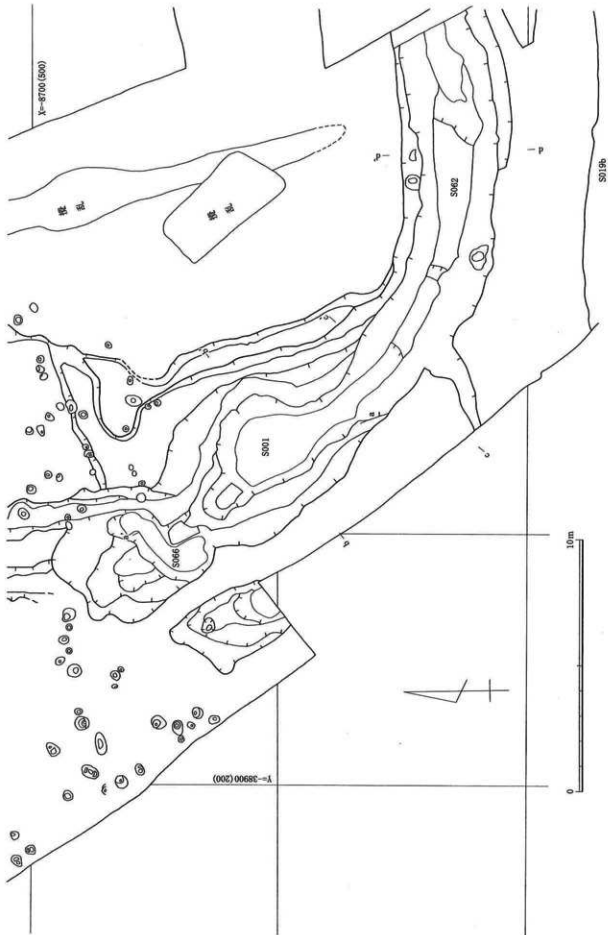
S001・S062 (第49～52・56図)

幅4.5m、深さ1.4mほどの空堀状遺構である。調査前はこの遺構の直上を里道が通っていた。東の末端部は調査区外のため未発掘であるが、東側の谷上部の斜面を削って土層を観察したところこの遺構の続きは検出できなかったため、未掘部分で西端と同様に終わっているとみられる。この空堀状遺構はS019b、すなわち方形区画と軸を一にする部分がありながら西側では北へと向かってやや幅を広めながらカーブし、さらに深度も増して最深部で2mを超える。調査区分割の都合上、S001東半分は平成13年度に調査し、その西半分とS062は平成15年度に里道付け替えを行った後に検出、発掘したため2つの遺構番号を付しているが、検出の状況及び土層堆積状況から切り合い関係は認められず、一連の遺構であると考えられる。なおカーブ部分からS001の両側はS062部分からすると0.3～0.4mほど段を成して低くなっている。

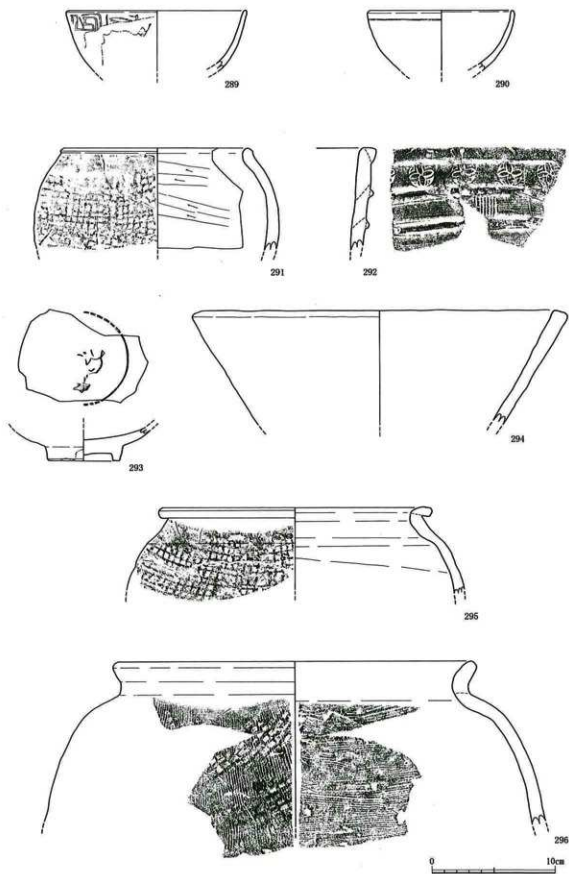
S062からS001へとカーブ地点の床面から20～30cm上にかけて火輪2基(315・316)を含む多量の凝灰岩および安山岩破片等の礫群が出土した。その礫群のなかには陶磁器片もある程度まとまって出土している。またほぼ同一レベルの層から、細骨片が出土した。なお、出土遺物のなかには303のほか後述する溝状遺構S065の出土遺物と接合するものがあり、同時期の存在および廃棄年代が推定される。



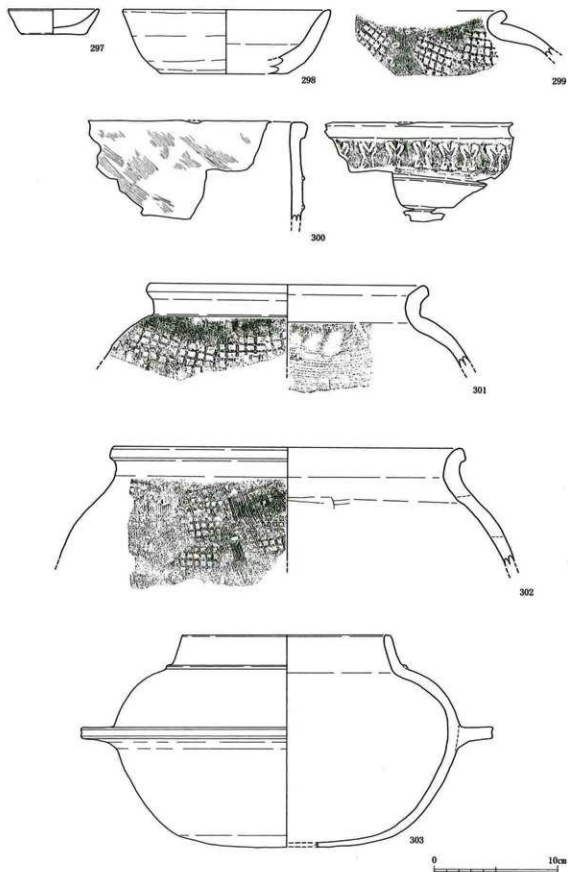
第48図 遺構配置図(中世) 1



第49図 空堀状遺構 (S001・S062)



第51図 空堀状遺構(S001)出土遺物



第52図 空堀状遺構(S062)出土遺物

ii) 溝状遺構

S065 (第53・55図)

S065は発掘した限りにおいては南北方向に長く北から南へ向けて緩やかに傾斜し、最深部1.0mを測るが、調査区外へと伸びており全容は不明である。北側は非常に浅く傾斜も緩やかであるが、徐々に深度を増し調査区範囲端では1.0m程の深さがあり、底面から20～30cmほどのレベルに水輪2基(317・318)や笠塔婆の破片(319)を含む凝灰岩および安山岩がまとまって出土した。出土土器がS001の出土土器と接合し、同時期の存在および廃棄年代が推定される。出土遺物は第55図304～307である。

S002 (第54・55図)

S002は幅4.5m～1.7m、深さ1m～0.2mの溝状遺構である。北側は調査区外(県調査区)へと続き、南に向かって徐々に落ち込む状況を示す。北側では浅くなっているが、平面的な幅や土層堆積状況等を考慮すると削平されて現在の状況を呈しているとみられる。なお、南側は調査区隣接地が急な谷傾斜部であったために全面的な発掘を行えず、トレンチ状に調査区をのばしてその延長を確認するにとどめた。

出土遺物は第55図311～314である。

iii) その他の遺構

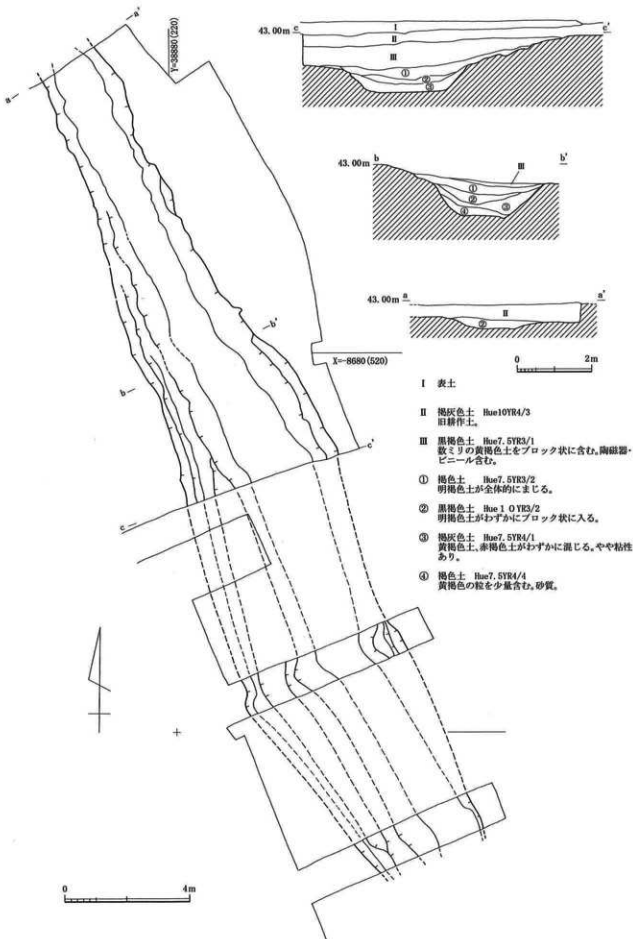
S007 (第58図)

S007は極浅い溝状遺構がL字状に回る遺構であり、その東側および南側に同じく浅い段差が存在することから小規模な方形状の区画を呈す。ただし、土層の状況から東及び南側の段差は後世の耕作等で生じたとも考えられるため、本来的に方形を意図されていたかは判然とし得なかった。なお、周辺に散在するピット群はいずれも並ばず、形状、深さ、覆土の土質など一定しなかった。明確に建物の柱穴であると認定できたものはない。

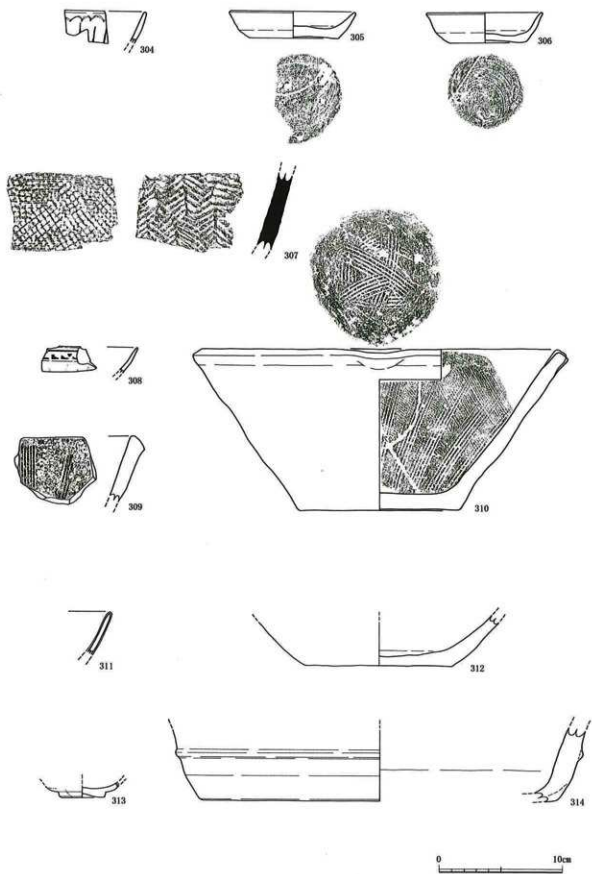
S066 (第49・55図)

S066はS001の北端に接し、S007の南端に接する浅い土坑状の遺構である。土層は①～④に分層可能でS001の上部とは覆土が異なる。不整形で周辺の遺構との関係もやや不明確であるが、便宜上独立した遺構として取り扱っている。

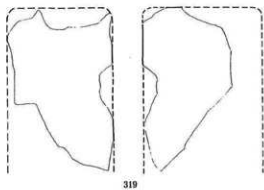
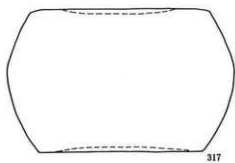
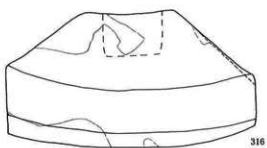
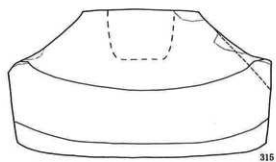
出土遺物は第55図308～310である。308は染付、309・310は播鉢である。いずれも6本単位の播目がはいる。



第54図 溝状遺構 (S002)

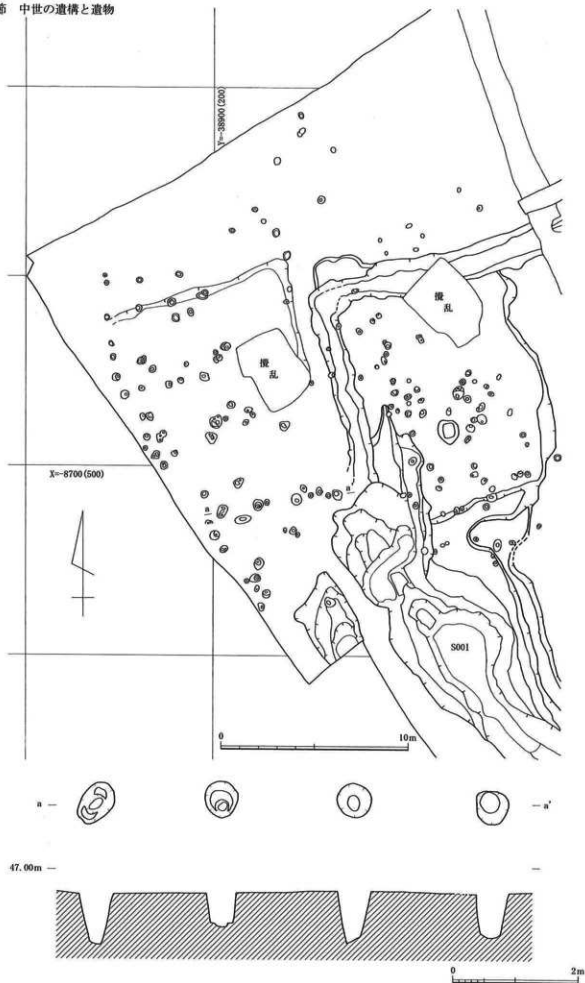


第55図 溝状遺構(S065・S066・S002)出土遺物

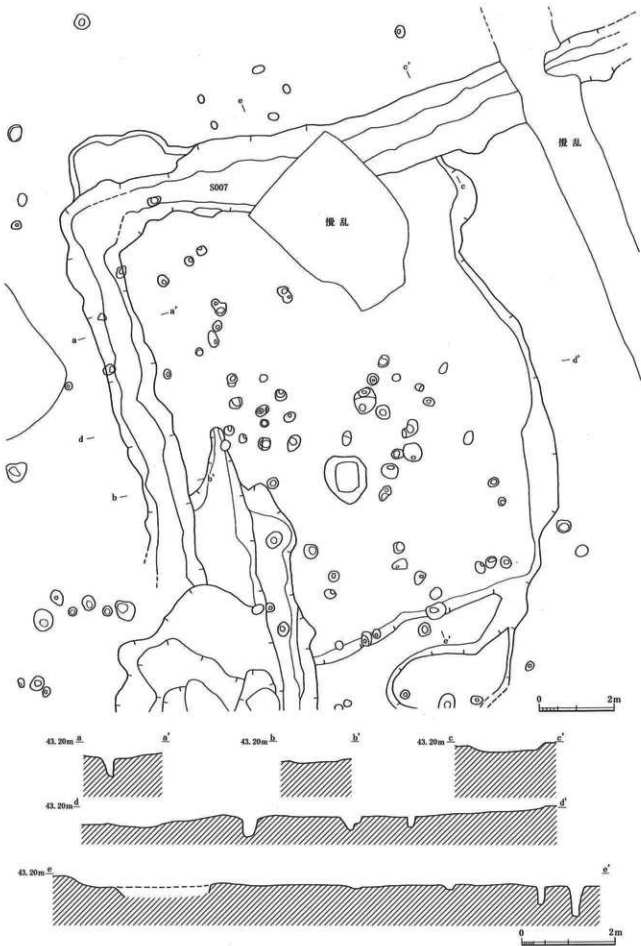


第56図 空堀状遺構(S001)-溝状遺構(S065)出土石塔

第3節 中世の遺構と遺物



第57図 調査I区ビット配置図



第58図 方形区画状遺構(S007)

iv) ビット (第57図)

調査Ⅰ区および調査Ⅲ-Ⅰ区では地山のローム層であるⅦ層に掘り込まれたビット群を検出したが、中世の文化層の堆積がほとんど無くその帰属年代の判別が難しい状況であった。また、ビットの配列およびその形状、深さ、覆土の土質等、規格性を見だし得なかったため明確に掘立柱建物址などを想定することはできなかった。

そのなかで、調査区西側のS065北側、S001の北端部から並ぶ4基のビットを確認することができた。これらのビットは直径、深さとも比較的近く、調査区の範囲が限られ全体の溝状遺構及び空堀状遺構の構成が把握できない状況では難しいが、柵列などの構造物の存在も推定される。なお、この4基のビットから遺物は出土しなかった。

【方形区画内】

周辺地形及び地割りの関係から存在が推定できる方形区画のうち、その東北角が本調査域にあたる。空堀状遺構によって囲まれた区画の内部は近世以降の溝の他、畝による攪乱など主に耕作に伴う地形改変の影響が認められ、中世期の明確な建物址など生活址の遺構、また土塁や柵列などは検出されなかった。唯一空堀状遺構と同時に近い時期に存在したと考えられる遺構は溝状遺構S010と土坑墓と考えられるS045である。

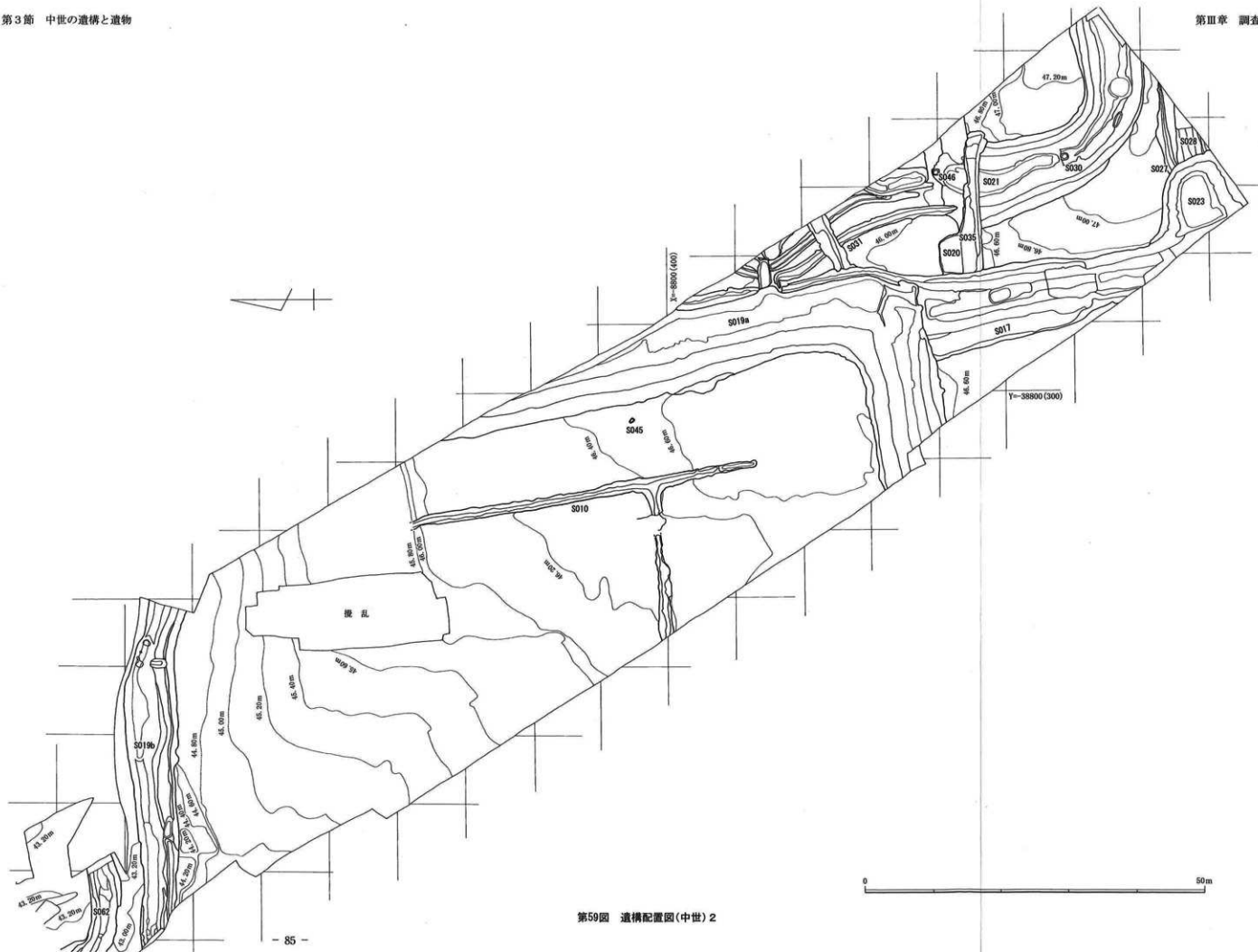
i) 空堀状遺構

S019b (第61～62図)

S019bは方形区画の北辺を画する空堀状遺構である。旧状は畑地であったため堀の肩部は畝による攪乱を受けているが、下半部は完全に埋没していたため本来の遺構形状を比較的保っていると思われる。断面逆台形を呈し、形状がほぼ一定しているのに対してその深浅は場所によって大きく異なり、特に調査城の東端部では0.7m程度と浅く、最深部1.5mに対して半分にも満たない。その部分では北側が狭い里道を挟んですぐに急傾斜の谷が迫っていることと関係するのかもしれない。なお、発掘した長さは50m程度であるが、このS019bの南側と北側では1.0～1.5mほどの地形的落差が存在し、地割り形状と併せて考えるとその延長は東側の区画コーナ一部から西側へ150m程は確実に続くことが確認できる。

なお、方形区画を形成するこの一連の堀状遺構について、その土層堆積状況からみて湛水の様子が認められないこと、また水はけの良い阿蘇火砕流堆積物の地山を掘込んで造られていることから空堀として捉えている。

出土遺物は第62図320～327で、掘削土量の割に出土量は少なく、中世期の遺物に加えて上部には近世陶磁が混じっていた。平成14年度の調査では覆土上位、中位、下位と概ね3段階で遺物取り上げを行っているが、これは深度に関する相対的な区分であり、前述のように場所



第59図 遺構配置図(中世)2

によって深淺の差があることから掘削中に上位として取り上げたものであっても結果として底面に近いレベルにあったものが含まれる。321・335が覆土下位出土、322が中位、323・324・326・327が上位出土である。

S019a(第63～66図)

S019aは方形区画の主郭東南角にあたる部分を囲む空堀状遺構である。断面は2段の逆台形を呈し底辺の幅はほぼ一定しているものの、上幅は一定しない。また、概ね西側および南側、つまり郭の内部側が緩やかな傾斜となっている。上半部の形状に関しては後世に耕作地として利用された際の変改がある可能性もあるが、その特徴がS017でも認められること、断面形状と平面形状の変化の単位が下半部と上半部で共通性が看取されることから掘削当時の旧状ある程度反映しているとみられる。出土遺物は近世陶磁器が多いが、覆土下位および底面から若干中世期の遺物を検出している。土層堆積状況からは土塁が存在した痕跡は確認し得なかった。

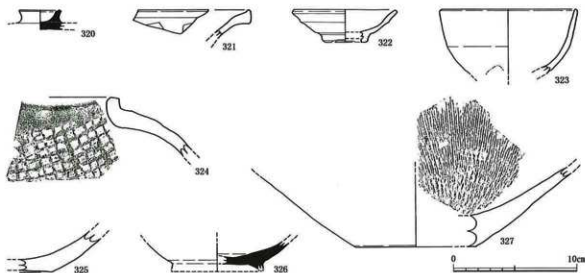
S019aのコーナー一部でS017が接続するが、その平面形状および断面形状から、S017がやや後から掘削されたとみられる。ただし埋没の状況に差異はなく廃絶時期は同時期であろう。なお、その接点は低い陸橋状に残っており、調査以前はその部分の上に里道が通っていた。床面のレベルはS019bや後述するS017に比べると比較的一定している。一部で底面付近から安山岩を主とする礫がまとまって出土している。

調査範囲内であって発掘した部分は逆L字状を呈するが、その北側の延長および、西側の延長は周囲の畑から1mほど低くなっており、地割りから容易に確認できる。なお調査区西側に隣接する畑の部分のみS019aの延長部分が窪んでいないが、これは畑を広げるために近年埋められたものである。

出土遺物は328～363である。328～341が覆土下位出土、346～348が中位出土、349～352が上位出土である。この上、中、下の区分はS019aの全体の深さからみてほぼ半分ほどにあるテラス状の平坦部より下位における区分である。354～363は土層断面d-d'の①層出土であり、テラス状の平坦部より上部からは染付など近世陶磁の出土が多い。

S017(第67～70図)

S017はS019によって囲まれた主郭の南側に連なる副郭の東を画する空堀状遺構である。南側の調査区外にもその延長線上の畑地が周辺より窪んでおり、続きを確認することができる。S019aと同様に区画の内部側が若干なだらかな傾斜を呈しており、左右非対称の断面形状を呈している。底面のレベルは最大で1.0mの差があり、S019aに接する付近が最も深く、南へ行くに従って徐々に浅くなり、直ぐにまた深くなる。こうした底面のレベルの変換点と、平面での



第62図 空堀状遺構(S019b)出土遺物

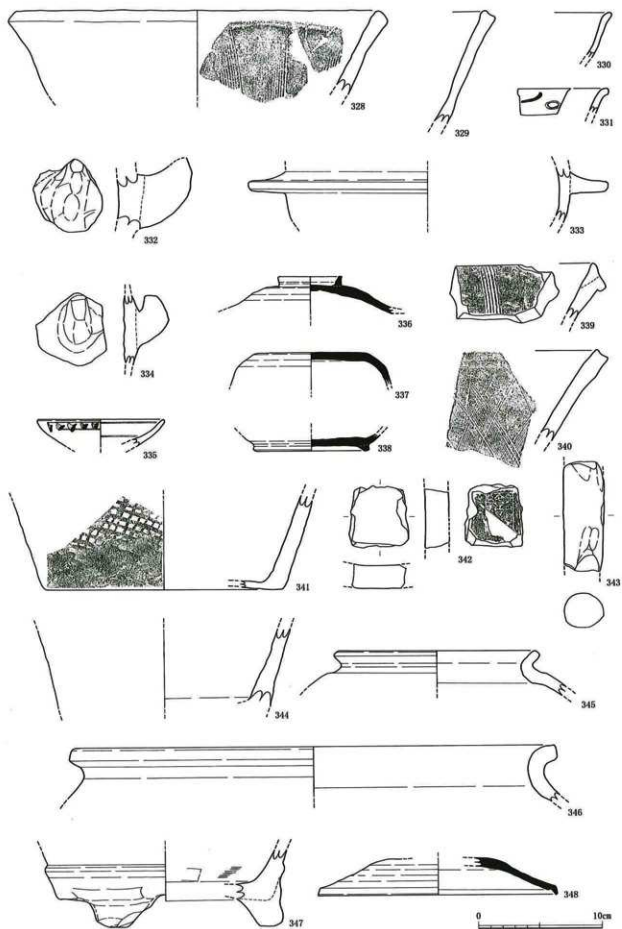
幅・形状の変化は一致しており、掘削単位を示しているとみられる。なおS023と接する部分には直径0.5mほどの安山岩が等間隔に並ぶ列石が確認された。層位的には中段のテラス部分より上位にあり近世以降の畑に関係するものの可能性が高い。

出土遺物は364～398である。364～368が覆土下位からの出土、369～398は上位からの出土である。上層からは近世陶磁の出土が多いのは他と同様である。

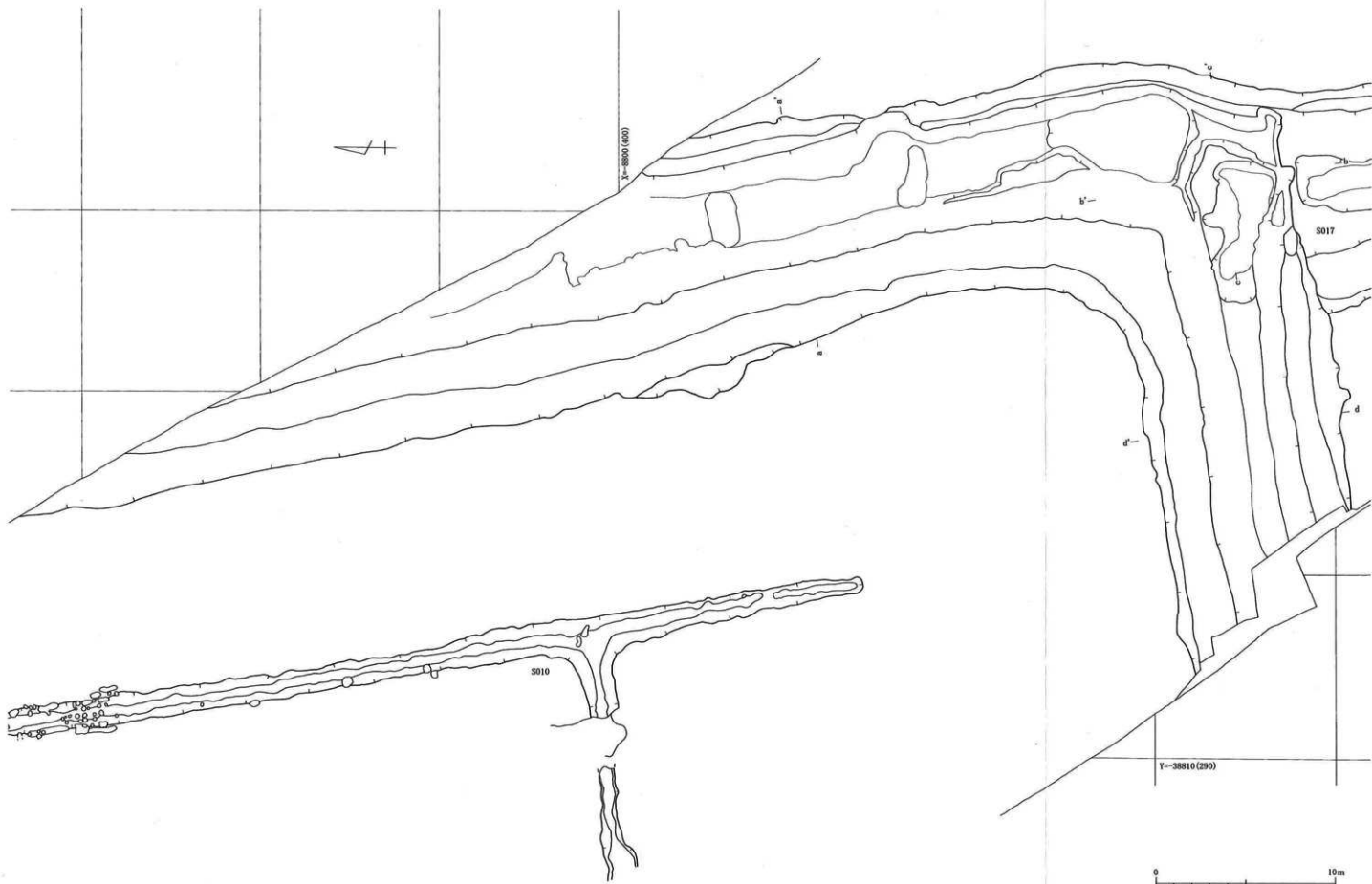
S023(第67・69図)

S023はS017に接して掘られたもので、その接する部分が調査区域の端に位置していることから全体を明らかにすることはできなかったが、調査した範囲では堀状というより巨大な土坑状を呈する。土層堆積状況を見るとS017が埋没した後にS023が掘削され、その後S023が埋没したのち、S017上部が耕作地として利用された時期にS023の上部も掘削されていることがわかる。

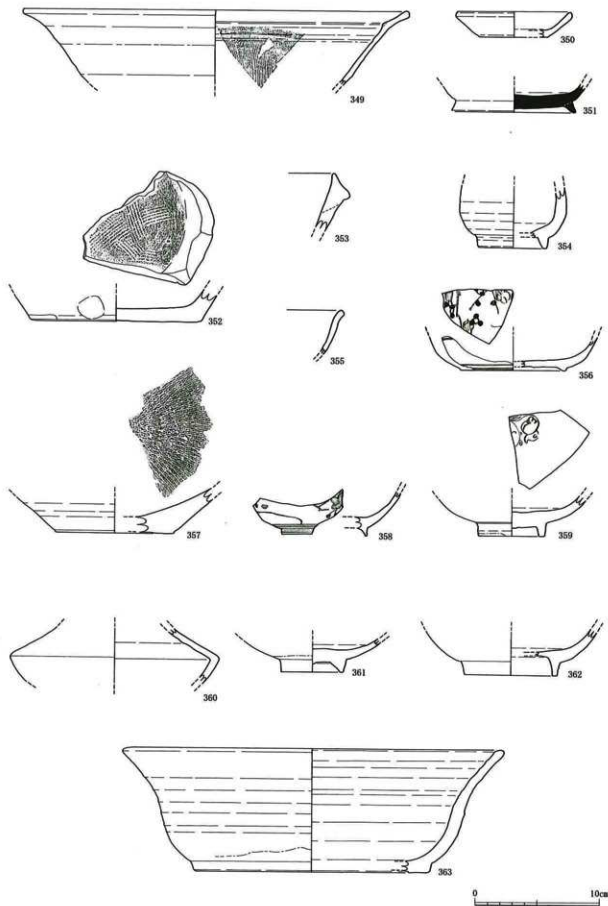
S023の覆土は多量のロームを主体とするやわらかなしまりのない土で、自然埋没とは考え難く人為的に一気に埋められた状況を呈している。遺物は全くといっていいほど出土しなかった。そのため掘削された年代および埋められた年代を知ることはできないが、その規模と断面形状の他の空堀状遺構との近似性、平面的にもS017と接する部分の形状がS017を意識しているとみられることから中世期の遺構であると判断している。ただしその性格、また掘削及び埋められた理由は、この方形区画を構成する空堀状遺構の全体の構造が把握できていない現状では不明と言わざるを得ない。



第65図 空堀状遺構(S019a)出土遺物 1



第63図 空堀状遺構(S019a)

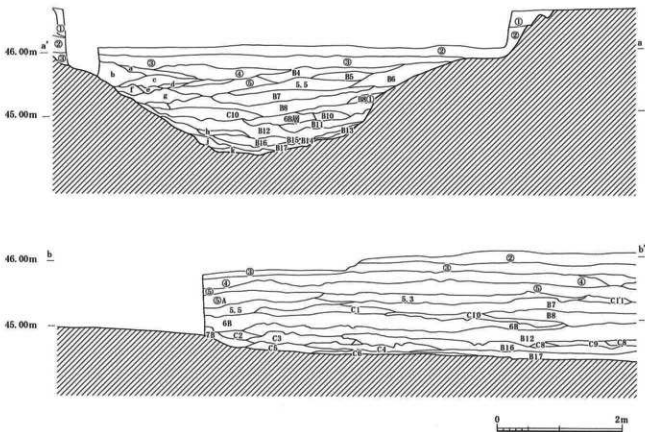


第66図 空堀状遺構(S019a)出土遺物 2



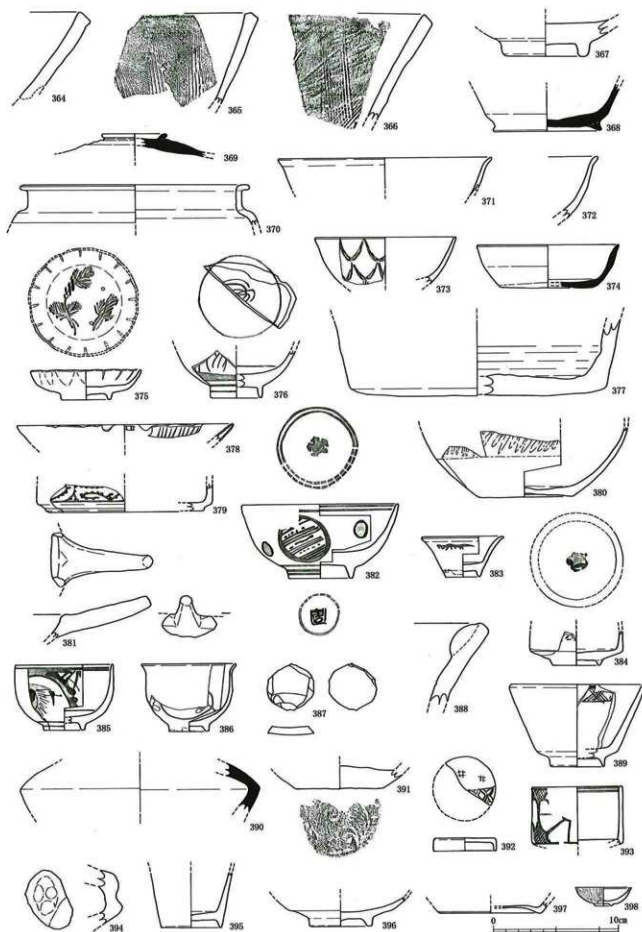
第67図 空堀状遺構 (S017・S023)

第3節 中世の遺構と遺物



- 5.3 暗褐色土(7.5YR3/4) しまりのないまとまらぬ土。粘性はない。Ⅷ～Ⅷ層起源の1cm程度のロームの塊を少量含む。
- B4 暗褐色土(7.5YR3/4) やや粘り気のある土で、全体にローム(5mm以下)、炭化物も含む。②層に類似するがロームの粒が③より大きめでやややわらかい。
- B5 褐色土(7.5YR4/4) パラパラした土で粘性はほとんどない。2～8mm程度ローム粒を全体に含む。B4層より若干固い。
- B6 暗褐色土(7.5YR3/4) 取しまりのない土で、若干粘り気がある。ロームを全体に含むが、大きなものが見られ、1cm程度のものから1cmを超えるものもある。
- B7 暗褐色土(7.5YR3/4) パラパラしたまとまらぬ土で、非常にやわらかい。全体にロームを多く含む。平均して、5mm程度のやや大きめのものが多い。
- B8 暗褐色土(7.5YR3/4) パラパラしたまとまらぬ土で、非常にやわらかい。全体に多くロームを含む。平均して1cm以下のもものが殆ど。
- B8① 暗褐色土(7.5YR3/2) 基本的にB8層と同じ。ロームの含有が多く、よりパラパラしている。腐植割合は2.0%～2.5%。
- B8② 暗褐色土(7.5YR3/2) 基本的にB8層と同じ。ロームを殆ど含まずすだけ。
- B9 褐色土(7.5YR4/4) パラパラしたまとまらぬ土で、粘性はない。ロームは微細な粒子の塊は大きな(径1～1.5cm)塊を少量含む。
- B10 褐色土(7.5YR4/4) きめ細かい土で粘性を帯びる。ローム(Ⅷ～Ⅷ層)を含むが、全体ではなく、下部に1.5cm以下のかたまりで若干含まれる。
- B11 暗褐色土(7.5YR3/2) きめ細かいやや粘性をもつ。やわらかい。全体に細かいローム粒(1mm)を含む。壁層には5mm～1cm程度の大きさのもの(Ⅷ層)も認められる。
- B12 暗褐色土(10YR2/3) きめ細かい粘質を帯びる土。Ⅷ～Ⅷ層のロームを多量に含む。隙ではなく、ブロック状(2×3か1×5cm程度の不整形)のもの(Ⅷ層)も認められる。
- B13 褐色土(7.5YR4/4) やわらかい。やや粘質の土。Ⅷ～Ⅷ層のロームを含む。空隙は細かく、腐植はブロック状(1～1.5cm)程度。
- B14 暗褐色土(10YR2/4) 粘質のきめ細かい土層。ロームはごく細かい粒子としらみ入り。目立たない。
- B15 暗褐色土(7.5YR3/2) やわらかくやや粘質。ロームの粒子を含む。
- B16 暗褐色土(7.5YR2/2) 砂粒、1～2mmのローム粒を全体に含む。ややわらかくパラパラした土。粘性はない。風化による自然崩落の塊を含む。
- B17 暗褐色土(7.5YR2/2) 粘質ややわらかい。ごく少量のローム(Ⅷ層?)を少量含むが、ほとんどないといつよい。1mm以下の砂粒を少量含む。
- C1 暗褐色土(7.5YR2/2) ごくやわらかくフワフワした土。手で崩れ取れる。ロームは5mm程度以下のものが塊状に少し含まれる。時に1cmも。
- C2 暗褐色土(7.5YR2/2) やわらかくやや粘性を帯びる。ロームを微細な粒子状にⅧ層のロームをごくわずかに含む程度。
- C3 暗褐色土(7.5YR2/4) ややしまりのもの。やわらかい。やや粘質。3～4mm程度のロームを少し含む。全体としてロームは目立たない。
- C4 暗褐色土(7.5YR2/2) ややしまりの粘質土。細かいロームは1mm以下の細かな粒子をまばらに含む程度。Ⅷ層起源と想われ、Ⅷ層と思われるものはない。
- C5 暗褐色土(7.5YR2/2) ややしまり。粘りのある土。C5よりも粘性が強い。ロームは1mm以下の微細な粒子をわずかに含む程度。ほとんどが目立たない。
- C6 暗褐色土(7.5YR3/5) 褐色土(7.5YR4/6)混入。
- C8 暗褐色土(7.5YR3/4)
- C9 暗褐色土(7.5YR2/2) 褐色土(7.5YR4/6)混入。
- C10 暗褐色土(7.5YR2/2.5) 黒く、やや粘性を帯びる。有機物か、やややわらかく指で押すと凹む。Ⅷ層のロームの粒(5mm以下)を含む。炭化物を含む。
- C11 暗褐色土(7.5YR2/2)
- B Ⅷ～Ⅷ層間のロームを含む。
- a 暗褐色土(7.5YR3/2) やわらかくやや粘性を帯びる。砂粒を含む。径5mm以下のロームの片をまばらに含む(Ⅷ層～Ⅷ層)。5%程度。
- b 暗褐色土(7.5YR3/2) ややしまり。粘性はほとんどない。全体に2～5mm程度のローム粒を多量に含む。ロームは壁層下部のもの。1.5～2.0%。
- c 暗褐色土(7.5YR3/2) やわらかく。粘性を帯びた土。砂粒をわずかに含む。8mm以下のローム片をまばらに含む。Ⅷ層由来。
- d 暗褐色土(7.5YR2/3) やわらかく。粘質を帯びる。径5mm程度のローム片を散在。微細なローム粒を含む。Ⅷ層。
- e 暗褐色土(7.5YR3/2) やわらかく。やや粘質。砂粒を含む。3mm以下のローム粒を含む。Ⅷ層由来。
- f 暗褐色土(7.5YR2/2) やわらかく。やや粘質を帯びる。砂粒を少量含む。しまりはない。1.5cm～2mm程度のローム粒を全体に含む。5%。Ⅷ層下部～Ⅷ層上部起源。
- g 暗褐色土(7.5YR2/2) やわらかく粘質。細かな砂を若干含む。ロームは2×3mm程度のロームが入る他は微細な粒子がわずかに入る程度でほとんど目立たない。
- h 暗褐色土(7.5YR2/2) ボロボロしたしまりのない土層。粘性なし。全体にロームを含む。大きなものが2×3cm程度～2×3cmのものが壁層にある。
- i 暗褐色土(7.5YR3/4) やわらかくパラパラの層である。流れ込みによるローム層の堆積土層と想われ、Ⅷ～Ⅷ層のロームを多量に含む。
- j 暗褐色土(7.5YR3/4) 壁の層にさらに再堆積土。壁と同じ色だが、細かく砕けてやわらかく、Bより粘り気と粘性が弱いと感じる。
- k 黄褐色土(8YR5/8) Ⅷ層の再堆積土。
- l 暗褐色土(7.5YR3/4) やわらかくやや粘性。細かく風化したローム粒を多量に含む。わずかにⅧ層もオレンジ色。

第68図 空堀状遺構(S017)土層断面図



第70図 空堀状遺構(S017)出土遺物

S021(第71～73図)

S021は空堀状遺構の一部と考えられるが、遺構の両端が調査区外へと伸びており全容は不明である。遺構の平面形状からいっても本来の堀形の上部はすでに削られて失われているとみられる。また調査区内で調査し得た部分も、その北側部分は近世の溝状遺構や地形改変により削平されその下部を留めるのみであった。南側もその上半部と下部で断面形状が大きく異なり、土層堆積状況及び出土遺物から上半部の傾斜がなだらかな部分は耕作による改変を受けているとみられる。本遺構周辺は現代までの耕作の影響で遺物包含層は堆積しておらず、また本遺構もその深浅に変化が大きく、最深部で1.0m、最浅部では0.2mしかない。その浅い部分2ヶ所それぞれから土坑墓(S030・S046)を検出している。S046のある浅い部分はS019aとS017の接点に存在する陸橋部の東に位置し、調査前までその直上を里道が通っており、通路部分としての機能を有していたとみられる。ただし硬化面は検出できなかった。

S046が位置する陸橋部の北側では安山岩を主とする礫が底面付近から出土した。出土遺物は399～414であり、そのうち399～406、409が覆土下位でなかでも405は最下層、408・411が中位、412～414が上位出土である。

ii) 溝状遺構

S010(第74図)

S010はS019をはじめとする空堀状遺構とその軸を同じくする、Ⅲc層を掘り込んで造られた溝状遺構である。幅は1.5mほどを測るが深さは0.1～0.3mと概して浅い。出土遺物と層位の状況からS019他の空堀状遺構と同時期の所産とみられる。本来はさらに南北に延びていたものが周辺の削平により途切れている可能性が高い。

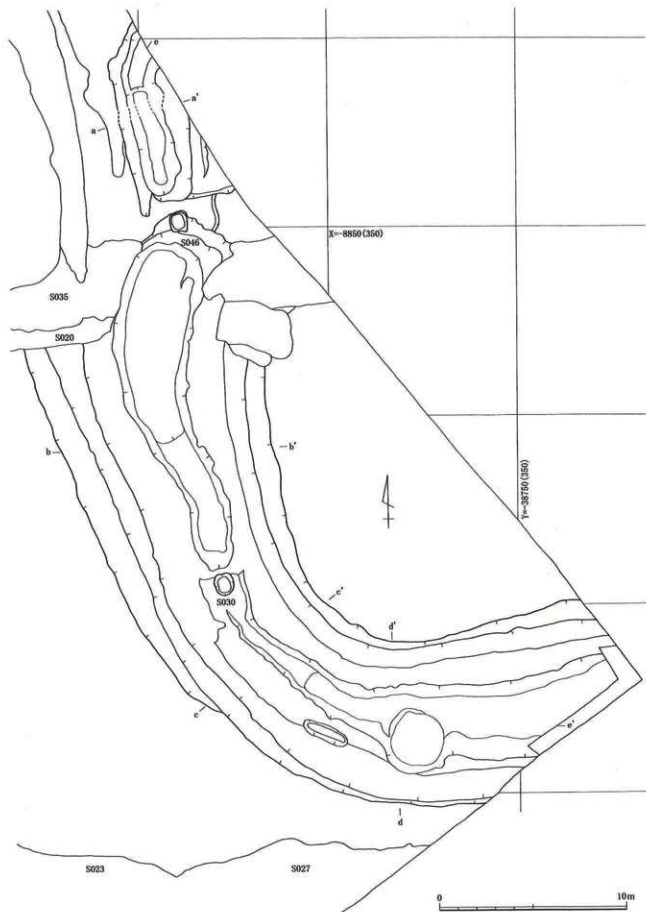
出土遺物は少なく小片が多かった。415～417で415は青磁碗の底部片、416・417は須恵器の坏で混入とみられる。

S031(第75図)

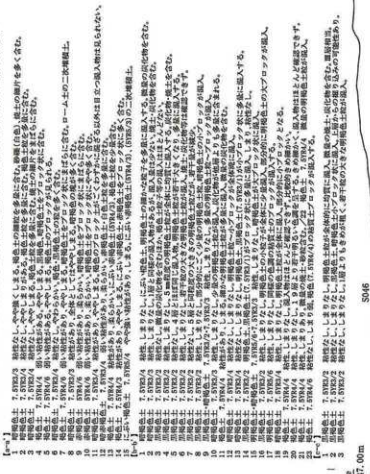
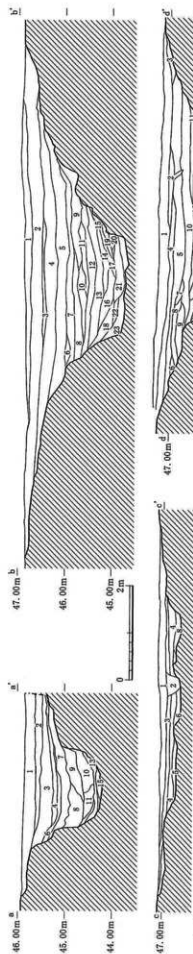
断面逆台形を呈しS034と並行する。S019aおよびS035を切る。青磁碗の破片が出土した。北側でS019aに接続する。

S032(第75図)

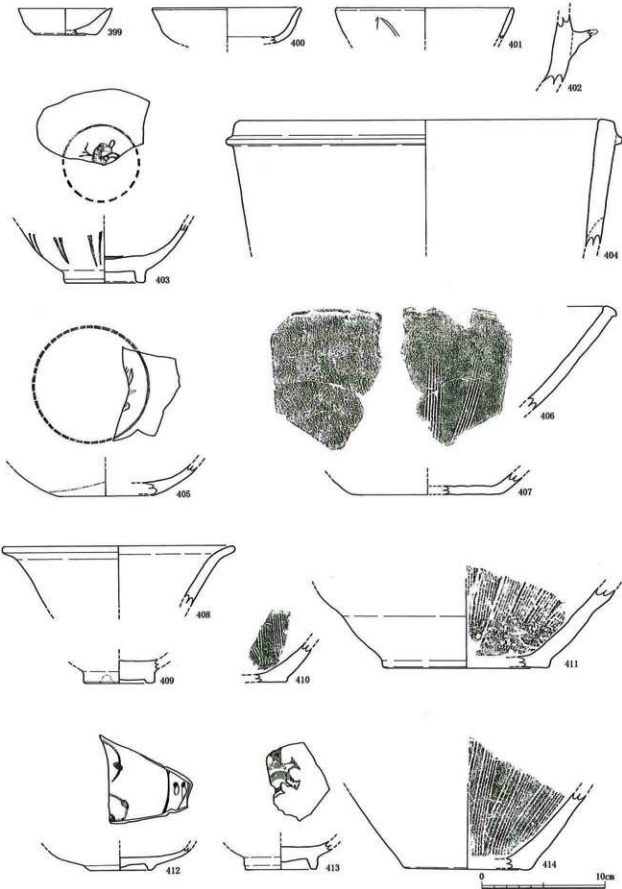
周囲の他の溝状遺構と比較して深いが、ほとんどが調査区外のため全体形状その他詳細は不明である。陶磁器、須恵器片が出土した。



第71図 空堀状遺構(S021)



第170図 空堀状遺構(S021)土層断面図



第73図 空堀状遺構(S021)出土遺物

S033(第75図)

S031に切られる浅い溝状遺構である。青磁碗の破片が出土した。北側の延長は調査区域外へと続いている。

S034(第75図)

S031に沿うように並行する溝状遺構で、S021に切られる。出土遺物は少なく土器小片のみであった。

S035(第75図)

東西に走る溝状遺構。S020に切られS019aに接続する。S021を切る。覆土からは瓦器片のほか染付が出土しており近世に属する可能性がある。

S026(第76図)

S027、S028と並行しS023と接する溝状遺構である。S023を切る。出土遺物は中世の土器小片のみである。東側に延びるとみられるが、調査区域外へ続くために詳細は不明。現状では東側に向かって徐々に浅くなるものの、周辺の旧地形は東から西への傾斜地であるため、現代の耕作により東側の上部は削平されて失われている可能性が高い。

S027(第76図)

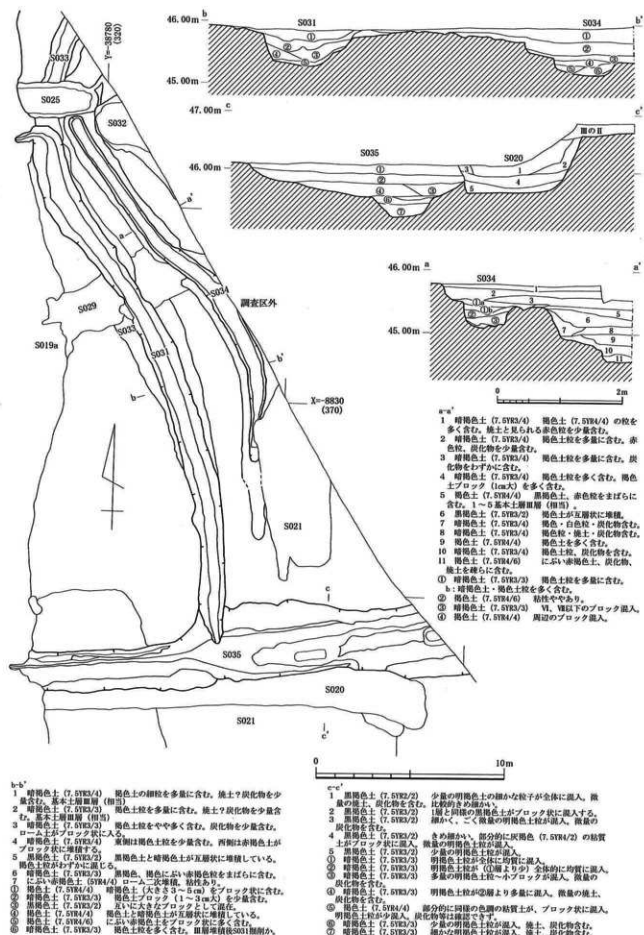
S026、S028と並行しS023と接する溝状遺構。S023を切る。出土遺物は中世の土器小片のみである。現状では東側に向かって徐々に浅くなり幅も狭くなるものの、周辺の旧地形は東から西への傾斜地であるため、現代の耕作により東側の上部は削平されて失われている可能性が高い。

配管による攪乱を上部に受けている。

S028(第76図)

S026、S027と並行しS023と接する溝状遺構である。S023を切る。現状では東側に向かって徐々に浅くなるものの、周辺の旧地形は東から西への傾斜地であるため、現代の耕作により東側の上部は削平されて失われている可能性が高い。418と419が出土した。

配管による攪乱を上部に受けている。

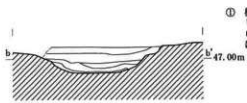
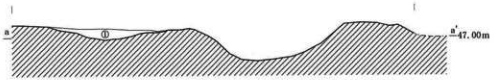
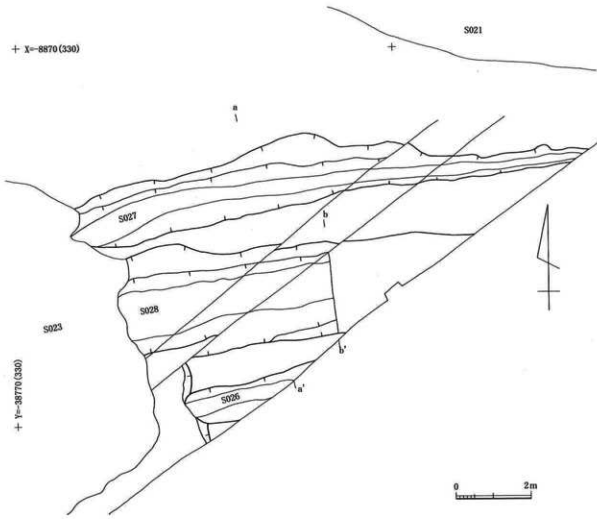


第75図 溝状遺構 (S031・S032・S033・S034・S035)

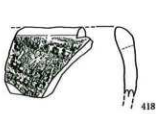
- b-b'
- 1 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土の細粒を多量に含む。焼土?炭化物を少量含む。基本土層相層 (即写)
 - 2 暗褐色土 (7.5YR2/3) 褐色土粒を多量に含む。焼土?炭化物を少量含む。基本土層相層 (即写)
 - 3 暗褐色土 (7.5YR3/2) 褐色土粒をやや多く含む。炭化物を少量含む。ローム土がブロック状に入る。
 - 4 暗褐色土 (7.5YR3/4) 裏側に褐色土粒を多量含む。西側は赤褐色土がブロック状に堆積する。
 - 5 暗褐色土 (7.5YR2/3) 裏側に褐色土と暗褐色土が互層状に堆積している。褐色土粒がわずかに混じる。
 - 6 暗褐色土 (7.5YR3/3) 暗褐色土、褐色土に赤褐色土をまばらに含む。
 - 7 赤い赤褐色土 (5YR4/4) ローム二次堆積。粘化あり。
 - ① 暗褐色土 (7.5YR4/4) 暗褐色土 (大きき3~6cm) をブロック状に含む。
 - ② 暗褐色土 (7.5YR3/2) 褐色土ブロック (1~3cm大) を少量含む。
 - ③ 暗褐色土 (7.5YR2/2) 赤い赤褐色土をブロック状として混在。
 - ④ 暗褐色土 (7.5YR4/4) 褐色土と暗褐色土が互層状に堆積している。
 - ⑤ 暗褐色土 (7.5YR3/2) 赤い赤褐色土をブロック状に多く含む。
 - ⑥ 暗褐色土 (7.5YR2/2) 褐色土粒を多く含む。裏側堆積(S031)相層が。

- c-c'
- 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) 少量の明褐色土の細かな粒子が全体に混入。微比較的粘り強い。
 - 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) 上面と同様の黒褐色土がブロック状に混入する。
 - 3 黒褐色土 (7.5YR2/2) 細かく、ごく微量の明褐色土粒が混入。微量の炭化物を含む。
 - 4 暗褐色土 (7.5YR2/2) きめ細かい。部分的に反褐色土 (7.5YR4/2) の粘質土がブロック状に混入。
 - 5 暗褐色土 (7.5YR2/2) 微量の明褐色土粒が混入。
 - 6 暗褐色土 (7.5YR2/2) 少量の明褐色土粒が混入。
 - ① 暗褐色土 (7.5YR2/3) 明褐色土粒が全体に均等に混入。
 - ② 暗褐色土 (7.5YR2/3) 明褐色土が (2層トリス) 全体的に均等に混入。微量の多量の明褐色土粒+小ブロックが混入。
 - ③ 暗褐色土 (7.5YR2/3) 炭化物を含む。
 - ④ 暗褐色土 (7.5YR2/3) 明褐色土粒が②より多量に混入。微量の焼土、炭化物を含む。
 - ⑤ 褐色土 (7.5YR4/4) 部分的に同様の色調の粘質土が、ブロック状に混入。明褐色土粒が少量混入。炭化物等は確認できず。
 - ⑥ 暗褐色土 (7.5YR2/2) 少量の明褐色土粒が混入。焼土、炭化物を含む。
 - ⑦ 暗褐色土 (7.5YR2/2) 細かな明褐色土粒が混入。焼土、炭化物を含む。

- a-a'
- 1 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土 (7.5YR4/4) の粒を多く含む。焼土と見られる赤色粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土粒を多量に含む。赤色粒、炭化物を少量含む。
 - 3 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土粒を多量に含む。炭化物をわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土粒を多く含む。褐色土ブロック (max) を多く含む。
 - 5 褐色土 (7.5YR4/4) 黒褐色土。赤色粒をまばらに含む。1~5 基本土層相層 (即写)
 - 6 黒褐色土 (7.5YR2/2) 褐色土互層状に堆積。
 - 7 暗褐色土 (7.5YR2/4) 褐色土、白色粒・炭化物を含む。
 - 8 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土・焼土・炭化物を含む。
 - 9 褐色土 (7.5YR4/4) 褐色土を多く含む。
 - 10 暗褐色土 (7.5YR3/4) 褐色土粒、炭化物を含む。
 - 11 褐色土 (7.5YR4/6) 細かい赤褐色土、炭化物、焼土を稀らに含む。
 - ① 暗褐色土 (7.5YR3/3) 褐色土粒を多量に含む。
 - ② 暗褐色土 (7.5YR3/3) 褐色土と褐色土粒を多く含む。
 - ③ 褐色土 (7.5YR4/6) 粘化やみあり。
 - ④ 暗褐色土 (7.5YR3/3) VI, VII以下のブロック混入。
 - ⑤ 褐色土 (7.5YR4/4) 周辺のブロック混入。



① 極暗褐色土 (Ils#7, STR 2/3)
 しまりなく、粘性弱い。ロームの細粒
 (2~3mm)、黒褐色粒 (2~3mm) を多量
 に含む。



第76図 溝状遺構(S026・S027・S028)

iii) 墓

S046 (第77・79図)

S046は長径2.0m、短径1.7m、深さ1.0mの土坑墓である。S021のうち陸橋状に浅くなった部分に存在するが、完全な平坦部ではなく南側に落ち込む緩やかな傾斜面にあたる。

覆土上部に大小の安山岩および凝灰岩の礫群が存在し、検出当初はS021に付随する単なる落ち込みあるいは土坑との認識で掘削が進められたが、白色の粉状となった人骨の一部と完形の土師皿が出土したことで土坑墓と確認した。そのため土層堆積状況の検討は不十分であり木棺痕跡等は確認できなかった。人骨は頭部を北にし西面する横臥屈葬で、人骨自体は腐食が進みほぼ粉状となっていた。そのため、計測にたえうる部位は残っておらず取り上げることはできなかった。上部の礫は北側にまとまり、概ねレベルもそろっているがやや北側から南に向けて傾斜している。

副葬品として人骨頭部の両脇に2つに割られた土師皿の破片がそれぞれ置かれ、さらに人骨の足もとに1点、背中側に1点置かれていた。420が足もと、421が背中側、422が頭部付近に置かれていたものである。422はほぼ中央から半截されている。頭部正面側の破片がやや大きく、後頭部側がやや小さい。どちらも割れ口を東側に向け底面を下にしたほぼ正位置の状態であったが、床面からはやや浮いた状態で出土している。

S030 (第78・79図)

S030は長径1.1m、短径1.0m、深さ0.5mの土坑墓である。S046と同じくS021の屈曲部にあたる浅くなった部分の北端に存在する。この遺構もS046と同様検出当初は墓と認識しておらず、土層堆積状況等から木棺痕跡を確認することはできなかった。

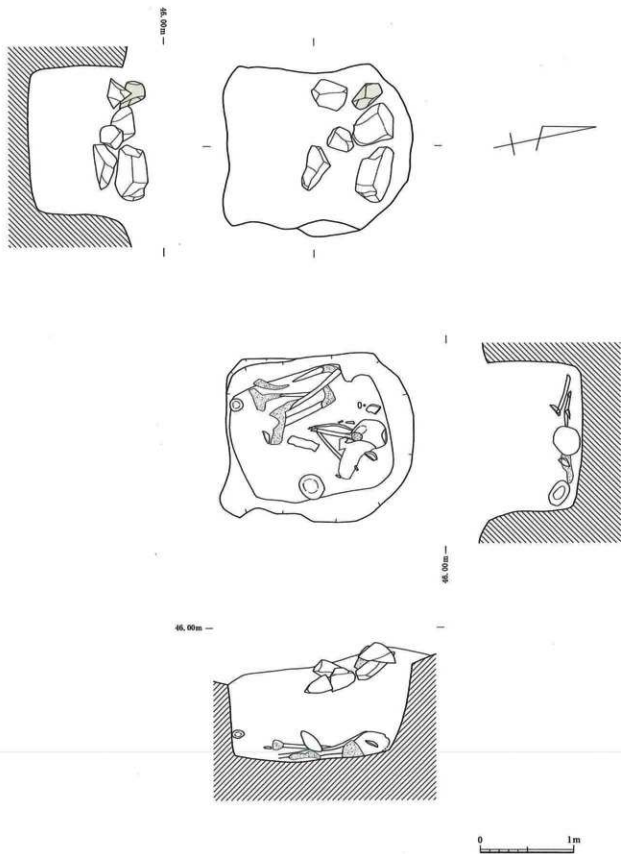
人骨は検出できなかったが歯片が1点出土している。副葬品として底面西側端に土師器1点が置かれていた。出土遺物は423である。

S045 (第78図・79図)

S045は長径1.6m、短径0.9m、深さ0.1mの土坑墓である。S046・S030と異なり長方形に近い平面形である。S019に囲まれた区画の内部にあり、S019aの南北方向に伸びる部分の西脇に位置している。

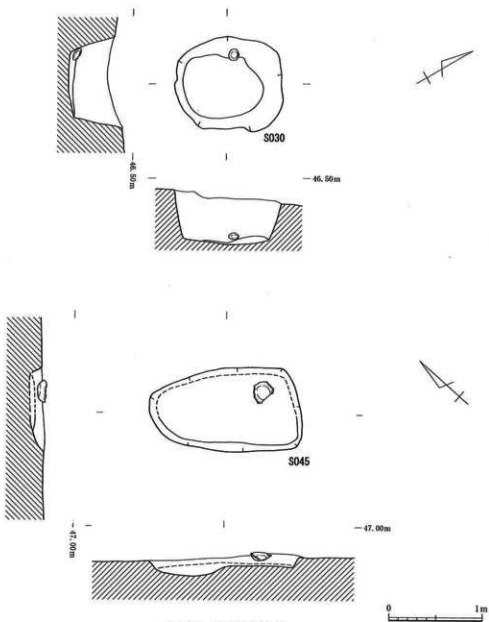
現状ではごく浅いが、本遺構周辺は古代の包含層であるIV層の直上に耕作土層が堆積しており、出土した土師器の上端が欠損していたことから大きく削平を受けているものと考えられる。

人骨は検出できなかったが、平面プラン及び完形の土師器が床面付近から出土したことから墓であると判断した。出土遺物は424である。

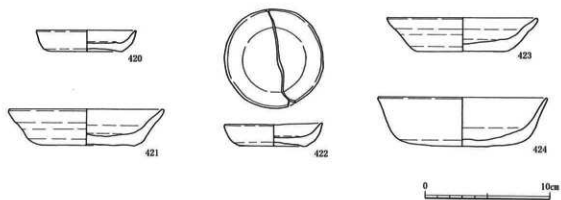


第77図 墓(S046)

第3節 中世の遺構と遺物



第78図 墓(S030・S045)



第79図 墓(S046・S030・S045)出土遺物

2. 遺物とその分布

中世の遺物は近世遺物と共に調査区域のほぼ全面から出土しているが、遺構外からの出土はおしなべて少量であり5×5mの区画につき平均すると10点にも満たない。しかもこれらは表土剥ぎの対象としたⅠ・Ⅱ層から出土したものがほとんどであり、Ⅲ層の堆積が非常に不安定なものであることもあってⅢ層からの出土数は総計でも60点ほどしかない。

そのなかでS017とS021との間に位置するX=355~360、Y=315~330間では1区画あたり40~60点と比較的多い出土数が認められる。これは、この部分に調査区域を東西に跨ぐ里道が調査前まで存在したことに起因するとみられる。つまり、この部分はある程度の期間、道として利用されていたことから他地区とは違い近現代の耕作による削平および改変を受けなかったためだと考えられる。その他、調査Ⅱ区の北端X=470~475、Y=225~260間では1区画あたり30~40点出土しておりある程度のまとまりが認められる。この地区はⅡ区とⅣ区との境にあたりⅡ区の中でもともと標高の低い部分であることから、包含層の削平度合いが比較的少なかったこと、また耕作地造成の際に押された土が厚く堆積していることによるものと考えられる。

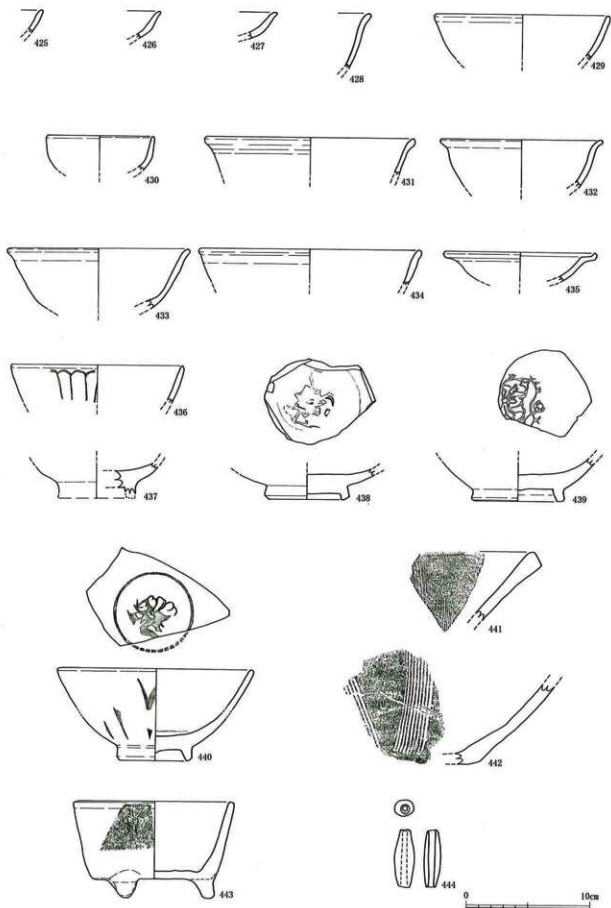
前節で報告した通り、本遺跡の中世に属する遺構の中で明確な生活遺構は検出することができなかった。方形区画全体の中から見れば今回の調査区域は東北の一角にすぎないから、もともと存在していなかった可能性もあるが、本来存在した遺構が後世の土地利用の過程において削平され消滅している可能性もある。そこで器種ごとの遺物分布の様相からその存在の痕跡を見いだせないか数量的分析をふまえて検討したが、出土量の僅少さもあって前述のように有為の結果は見いだせなかった。同様に各空堀状遺構内部における遺物分布を検討したが、同様の結果に終わった。

〔遺構外出土の遺物〕

遺構外からの遺物出土は上述の通り多くはないが、ここでは青磁を中心として中世の遺構外等から出土した遺物を図示した。

425~440は青磁である。427は口縁部片であるが碗にしては浅い器形で小碗、坏等の可能性がある。432は口縁を外に短く折り曲げているが、その稜線は明瞭でない。435は皿状で口縁の屈曲部付近は軸が厚くなっている。436は細蓮弁紋を施される。弁と弁先はきっちりとそのっている。438は見込みに印花紋を施す。439は碗底部で高台内付近はヘラによる調整が施されている。

441・442は播鉢である。どちらも破片のため全体は不明だが放射状の筋目のはいるものとみられる。442は9条の筋目。443は瓦質の火鉢で、口縁部付近に菊花紋のスタンプがある。444は管状土錘で一方がもう一方よりやや尖り気味で、中央部に最大幅を有し直径0.4~0.5cmの孔が通る。



第80圖 包含層出土遺物

第4節 その他の時代の遺物

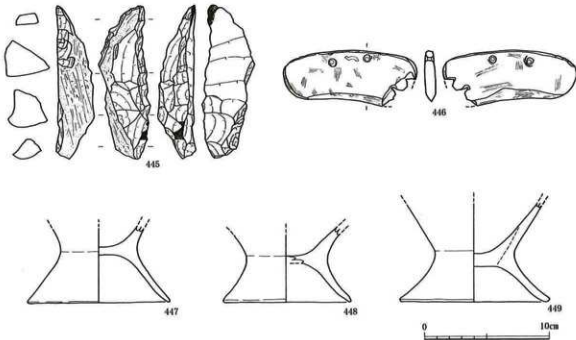
1. 遺物

吉丸前遺跡からは縄文時代、古代、中世の遺構及び遺物が出土しているが、近世を除けばそのほかの時代の遺構は検出されなかった。ただし断片的にはあるが、耕作層を中心に旧石器、弥生時代の遺物が出土している。弥生土器の破片が多いが小破片が多く図示できるものは少なかった。

445は三稜尖頭器である。中世の空堀状遺構S019aの上層から出土した。刃部先端を一部欠損している。出土地点は調査区域東端にあたり、その他に調査区域内からの旧石器出土は確認できなかったので周辺からの流れ込みの可能性が高い。

446は石包丁である。耕作層であるII層から出土した。刃部は内湾し両刃様に内面とも研磨し、上端近くに2孔を有する。一端は欠損する。447～448は弥生土器の脚付甕の底部である。いずれもI層からの出土であり周辺からの混入と考えられる。ハケメの後ナデ調整が施されるが表面が摩滅しており不明瞭である。

その他に、図示していないものの1877年（明治10年）の西南戦争における小銃弾が2点出土している。吉丸前遺跡周辺の寺田台地上において政府軍と熊本隊との戦闘が行われており、その際のものであろう。



第81図 その他の時代の遺物



第1表 縄文時代出土土器観察表

神田番号	品名	器種	出土位置	層位	重量(g)	色	土質	形状	表面	内面	胎土・轆轤
11	1周文土器 鉢	300×275	S047	礎土	45.3	明黄褐色	明黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色磁物、黒雲母を多く含む。
11	2周文土器 深鉢	430×275	S047	礎土	30.3	明赤褐色	明赤褐色	条痕ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色磁物、黒雲母を多く含む。
15	11周文土器 深鉢	390×270	SK	礎土		反黄褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色磁物を含む。
15	12周文土器 深鉢	390×270	SK	礎土		黒	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の石灰、白色の砂粒を全体に多量に含む。
15	13周文土器 深鉢	390×270	SK	礎土		暗オリーブ褐	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の石灰、白色の砂粒を全体に多量に含む。
15	14周文土器 深鉢	390×270	SK	礎土		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の砂粒を含む。
15	15周文土器 深鉢	390×270	SK	礎土	37	明黄褐色	明黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	0.5mm以下の黒雲母を全体に含む。
16	16周文土器 深鉢	410×285	P2556	礎土	47	明黄褐色	明黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	黒雲母白色磁物を少量含む、丁寧なナブ調整。
16	17周文土器 深鉢	410×285	P2556	礎土		黒	明黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の砂粒を含む。
16	18周文土器 深鉢	410×285	P2556	礎土	8	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	20周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土(下)		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	21周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土	31	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	22周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	23周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土	30.6	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	4cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	24周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土(下)		黄灰	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	25周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土(下)	29.6	反黄褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	26周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土(上)	9.7	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	27周文土器 深鉢	430×290	S058	礎土(中)	12.3	明黄褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の白色、赤色、黒色の磁物を全体に多く含む。
18	28周文土器 深鉢	430×285	S058	礎土	31	黄	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	0.5mm以下の黒雲母を全体に多く含む。
18	29周文土器 鉢	430×290	S058	礎土	38	反黄褐色	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物を多く含む。
19	30周文土器 深鉢	460×265	S054	礎土	9	黄	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物を多く含む。
19	31周文土器 深鉢	460×265	S054	礎土		黄	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物を多く含む。
19	32周文土器 深鉢	445×240	S061	礎土	28.3	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の石灰、白色の磁物を全体に含む。
20	33周文土器 深鉢	510×210	S070	礎土	51.6	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の砂粒を全体に多く含む。
22	34周文土器 深鉢	405×260	-	Ⅲb		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の砂粒をわずかに含む。
22	35周文土器 深鉢	435×285	-	V上		黄	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物を多く含む。
22	36周文土器 鉢	430×290	-	IV		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物をわずかに含む。
22	37周文土器 鉢	430×290	-	V		黒	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の石灰、砂粒をやや多く含む。
22	38周文土器 鉢	435×260	-	V上		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	微細な白色磁物をわずかに含む。
22	39周文土器 深鉢	400×265	-	IV下		黄	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	0.5mm以下の石灰、黒色砂粒を全体に含む。
22	40周文土器 深鉢	405×270	-	IV下		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の砂粒を全体に含む。
22	41周文土器 深鉢	455×240	-	IV		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	3cm以下の砂粒をやや多く含む。
22	42周文土器 深鉢	430×275	-	V	32.3	明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	3cm以下の砂粒を含む。
22	44周文土器 深鉢	495×245	-	V	48.6	反黄褐色	反黄褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の石灰、黒雲母など砂粒を含む。
22	45周文土器 深鉢	405×265	-	V上		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	2cm以下の白色、黒色、黄褐色の砂粒を含む。
22	46周文土器 深鉢	410×280	-	V		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の微細な砂粒を全体に含む。
22	47周文土器 深鉢	415×290	-	IV		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の微細な砂粒を全体に含む。
22	48周文土器 深鉢	465×245	-	IV		反黄褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の微細な砂粒を全体に含む。
22	49周文土器 深鉢	400×290	-	IV		反黄褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	3cm以下の白色、1cm以下の黒色磁物等砂粒を多く含む。
22	50周文土器 深鉢	460×260	-	V上		明赤褐色	明赤褐色	ナブ	ナブ	ナブ	1cm以下の砂粒を含む。

遺物観察表

採掘番号 段 遺物 種類	出土位置 グリッド	遺積	層位	法基 (cm)		色調		磨損程度		内層	外層	断面	粘土/層割
				口徑	底径	内層	外層	内層	外層				
22 51 周文土器	深鉢	—	V下	448×276	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	2cm以下の砂粒を全体を含む。
23 52 周文土器	深鉢	—	V上	410×295	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ミガキ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 53 周文土器	深鉢	—	V	408×285	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 54 周文土器	深鉢	—	V上	395×285	37	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	1cm以下の砂粒を含む。
23 55 周文土器	深鉢	—	IV下	400×275	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 56 周文土器	鉢	—	V上	405×285	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 57 周文土器	鉢	—	V上	415×285	34.6	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 58 周文土器	深鉢	—	V下	430×270	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 59 周文土器	深鉢	—	V上	395×290	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 60 周文土器	深鉢	—	V上	395×285	29.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 61 周文土器	鉢	—	V上	440×260	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 62 周文土器	鉢	—	II	460×260	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 63 周文土器	深鉢	—	V上	450×270	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 64 周文土器	深鉢	—	V上	460×260	36	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 65 周文土器	鉢	—	V上	460×260	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 66 周文土器	鉢	—	V上	395×290	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 67 周文土器	鉢	—	V上	460×265	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 68 周文土器	鉢	—	V上	395×265	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 69 周文土器	鉢	—	V上	400×265	14.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 70 周文土器	鉢	—	V上	400×290	30.6	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
23 71 周文土器	鉢	—	V	460×240	—	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 72 周文土器	深鉢	—	V下	430×275	9.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 73 周文土器	深鉢	—	V上	430×275	10.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 74 周文土器	深鉢	—	V上	415×275	9	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 75 周文土器	深鉢	—	V上	390×280	6.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 76 周文土器	深鉢	—	V	455×275	9.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 77 周文土器	深鉢	—	V	460×235	6	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 78 周文土器	深鉢	—	V上	390×280	6.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 79 周文土器	深鉢	—	V上	415×295	5.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 80 周文土器	深鉢	—	V上	440×245	8.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 81 周文土器	深鉢	—	V	430×260	11.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 82 周文土器	深鉢	—	IV上	400×260	14.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 83 周文土器	深鉢	—	V上	455×275	10.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 84 周文土器	深鉢	—	V上	410×285	11	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 85 周文土器	深鉢	—	V上	405×290	9.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 86 周文土器	深鉢	—	V上	405×290	9.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 87 周文土器	深鉢	—	V上	400×280	11	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 88 周文土器	深鉢	—	V上	405×270	11	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 89 周文土器	深鉢	—	V	435×265	15.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 90 周文土器	深鉢	—	V上	465×265	11.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 91 周文土器	深鉢	—	V下	400×260	11.7	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。
24 92 周文土器	深鉢	—	V上	405×285	15.3	内層 黄灰 外層 黄灰	黄灰	ナギ	ナギ	黄灰	ナギ	ナギ	0.5mm以下の微細な砂粒をわずかに含む。

探窟番号	原遺物	類別	製法	出土位置	遺構	層位	法長(cm)		色調		表面調整		磨土/磨骨
							口徑	底径	高さ	外側	内側	外側	
24	93 陶文土器	深鉢	深鉢	470×245	—	Ⅱ a	8.7	—	—	—	ナデ	ナデ	2mm以下の砂粒を全体に含む。
24	94 陶文土器	深鉢	深鉢	450×245	—	Ⅱ	9.3	明赤褐色	—	—	ナデ	ナデ	2mm以下の砂粒を全体に含む。
24	95 陶文土器	深鉢	深鉢	435×260	—	V上	10.7	—	—	条痕帯ナデ	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒を全体に含む。
24	96 陶文土器	深鉢	深鉢	450×285	—	Ⅲ	11.7	—	—	灰	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒を含む。
24	97 陶文土器	深鉢	深鉢	460×250	—	Ⅲ	9.3	—	—	—	ナデ	ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。
24	98 陶文土器	深鉢	深鉢	450×250	—	—	9.7	灰赤褐色	—	—	ナデ	ナデ	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む。
24	99 陶文土器	深鉢	深鉢	445×235	—	V上	9.7	—	—	—	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒を全体に含む。
24	100 陶文土器	深鉢	深鉢	425×260	—	V下	10.3	—	—	—	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒を全体に含む。

第2表 縄文時代出土石器観察表

探窟番号	原遺物	類別	製法	出土位置	遺構	層位	法長(cm)		磨	原長	原径	重量	材質
							長さ	幅					
11	3 石器	磨製石斧	磨製石斧	430×275	S047	—	9.8	4.7	1.7	100.7	—	—	—
11	4 石器	磨石	磨石	430×275	S047	—	14.1	5.6	4.2	481	—	—	—
11	5 石器	磨石	磨石	430×275	S047	—	17.1	7.5	5.3	818	—	—	—
11	6 石器	磨石	磨石	430×275	S047	—	6.6	11.8	7.2	694	—	—	—
11	7 石器	磨石	磨石	430×275	S047	—	6.3	8.4	8.6	301	—	—	—
12	8 石器	磨石	磨石	430×275	S047	—	12.2	11.2	6.2	1,140	—	—	—
12	9 石器	磨片	磨片	430×275	S047	—	4.1	3.3	2	22	—	—	—
12	10 石器	磨片	磨片	430×275	S047	—	5.7	6	1.6	37	—	—	—
16	19 石器	磨製石斧	磨製石斧	410×285	P2556	—	12.1	5.3	3.6	322	—	—	—
25	101 石器	石鏃	石鏃	430×275	—	V	2.8	2.2	0.5	3	—	—	—
25	102 石器	石鏃	石鏃	435×255	—	V	2.3	1.9	0.4	1.2	—	—	—
25	103 石器	石鏃	石鏃	—	—	—	2.1	1.6	0.4	1.2	—	—	—
25	104 石器	石鏃	石鏃	420×285	—	V上	2.3	1.5	0.3	1.1	—	—	—
25	105 石器	石鏃	石鏃	455×260	—	V上	1.8	1.5	0.4	0.9	—	—	—
25	106 石器	石鏃	石鏃	400×260	—	V下	1.8	1.7	0.4	0.8	—	—	—
25	107 石器	石鏃	石鏃	445×355	—	—	2.2	1.4	0.3	0.8	—	—	—
25	108 石器	石鏃	石鏃	385×270	—	—	1.7	1.3	0.2	0.7	—	—	—
25	109 石器	石鏃	石鏃	425×250	—	Ⅱ	1.3	1.2	0.3	0.9	—	—	—
25	110 石器	石鏃	石鏃	510×220	—	Ⅱ	1.4	1.3	0.3	0.9	—	—	—
25	111 石器	石鏃	石鏃	450×250	—	Ⅲ	1.7	1.4	0.4	1.2	—	—	—
25	112 石器	石鏃	石鏃	490×220	—	Ⅲ	1.8	1.6	0.4	1.2	—	—	—
25	113 石器	石鏃	石鏃	400×280	—	Ⅲb	2.1	1.6	0.5	1.1	—	—	—
25	114 石器	石鏃	石鏃	410×270	—	Ⅲb	1.2	1.3	0.3	0.8	—	—	—
25	115 石器	石鏃	石鏃	500×240	—	Ⅲb	2.3	1.4	0.3	0.9	—	—	—
25	116 石器	石鏃	石鏃	390×285	—	Ⅲc	1.2	1.3	0.25	0.9	—	—	—
25	117 石器	石鏃	石鏃	400×260	—	Ⅲc	2.7	2.1	0.5	2.4	—	—	—
25	118 石器	石鏃	石鏃	390×295	—	Ⅳ	2	1.6	0.35	0.7	—	—	—
25	119 石器	石鏃	石鏃	395×275	—	Ⅳ	2.1	1.6	0.3	1.2	—	—	—
25	120 石器	石鏃	石鏃	405×290	—	Ⅳ	2.1	1.3	0.4	1.5	—	—	—
25	121 石器	石鏃	石鏃	410×270	—	Ⅳ	2.4	1.5	0.4	2.1	—	—	—

図号	品名	種類	出土位置	遺構	層位	長さ(cm)	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考
25	122 石磙	石磙	415×235	—	IV	2.3	1.9	0.35	0.8	安山岩	
25	123 石磙	石磙	445×235	—	IV	1.8	1.5	0.3	0.9	黒曜石	
25	124 石磙	石磙	450×235	—	IV	2	1.9	0.4	1.2	安山岩	
25	125 石磙	石磙	400×275	—	IV	3.1	1.9	0.4	2.2	安山岩	
25	126 石磙	石磙	485×210	—	3	1.2	1.1	0.35	0.8	黒曜石	
25	127 石磙	石磙	—	—	赤褐色	2.4	1.7	0.5	2.1	黒曜石	
25	128 石磙	石磙	410×260	—	覆土	2.3	1.3	0.5	1	黒曜石	
25	129 石磙	石磙	315×320	—	覆土上位	1.7	1.6	0.3	1.3	黒曜石	
25	130 石磙	石磙・木製品	445×255	—	V	2.5	2.2	0.4	1.4	黒曜石	
25	131 石磙	石磙	445×260	—	V上	6.2	6.6	0.9	24	安山岩	
25	132 石磙	石磙	430×265	—	IV下	3.6	7.3	0.9	19	安山岩	
25	133 石磙	石磙	455×245	—	IV	2.3	1.8	0.5	1.2	黒曜石	
26	134 石磙	打製石斧	435×245	—	IV	8.6	4.6	1.8	85	角閃片岩	
26	135 石磙	打製石斧	370×310	5019a	最下層	13	5.2	1.9	159	安山岩	
26	136 石磙	打製石斧	465×265	—	V下	10.8	5.2	2	117	安山岩	
26	137 石磙	打製石斧	450×260	—	V上	11.2	6.3	1.3	97	緑色片岩	
26	138 石磙	打製石斧	394×320	5023	4層	10.3	5.4	1.5	88	緑色片岩	
26	139 石磙	打製石斧	423×235	—	IV	7.4	5.9	1.9	83	安山岩	
26	140 石磙	打製石斧	345×345	—	VI	10.9	5.6	2.3	144	安山岩	
26	141 石磙	打製石斧	420×290	—	V	18.6	7.7	2.6	523	緑色片岩	
26	142 石磙	打製石斧	350×310	5017	覆土②c	15.2	9.5	3.6	680	安山岩	
27	143 石磙	打製石斧	375×310	5019a	覆土中位	10.3	5.1	1.2	162	安山岩	
27	144 石磙	打製石斧	440×235	—	IV	12.6	6.3	1.7	124	安山岩	
27	145 石磙	打製石斧	1区	—	—	11.6	6.3	1.7	162	緑色片岩	
27	146 石磙	打製石斧	440×250	—	V	12.9	5.8	2	173	安山岩	
27	147 石磙	打製石斧	445×240	—	IV	7.8	5.5	2.1	125	安山岩	
27	148 石磙	打製石斧	345×315	5017	覆土上位	9.1	7.3	2	212	安山岩	
27	149 石磙	磨製石斧	390×290	—	V	7.6	2.5	1.9	56	安山岩	
27	150 石磙	磨製石斧	470×260	—	IV	5.3	2.1	9.05	15	安山岩	
27	151 石磙	磨製石斧	455×255	—	V	6.3	3.3	1.05	30	安山岩	
27	152 石磙	磨製石斧	400×270	—	V	8.6	3.6	1.2	58	蛇紋岩	
27	153 石磙	磨製石斧	460×250	—	IV	8.5	3.3	1.5	51	安山岩	
27	154 石磙	磨製石斧	480×220	5001	覆土	10	6.3	3	245	黒色片岩	
27	155 石磙	磨製石斧	480×225	5062	覆土①層下	4.8	4.7	1.85	51	蛇紋岩	
27	156 石磙	磨製石斧	430×285	—	IV	3.7	6.6	2.6	62	安山岩	
27	157 石磙	磨製石斧	390×295	—	V下	3.3	4.1	1.3	18	緑色片岩	
27	158 石磙	磨製石斧	455×250	5019a	覆土下位	7	5.6	1.8	96	砂岩	
28	159 石磙	有段砥石	430×290	5058	表面	19.1	11.4	10.9	2,300	砂岩	
28	160 石磙	有段砥石	415×290	—	V上	12	8.8	3.0~3.2	480	砂岩	
28	161 石磙	優石	420×290	—	V	11.4	5.3	4.4	357	砂岩	
28	162 石磙	磨石・砥石	370×310	5019a	覆土最下層	12.6	7.2	5.7	785	安山岩	
29	163 石磙	磨石・砥石	410×285	—	覆土	14.4	11	5.2	1,430	安山岩	

調査番号	図番号	種別	形状	出土位置		層位	法量(㎝)		厚さ	重量	注(化)	石材	備考
				グリッド	通機		長さ	幅					
29	184	石磨	磨石	385×305	S019a	覆土下位	11.4	9.1	4.2	748		安山岩	
29	185	石磨	磨石	375×310	S019a	覆土中位	10.7	9.5	5.7	656		安山岩	
29	186	石磨	磨石	405×280	S038	覆土	8.8	5.5	5	386		安山岩	
29	187	石磨	磨石	475×220	S019b	覆土3	6.9	8.7	5.2	398		安山岩	
29	168	石磨	磨石	—	—	拂土表層	6	7.3	4	269		緑色砂	
30	169	石磨	弁石	410×275	—	V下	22.2	15.9	6.6	3,850		安山岩	
30	170	石磨	石磨	385×305	S019a	覆土上位	0.5	3.6	3.6	261		安山岩	
30	171	石磨	石磨	460×270	—	V上	8.7	8.5	2.6	275		安山岩	
30	172	石磨	円筒形石磨	370×310	S019a	覆土最下層	8.4	8	1.2~1.6	145		安山岩	
30	173	石磨	円筒形石磨	385×305	S019a	覆土上位	8.9	8.1	1.2~1.3	151		安山岩	
31	174	石磨	尖頭器	455×255	—	V下	9.8	4.3	2	67		安山岩	
31	175	石磨	二次加工割片	350×305	S017	覆土上位	9	3.5	1.8	68		安山岩	
31	176	石磨	打製石片?	385×305	S019a	覆土上位	7	8.7	1.6~2.7	209		安山岩	
31	177	石磨	石製品	410×385	—	V上	4.7	3	1.4	27		石英	
31	178	石磨	装身具	400×275	—	IV下	2.2	0.6	0.5	1		肥皂岩	
31	179	石磨	市石質玉	405×275	S010	覆土	1.5	1.5	1.1	4		肥皂岩	
31	180	石磨	石棒	405×290	—	V	9.4	2.3	2.3	67		粘板岩	
32	181	石磨	割片	420×290	—	V上	3.5	2.4	8	6		黒曜石	
32	182	石磨	割片	420×290	—	V上	3.7	2.5	1.1	7		黒曜石	
32	183	石磨	割片	420×290	—	皿c	3.7	2	0.55	3		黒曜石	
32	184	石磨	割片	465×270	—	皿	2.8	1.7	0.6	3		黒曜石	
32	185	石磨	割片	385×290	P2720	覆土上位	2.8	10.4	0.95	1		黒曜石	
32	186	石磨	割片	350×300	S021	覆土上位	4	1.95	0.9	5		黒曜石	
32	187	石磨	割片	350×305	S017	覆土上層	3.05	2.4	7.05	3		黒曜石	
32	188	石磨	割片	460×245	—	V	3.3	2.7	1.1	4		黒曜石	
32	189	石磨	割片	470×255	—	V上	4.2	2.65	0.8	7		黒曜石	
32	190	石磨	割片	510×290	—	皿	2.7	2.3	0.4	3		黒曜石	
32	191	石磨	割片	510×210	P1074	覆土	3.3	2	2	4		黒曜石	

第3表 古代出土遺物観察表

調査番号	図番号	種別	形状	出土位置		層位	法量(㎝)		厚さ	重量	色別	表面	内面	断面	備考
				グリッド	通機		長さ	幅							
34	192	土師器	甕	355×305	S039	覆土	(21.2)	(8.7)			灰色	灰黄色	凹輪ナデ、ヘラケナリ	割片ノ備考 1~2mmの石英をかなり多量に含む。断面が粗い。	
34	193	土師器	甕	350×300	S039	4	(19.0)	(4.7)			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	凹輪ナデ、ヘラケナリ	細かい砂粒(片砂小)をやや多く含む。断面が粗い。	
36	194	土師器	甕	385×275	S067	1	(15.0)	(5.7)			藍色、明赤褐色	にぶい藍色	凹輪ナデ、ヘラケナリ	白色砂粒をやや多く含み得る。少量含む。丁寧な凹輪ナデ。	
36	195	土師器	甕	385×275	S067	0	(18.4)	(4.2)			明赤褐色	明赤褐色	凹輪ナデ、ヘラケナリ	1mm前後の白色砂粒を多量に含む。断面凸面帯は細い。	
36	196	土師器	皿配手	385×270	S067	3	(14.1)	(5.0)			藍色	藍色	凹輪ナデ	白(片砂、石英)、赤、黒砂粒を多く含む。粗いつくり。	
36	197	須恵器	甕	385×270	S067	4	(20.0)	(3.6)			にぶい灰黄色	にぶい灰黄色	凹輪ナデ	細砂粒(白色)をやや多く含む。丁寧な凹輪ナデ。	
36	198	須恵器	甕	385×270	S067	覆土	(14.1)	(10.0)			4.5 藍灰色	4.5 藍灰色	凹輪ナデ	やや砂質。わずかに細かな白色砂粒を含む。重焼痕あり。	
37	200	土師器	甕	390×290	S049	床瓦	(12)	(8.0)			灰黄色	灰黄色	凹輪ナデ	石英、黒砂粒の細砂粒を多く含む。もうい。	
37	201	須恵器	甕	390×295	S049	覆土	(12)	(8.0)			(1.2) にぶい黄褐色	(1.2) にぶい黄褐色	凹輪ナデ	やや粗い砂質。白色の細砂粒を少量含む。矯正なつくり。	
40	202	須恵器	甕	380×280	S038b	覆土	(2.3)	(2.3)			(2.3) にぶい黄褐色	(2.3) にぶい黄褐色	凹輪ナデ	白色、黒色の細砂粒を少量含む。	

遺物観察表

博覧番号	遺物種類	形状	出土位置 グリッド	遺構	位置	色調	長さ (mm)	口径	器原国産		内面	外面	胎土・備考
									内面	外面			
40	須恵器 杯	環	375×290	S238	硬土	(2.4)	青褐色		陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色砂状をやや多く含む。	
40	204	須恵器 杯	375×290	S238	硬土	(14.0)	(9.0)		陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	細かい黄褐色をわずかに含む。	
44	205	須恵器 杯	405×265	—	軟状	(12.8)	(8.6)	3.8 灰黄	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	206	須恵器 杯	410×260	—	硬状	(10.6)	(7.0)	3.2 灰黄	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	207	須恵器 杯	430×245	—	硬状	(6.6)	(4.4)	陶灰・灰黄褐	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	208	須恵器 杯	410×265	—	硬状	(10.4)	(2.1)	陶灰・灰黄褐	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	209	須恵器 杯	390×275	—	IV下	(8.8)	(1.1)	自然焼成	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	210	須恵器 杯	440×245	—	硬状	(12.0)	(0.8)	自然焼成	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	石灰、黒色の細砂状をやや多く含む。	
44	211	須恵器 杯	410×260	—	硬状	(10.0)	(0.9)	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	212	須恵器 杯	405×290	—	IV	(9.2)	(1.9)	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	213	須恵器 杯	415×290	—	硬状	(8.4)	(0.8)	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色の細砂状を少量含む。	
44	214	須恵器 杯	500×265	—	3	(7.0)	(1.1)	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	215	須恵器 杯	427×275	—	V上	(7.6)	(1.6)	灰ナリ	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	216	須恵器 杯	345×320	—	IVc	(14.4)		陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	不定方向ナズ	白色(石灰)灰をやや多く含む。	
44	217	須恵器 杯	410×290	—	IV	(14.2)	4.3	自然焼成	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	細かな黒色粒を多く含む。	
44	218	須恵器 杯	395×275	—	IV下	(16.6)	5.6	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	わずかに黒色粒を含む。	
44	219	須恵器 杯	405×270	—	IV	(1.6)	陶灰	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状を少量含む。	
44	220	須恵器 杯	405×265	P4300	硬土	(2.3)	陶灰・灰黄		陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	流入物(白土?)は見られない。	
44	221	須恵器 杯	405×265	—	IV	(3.2)	灰	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	1mm前後の白色砂状を少量含む。	
44	222	須恵器 杯	435×290	—	IV	(3.4)	灰・灰黄		陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状をわずかに含む。	
44	223	須恵器 杯	400×260	—	I	3.3	自然焼成		陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状を中量含む。	
44	224	須恵器 杯	400×260	—	I	(3.0)	陶灰	灰白	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	細かい白、黒色の砂状をばらばらに含む。	
44	225	須恵器 盃?	405×275	—	IV	(12.4)	3.8	自然焼成	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	石灰、黒色粒(1mm以下)をわずかに含む。	
44	226	須恵器 杯	405×290	—	IVb	(1.3)	自然焼成	陶灰	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(10.0)。	
44	227	須恵器 杯	415×265	—	IV	(2.8)	灰	灰白	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状を多く含む。	
44	228	須恵器 杯	405×295	—	IVb	(1.8)	灰白	灰白	陶磁ヘラケズリ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	流入物はあまり見られない。	
44	229	須恵器 杯	345×295	—	IV	(2.7)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	1mm前後の白色砂状を少量含む。	
44	230	須恵器 杯	405×265	—	IV	(2.7)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	白色、黒色の細砂状をわずかに含む。	
44	231	須恵器 杯	430×275	—	IV	(1.2)	赤褐・陶赤褐	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(9.4)。	
44	232	須恵器 杯	430×275	—	IV	(2.6)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(12.6)。	
44	233	須恵器 杯	410×290	—	IV	(7.9)	(1.2)	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(10.0)。	
44	234	須恵器 杯	400×265	—	IV下	(2.7)	自然焼成	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(10.2)。	
44	235	須恵器 杯	410×265	—	IV	(2.7)	自然焼成	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	236	須恵器 盃	460×270	—	IVb	(1.6)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	237	須恵器 盃	500×200	—	IV	(2.2)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	238	須恵器 盃	410×275	—	IVb	(2.6)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	239	須恵器 盃	410×275	—	IVb	(1.8)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	240	須恵器 盃	470×225	—	IVa	(1.8)	陶灰・灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	241	須恵器 盃	345×200	—	I	(1.8)	自然焼成	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	242	須恵器 盃	400×290	—	IV	(2.7)	陶灰	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	243	須恵器 盃	420×260	—	IV	1.6	自然焼成	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	
45	244	須恵器 盃	425×290	—	IV	(2.1)	自然焼成	陶灰	陶磁ナズ	陶磁ナズ	陶磁ナズ	高台径(11.0)。	

標記番号	遺物種類	出土位置	深さ (cm)		色調		表面状態		内面	胎土/備考
			口径	底径	器高	器径	外周	内周		
47 287	土師器 甕	390×295	IV							胎土/備考
47 288	土師器 甕	385×310	5019	葦土①	(21.0)					細かい黒色粒を含む (3.0mm以下)。 石灰・雲母状、白色砂粒をわずかに含む。

第4表 中出土土遺物観察表

標記番号	遺物種類	出土位置	深さ (cm)		色調		表面状態		内面	胎土/備考
			口径	底径	器高	器径	外周	内周		
51 289	青磁 碗	490×210	5001	葦	(14.6)					胎土/備考
51 290	青磁 碗	490×210	5001	葦	(11.6)					胎土/備考
51 291	瓦質土器 短頸甕	490×210	5001	葦	(15.6)					胎土/備考
51 292	瓦質土器 鉢	480×210	(5001)	葦						胎土/備考
51 293	青磁 碗	490×210	5001	葦	(2.7)					胎土/備考
51 294	瓦質土器 深鉢		5021	葦	(30.2)					胎土/備考
51 295	瓦質土器 甕	490×210	5001	葦	(22.0)					胎土/備考
51 296	瓦質土器 甕	485×210	5001	葦	(28.2)					胎土/備考
52 297	土師器 甕	480×215	5062	葦	(7.4)					胎土/備考
52 298	瓦質土器 甕	480×215	5062	葦	(16.8)					胎土/備考
52 299	瓦質土器 短頸甕	485×215	5062	葦						胎土/備考
52 300	瓦質土器 鉢		5001・下層	葦	5062					胎土/備考
52 301	瓦質土器 甕	485×215	5062	葦	(22.6)					胎土/備考
52 302	瓦質土器 甕	485×215	5062	葦	(28.0)					胎土/備考
52 303	瓦質土器 羽釜		5062・5065	葦	(16.8)					胎土/備考
55 304	青磁 碗	490×205	5065	葦						胎土/備考
55 305	土師器 甕	490×205	5065	葦	10.3					胎土/備考
55 306	土師器 甕	490×205	5065	葦	7.3					胎土/備考
55 307	須石器 甕	440×205	5065	葦	9.4					胎土/備考
55 308	須石器 鉢	495×210	5066	葦	(2.0)					胎土/備考
55 309	瓦質土器 深鉢	490×205	5066	葦	(3.3)					胎土/備考
55 310	瓦質土器 深鉢	490×210	5066	葦	(30.0)					胎土/備考
55 311	青磁 碗	520×230	5002	葦	(12.9)					胎土/備考
55 312	瓦質土器 甕	520×220	5002	葦	(12)					胎土/備考
55 313	白磁 甕	510×230	5002	葦	(3.7)					胎土/備考
55 314	瓦質土器 火鉢	520×220	5002	葦	(28.8)					胎土/備考
52 320	須石器 甕		5019B	葦	葦					胎土/備考

採掘番号	種類	形状	出土位置	法量 (cm)		層位	色調		磨面状態		内面	土質/備考
				口徑	底径		磨面	外磨	内面	外磨		
62 321	青磁	蓋	478×230	5019%	覆土下位	(8.4)	灰白	灰白	磨面	磨面	精造される、黄緑色。	
62 322	磁器	小杯	478×240	5019%	覆土中位	(8.4)	2.6 灰白	灰白	磨面	磨面	精造される。高台径(3.6)。輪：灰白。	
62 323	磁器	碗	475×205	5019%	覆土下位	(11.2)	(5.2) 灰白	灰白	磨面	磨面	精造される。輪：明オリープ灰。	
62 324	瓦質土器	碗	498×220	5019%	覆土	(4.7)	灰	灰	格子目タタキ、ヨコナデ、ヘラ	ヨコナデ、ヘラ	精造される。	
62 325	瓦質土器	碗	475×205	5019%	覆土下位	(3.4)	灰	灰	ヨコナデ	ヨコナデ	白色無釉灰をわずかに含む。	
62 326	須恵器	杯	470×245	5019%	覆土上位	(2.3)	灰褐	にぶい褐	磨面	磨面	精造される。高台径(7.3)。	
62 327	陶器	細鉢	475×205	5019%	覆土上位	(17.6)	黄灰	黄灰	ヨコナデ	ヨコナデ	精造される。輪：灰灰。	
62 328	瓦質土器	細鉢	360×310	5019%	覆土下位	(36.4)	(6.7) 灰白	灰白	縦方向ハケ目後	縦方向ハケ目後	微細な白色砂粒を微量含む。ヨコナデ後の本セットの層目。	
65 329	瓦質土器	細鉢	365×310	5019%	覆土下位	(8.9)	灰	灰	縦方向ハケ目後	縦方向ハケ目後	微細な白色砂粒をわずかに含む。4本セットの層目。	
65 330	青磁	碗	360×305	5019%	覆土下位	(3.6)	灰白	灰白	磨面	磨面	精造される。輪：オリープ灰。	
65 331	青磁	碗	365×305	5019%	覆土下位	(2.0)	灰白	灰白	磨面	磨面	精造される。輪：緑、内面無釉。	
65 332	土師器	碗	300×300	5019%	覆土下位	(6.8)	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	1mm以下の白砂粒、赤土を多く含む。2mm以上の赤・白砂粒を少量含む。	
65 333	瓦質土器	羽蓋	390×300	5019%	覆土下位	(4.4)	灰	灰	磨面	磨面	黒色。白色微砂粒を多く含む。	
65 334	土師器	碗	365×305	5019%	覆土下位	(5.7)	黄褐	灰白	磨面	磨面	微砂粒をわずかに含む。	
65 335	染付	皿	360×310	5019%	最下層	(16.4)	(2.2) 灰白	灰白	磨面	磨面	精造される。輪：灰白。	
65 336	須恵器	蓋	390×310	5019%	覆土下位	(5.2)	(2.8) 灰黄褐	にぶい黄褐	磨面	磨面	1mm以下の黒色微砂粒を含む。つまみ高0.8。	
65 337	須恵器	蓋	360×300	5019%	覆土下位	(2.8)	灰	灰	磨面	磨面	精造される。	
65 338	須恵器	杯	390×300	5019%	覆土下位	(1.3)	灰	灰白	磨面	磨面	精造される。	
65 339	陶器	細鉢	365×305	5019%	覆土下位	(4.6)	灰褐	灰褐	磨面	磨面	白色微砂粒を含む。高台径(9.4)。	
65 340	瓦質土器	細鉢	365×290	5019%	覆土15層上層	(7.2)	灰	灰	磨面	磨面	微細な白色砂粒を含む。17本セットの層目。	
65 341	瓦質土器	蓋	370×310	5019%	最下層	(19.2)	(7.5) 灰	黄灰	格子目タタキ、ヨコナデ	格子目タタキ、ヨコナデ	白色微砂粒をごくわずかに含む。	
65 342	土器	平瓦	430×240	5019%	II 相当		黄灰	黄灰	磨面	磨面	1.0mm次の白色砂粒をわずかに含む。長さ5.0 幅4.9 厚さ1.8 凹面に刻印あり。	
65 343	土製品	瓦	360×310	5019%	内層		にぶい黄褐	にぶい黄褐	磨面	磨面	1.0mm以下の白色、黒色砂粒を含む。長さ(8.7) 幅(3.2) 厚(3.1)。	
65 344	陶器	碗	365×310	5019%	覆土下層	(18.8)	(6.2) 灰	灰	磨面	磨面	1.0mm以下の白色砂粒を含む。	
65 345	瓦質土器	蓋	360×305	5019%	内層	(18.6)	(3.5) 灰	灰	磨面	磨面	微細な白色、黒色の微砂粒を含む。	
65 346	瓦質土器	蓋	375×310	5019%	覆土上位	(38.6)	(4.5) 灰	灰	ヨコナデ	ヨコナデ	白色砂粒、黒粒を多く含む。灰り付付後横方向ナデ。	
65 347	瓦質土器	大鉢	405×305	5019%	覆土中位	(18.7)	(6.1) 灰白	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	白色、黒色の微砂粒をわずかに含む。幅に2.0mm次の砂粒を微量含む。	
65 348	須恵器	蓋	390×310	5019%	覆土中位	(18.2)	(2.9) 灰黄	にぶい黄	磨面	磨面	精造される。輪：にぶい黄褐。蓋目7本単位。	
66 349	陶器	細鉢	380×310	5019%	覆土上位	(31.0)	(5.9)	にぶい黄	磨面	磨面	1.0mm以下の白色微砂粒を含む。赤色の微砂粒も多く含む。	
66 350	土師器	小皿	395×305	5019%	覆土上位	(8.2)	2.0 橙	橙	磨面	磨面	精造される。高台径10.0 高台高0.8。	
66 351	須恵器	杯	375×310	5019%	覆土上位	(2.3)	にぶい黄褐	にぶい黄	磨面	磨面		

遺物観察表

遺物番号	遺物種類	出土位置	形状	材質	法量 (cm)	口徑	底徑	器高	外蓋	色調	内蓋	器蓋設置	内蓋	跡土ノ備考
66 352	瓦葺土器	堀鉢	375×310	5019a	覆土上位	(13.6)	(2.6)	灰	(4.6)	灰褐	灰褐	円形ナズ	6本単位の内蓋	白色微砂粒は、0.1mm程度の石灰粒をわずかに含む。
66 353	陶器	鉢	365×315	5019a	内蓋			(4.6)	灰白	灰白	灰白	円形ナズ	白色微砂粒を含む。内面磨光。底、黒。	
66 354	陶器	鉢	405×300	5019a	覆土D			(3.7)	灰白	灰白	灰白	円形ナズ	粗選される。跡：オリーブ灰。	
66 355	陶器	碗	395×305	5019a	覆土D			(2.7)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選される。跡：オリーブ灰。	
66 356	灰付	碗	405×300	5019a	覆土D			(2.7)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選される。跡：オリーブ灰。	
66 357	陶器	堀鉢	385×305	5019a	覆土D	(9.6)		(3.6)	相灰	相灰	相灰	円形ナズ	粗選される。跡：緑灰、高砂0.5。	
66 358	陶器	碗	390×310	5019a	覆土D			(3.5)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選される。跡：緑灰、高砂0.5。	
66 359	青磁	碗	385×310	5019a	覆土D			(3.2)	緑	緑	緑	圓形ナズ	粗選される。高台高1.1。高台径5.4。	
66 360	須置器	長須置	420×295	5019a	覆土D			(4.3)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	1.0mm以下の白色微砂粒を含む。肩厚径(17.0)。	
66 361	陶器	碗	370×310	5019a	覆土D			(2.7)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選される。高台高1.0。高台径5.4。	
66 362	陶器	碗	395×305	5019a	覆土D			(3.8)	黒褐	黒褐	黒褐	圓形ナズ	粗選される。跡：暗青。高台径(7.2)。高台高1.1。	
66 363	陶器	鉢	385×310	5019a	覆土D	(30.6)	(19.0)	9.9赤褐		赤褐	赤褐	円形ナズ	白色微砂粒を含む。跡：灰オリーブ・灰白 つまみ径(5.3)。	
70 364	瓦葺土器	堀鉢	350×310	5017	覆土下位			(6.9)	灰白、にぶい	灰白、にぶい	灰白、にぶい	椀方向ナズ	白色粒(石灰、長石)の細粒を多く含む。器厚0.9~1.0。指目。	
70 365	瓦葺土器	堀鉢	350×310	5017	覆土下位			(7.2)	灰	灰	灰	椀目	2~3mmの白色粒を多く含む。器厚0.9~1.1。指目。	
70 366	瓦葺土器	堀鉢	315×315	5017	覆土下位			(3.3)	灰オリーブ	灰オリーブ	灰オリーブ	ナズ	0.1mm程度の砂粒をわずかに含む。器目8本単位。	
70 367	青磁	碗	340×315	5017	覆土下位			(2.9)	灰白~灰黄緑	軸	軸	圓形ナズ	粗選。高台高1.2。高台径7.2。跡：黒色鉄を帯びた。	
70 368	須置器	椀	350×310	5017	覆土下位			(3.7)	灰黄	灰黄	灰黄	圓形ナズ	やや粗い細かい砂粒を多く含む。高台径8.6。器厚0.4~0.9。	
70 369	須置器	盆	365×305	5017	覆土上位			(1.8)	灰オリーブ	灰オリーブ	灰オリーブ	不定方向ナズ	細かい砂粒を含む。	
70 370	陶器	碗	335×315	5017	覆土上位	(18.4)		(3.2)	灰黄緑	灰黄緑	灰黄緑	圓形ナズ	白色の細砂粒を少量含む。器縁(指目)。	
70 371	陶器	碗	360×310	5017	覆土上位	(17.2)		(3.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	オリーブ灰	圓形ナズ	細かい砂粒をやや多く含む。ロクロナズ後蓋縁。	
70 372	青磁	碗	340×310	5017	覆土上位			(4.9)	オリーブ灰	灰白	灰白	圓形ナズ	やや粗いごく細かい砂粒を含む。	
70 373	灰付	碗	335×315	5017	覆土上層	(11.4)		(3.7)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選。細かい黒色粒を少量含む。	
70 374	須置器	椀	350×305	5017	覆土上位	(11.4)	(7.4)	(3.0)	黄褐	暗黄褐	暗黄褐	圓形ナズ	やや粗い細かい砂粒を多く含む。	
70 375	灰付	皿	315×320	5017	覆土上位			2.4	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	細かく粗。高台径4.0。高台高0.5。器厚。にぶい。	
70 376	灰付	鉢	340×310	5017	覆土上位	8.6		(3.8)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選されている。高台径(4.2)。高台高(0.9)。ロクロナズ後蓋縁。	
70 377	陶器	盆	335×315	5017	覆土上位	(20.4)		(6.1)	自然緑	暗赤褐	暗赤褐	圓形ナズ	粗選されている。器厚(15.0)。高台高(10.0)。指目。にぶい。	
70 378	青磁	盆	350×310	5017	覆土上位	(17.4)		(1.4)	オリーブ灰	オリーブ灰	オリーブ灰	圓形ナズ	粗選されている。内面に細磨非黒の文様あり。	
70 379	灰付	鉢	340×310	5017	覆土上位	(12.6)		(2.0)	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	やや粗い白色砂粒を多く含む。黒色土を極わずかに含む。ロクロナズ後蓋縁。	
70 380	陶器	碗	340×315	5017	覆土上位	(7.8)		(5.2)	灰褐、灰黄褐	軸、淡黄、暗オリーブ	圓形ナズ	やや粗い白色砂粒を多く含む。把手8.0。厚さ1.1~1.3。		
70 381	土器	短脚	385×305	5017	覆土②a				にぶい	にぶい	にぶい	ナズ	粗選される。高台径(5.1)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 382	灰付	短脚	360×310	5017	覆土②b	(12.5)		5.9	緑 灰白	灰黄	灰黄	圓形ナズ	細かく粗。高台高(5.1)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 383	灰付	小杯	330×315	5017	覆土②a	(6.6)		3.2	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗かく粗。高台高(5.3)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 384	灰付	碗	330×315	5017	覆土②a			(2.7)	灰黄	灰白	灰白	圓形ナズ	粗かく粗。高台高(5.3)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 385	灰付	碗	345×310	5017	覆土②a	(8.0)		5.2	灰白	灰白	灰白	圓形ナズ	粗かく粗。高台高(5.3)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 386	陶器	碗	360×310	5017	覆土②a	(7.6)		5.4	灰オリーブ	灰白	灰白	圓形ナズ	粗かく粗。高台高(5.3)。高台高(2.8)。跡：灰白 灰黄。にぶい。	
70 387	陶器	工瓶	330×315	5017	覆土②				明オリーブ	灰白	灰白	圓形ナズ	粗選されている。黒色粒をわずかに含む。	

探洞番号	出土位置	色調				形状・重量				備考	
		器種	口径	底径	高さ	内面	外面	内蓋	外蓋		
79 423	土師器 杯	340×330	3030	12.0	7.2	2.7	2.1	2.1	2.1	黒い黄緑 におい強	陶土ノ儀 黒い白色砂、黒色の砂、黒色を含まない。 粒の大きな石灰、炭粉也、微砂を含む。
80 425	土師器 杯	465×395	5945	(13.6)	10.2	3.9	—	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、磁胎、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 426	青磁 碗	445×335	—	—	—	(1.9)	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 427	青磁 碗	350×330	—	—	—	(2.2)	灰黄	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 428	青磁 碗	465×390	—	—	—	(4.4)	灰白	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 429	青磁 碗	465×370	—	—	—	(3.6)	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 430	青磁 小碗	450×350	—	—	—	(2.8)	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 431	青磁 碗	470×345	—	—	—	(2.9)	におい黄緑	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 432	青磁 碗	340×310	5017	—	—	(3.8)	オリーブ灰	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 433	青磁 碗	460×375	—	—	—	(4.8)	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 434	青磁 碗	460×390	—	—	—	(2.3)	灰白	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 435	青磁 皿	415×270	—	—	—	(2.3)	灰白	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 436	青磁 碗	510×320	—	—	—	(3.0)	灰黄	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 437	青磁 碗	470×320	—	—	—	(2.5)	におい黄緑	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 438	青磁 碗	—	—	—	—	(2.5)	オリーブ灰	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 439	青磁 碗	—	5062	—	—	(3.5)	灰白	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 440	青磁 碗	—	—	—	—	(7.35)	灰白	—	—	灰白	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 441	土師土器 罐鉢	485×215	5062	—	—	(6.5)	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 442	陶器 罐鉢	350×319	—	—	—	(6.4)	におい黄、赤褐	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 443	土師土器 土鉢	370×325	5029	—	—	7.6	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。
80 444	土師土器 土鉢	445×365	—	—	—	—	灰黄	—	—	灰黄	黒色の細砂をわずかに含む、黒燐、黒燐；灰オリーブ、黒い灰入。

第5表 中世出土石製品観察表

探洞番号	器種	形状	出土位置		重量	備考			
			グリップ	底					
56 315	五輪塔	火輪	490×210	5001	38.0	15.6	11.3	磁灰塔	黒化が著しい。
56 316	五輪塔	火輪	490×210	5001	24~26	14.5	7.6	磁灰塔	黒化が著しい。
56 317	五輪塔	水輪	490×205	5065	34.0	15.0	6.4	磁灰塔	黒化が著しい。
56 318	五輪塔	水輪	490×205	5065	27.4	14.0	6.5	磁灰塔	黒化が著しい。
56 319	五輪塔	水輪	490×205	5065	11.3~12.5	(17.3)	1.5	磁灰塔	黒化が著しい。

第6表 遺物観察表

探洞番号	器種	形状	色調				備考		
			口径/高さ	底径/高さ	内面	外面			
81 445	石鉢	三輪尖頭部	465×365	5096	12.1	3.6	—	—	陶土ノ石鉢
81 446	石鉢	石包丁	415×300	—	4.2	10.6	—	—	粘灰塔
81 447	赤土器 甕	440×245	—	I	(10.2)	(6.0)	明赤色 明赤色	ナデ	1mmの白色砂、細かい白色砂を少含む。
81 448	赤土器 甕	460×265	—	V上	(11.4)	(7.0)	暗 産	ナデ	細かい白色砂を少含む。
81 449	赤土器 甕	450×275	—	I	(12.0)	(7.8)	暗 産	ナデ	大きな1~3mmの白色砂、黒色の細砂を多く含む。